

し
な
が
と
り
あ
は
ゆ

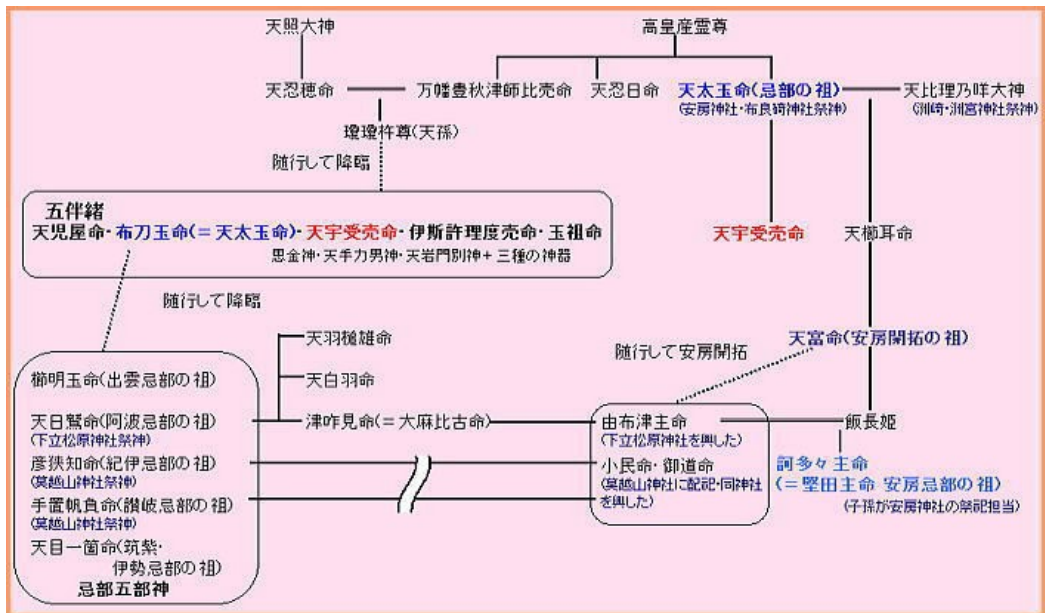


図1 天孫降臨～安房開拓までの主要人物相関図

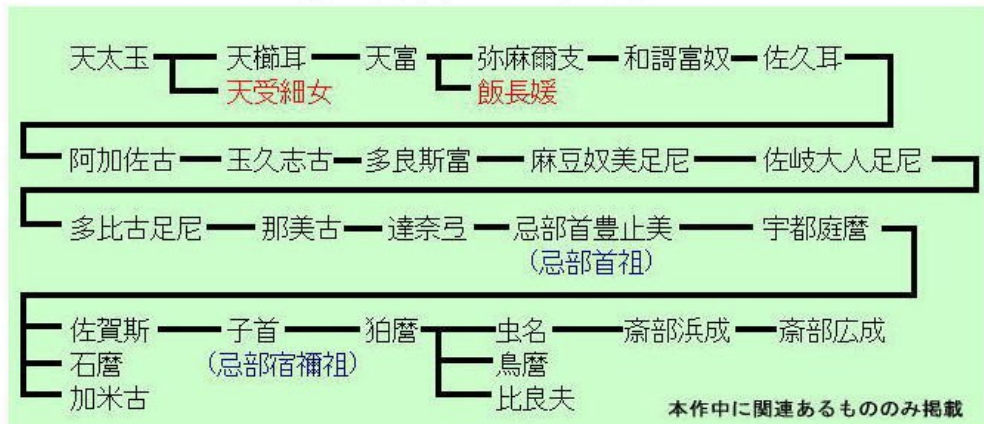


図2 忌部(斎部)氏系譜(略図)

始まりと終わり。万物が等しく負っている通るべき筋道。大きなものもあれば、些細なものもあって、そうやって突き詰めればすべてが始まりであり、すべてが終わりでもある。

まだ覚めきれていない頭で、ぼんやりと思います。仕事でやってきていた、某キャンプ場のバンガローは独りで寝るには怖いくらいにがらんとしていて、昨夜はよく怖くならなかったものだな、と自分自身に感心してしまいそうですが、思えばいつ寝たのかすら記憶がありません。どうやら疲れ果てていたらしく、怖いなどと感じるまでもなく落ちてしまったようです。着の身着のまま、靴下もそのままならば帽子までそのまま。コンタクトレンズだけは何とか外しているようですが、それ以外はなんとも…と。自身のことながら、なかなかに迫力ある有様でした。

千葉県勝浦市。今朝、目覚めそして出発した場所です。古歌紀行を始めるようになってから、これまで抱いていたイメージが、大きく変わってしまった土地は複数ありますが、その中でも恐らく、現時点で筆頭格と言えそうなのが間違はなく上総や安房といった千葉県の南側でしょう。かつては真冬でも暖かく、風光明媚な土地という意味で、伊豆や南紀と似た印象をもっていたのですが、今では違います。

はい、「なつそびくうなかみがたゆ」で書いた通り、ここは古代に於いてまさしく最果ての一つ手前の地。古東海道（うみつみち）を辿り辿って、走水の海（現・浦賀水道）を渡ることと届く辺境、あるいは異界とも言うべき地です。そしてもう一つ。西から来た為政者たちによって平定・支配・恭順させられた土地、です。

支配・被支配。どちらがどうだ、と言うのではなく、けれどもそこへ確かに衝突なり、交感があったのち、混ざり合った、という過程はどうしてかすかに物哀しいのでしょうか。失われてゆくものへの哀惜ばかりが勝って、そこから新たに生まれようとしているものへの期待や、実際に生まれ

たものへの歓喜が何故、先立つことはないのかしら。そんな風に思ってしまう。

かつて抱いていた温暖で風光明媚な南房総に、何処か哀しい藍色のような紗を被せてしまうのは、あるいはわたし個人の感じ方故、…なのかもしれません。でも、だからこそ今回は、そんな哀しさとは全く違うものを。新たに生まれようとしているものや、実際にうまれたものを。きつと感じることが出来るはずで、きつと。

「…さあ、ゆこう」

珍しく、自分自身への掛け声が漏れました。営業車にエンジンを掛けて、最初の訪問地へ出向きます。

(一)

たちこもの立ちの騒ぎに相見てし妹が心は忘れせぬかも

長狭郡上丁丈部与呂麻呂「万葉集 卷二十四三五四」

勝浦から鴨川まで南下して、ハンドルを右に切ります。この辺りは、房総半島の先端に比較的近く、ぼんやり運転していようものなら外房側から一気に内房側へ、走破してしまえるくらいの幅しかないのですが、そのちょうど中間くらいまでを目指します。

向かおうとしているのは、真福寺。現在の地図だと鴨川市に含まれますが、その西部。大幡という集落にあるお寺さんです。…といって実際には、お寺さんそのものと前記引用している万葉歌が、直接的に関わっているわけではありません。ただ敷地内に歌碑がある、とのことですから立ち寄る

ことを決めた次第。

「飛び立つ鴨たちのように、あるいは風に吹かれて鳴る立ち薦のように、防人へと発つ時の騒ぎの中で、共寝した愛しい妻の想いは忘れることなどできない」

長狭郡より防人へと召された与呂麻呂は謡います。すでに「さねさしさがむゆく足柄峠」や「なつそびくうなかがたゆ」で書いている通りあの当時の、しかも東国の者にとっては防人へ召されるのは命がけでした。三年という任期はあくまでも筑紫での期間であって、その前後の行程は任期の対象外。当然、実質的には四年～五年は掛かるのが通常でしたし、往路はもちろん自弁。路銀が尽き、行き倒れになる者が後を絶たない、というお役目です。そしてその一方で一家の働き手を失い、国に残される家族にとっても厳しく、辛い任期となるもの。それが防人でした。

題詞：足柄の坂を過ぎて死れる人を見て作る歌一首

小垣内の 麻を引き干し

妹なねが 作り着せけむ

白栲の 紐をも解かず

一重結ふ 帯を三重結ひ

苦しきに 仕へ奉りて

今だにも 国に罷りて

父母も 妻をも見むと

思ひつつ 行きけむ君は

鶏が鳴く 東の国の

畏きや 神の御坂に

和妙の衣寒らに

ぬばたまの髪は乱れて

国問へど国をも告らず

家問へど家をも言はず

ますらをの行きのまにまに

ここに臥やせる

田邊福麻呂「万葉集 卷九 一八〇〇」 田邊福麻呂之歌集より撰

「垣の内の麻を引き抜いて干しては妻が作り、着せたであろう白い着物の紐も解かず、一重の帯を三重に結ぶほど痩せ、苦しい任務を果たしてようやく今、国に帰り父母や妻に会おう、と思いがら東下りしたあなたは、東国の恐れ多い神が御座す足柄の御坂で、御霊を包む衣も寒々とし、髪は乱れ、国を尋ねてもその国を言わず、家を尋ねてもその家を言わず、堂々たる男子が、遠い旅路の果てにこうしてここに横たわっていることだ」

凡防人。向防及番還。在道有身患。不堪涉路者。即付側近国郡。給糧并医薬救療。待差堪行。然後發遣。仍移本貫及前所。其身死者。随便給棺焼埋。若有資材者。申送兵部。令将将還本家。

「軍防令 六十一 防人番還条」

「防人が防に向かうとき及び、当番から帰郷するとき、路上で病にかかりそれ以上、進みゆくのに耐えないことがあれば、すぐに近くの国郡に預け、食料ならびに医薬を給付し救命治療すること。行程に耐えるほど治るのを待ち、然る後に發遣すること。そして本籍地及び以前いた地へ移すこと。」

死亡したならば、状況に応じて棺を給付し、焼き埋葬すること。もし資財があれば、兵部省に申し送り本人の家へ持ち帰らせること」

防人の任務を終え、筑紫より東国へと帰る途上の悲劇。それは福麻呂が謡った万葉歌や、当時の法であった軍防令にも垣間見られます。…法で定める必要があった、すなわち定めなければならぬ背景があった、ということですね。

それが防人、そしてそれに今から発とう。そんな切羽詰った時ですから、きつともしかするとこれが今生の別れとなるやも…、との思いもあつて共寝した妻。恐らくは、離れたくない、とか行かないで欲しい、寂しいなどなどの想いなのでしょうが、そんな彼女の気持ちを忘れることができない、といった感じででしょうか。

「たちこもの」は「立ちの騒ぎ」を導く枕詞。こも、は鴨の東国訛とも、薦とも言われていますが、いずれにせよ騒がしい様子です。鴨が飛び立ったり、薦を編んだ立ち薦が風に煽られてはたはた鳴ったりすることによる枕詞でしょう。

件の歌から感じ取った勝手な印象ではありますが、与呂麻呂は農民とはいえ暮らし向きはそれほど窮してはいなかったのかもしれない。それと恐らくはまだまだ若かったこともなんとなく伝わります。彼に関する詳細は一切判りませんので、いろいろ思い描いても見るのですが。…それと、歌は巧いなあ、としみじみ思います。

他の防人歌と読み比べれば判りやすいのですが、往々にして妻恋歌を朗々歌っている場合、生活はそれほど困窮していないのだろうな、と受け止められます。出立に際して、最も気に掛けていることを、やはり人は謡うのでしょうから。その一方で、残してゆく家族のこれからの生活について

などを切々と謡っていると、…と。きっと切実だったのだろう、と感じられるのは邪推ではないでしょう。

但し、生活を謡っていたとしても、これが

「天皇の部民としてお勤めを云々」

などというものだったならば、それはもう土地の有力者の息子なり、本人なり、というケースが多いのは、おのずと判ってしまいますね。

車窓を流れる景色は、めまぐるしく変化します。ついさっきまでは海岸部。それから一気に内陸へ向けて登り続ければ木々が生い茂り、そして今。周囲にはのどかな水田が広がっています。長かった梅雨も明け、子どもたちは夏休みに突入しました。あとは八月を、真夏を、待つばかりという田圃は本当に目に痛いくらいの鮮やかな緑で、青い草の匂いも辺り一面満ちています。

目印にしていたバス停を過ぎ、そろそろ一旦、車を停めないで。ですが、停めるのはいいとしても肝心な、道を尋ねられそうな人が誰一人歩いていません。事前に調べた範囲では、バス停から一分という立地ですから、ぐるりを見渡せば見つかるかと思いきや、それも叶わず。今日は、ちょっと予定をぎゅうぎゅうづめにしているので、できればこんなに早い段階で躓きたくないんですけれどね。

夏特有の咽るような砂埃が立ち昇り、油照りしている県道はちよつと気を抜くとへなへなと座り込んでしまいたくなるような、静寂の底に横たわります。自分の足音と息と、稲が揺れる音だけが響き、何だかほんの十mが数百mにも感じられそうです。

ふいに聞こえてきたのは、楽しそうな女性二人の喋り声。どうやら少し先の大きな垣根のお宅から聞こえて来ているようです。時折、笑い声を織り交ぜながらの縁側談義なのか井戸端会議なのか。



真福寺境内に建つ歌碑。

「…ごめんください」

垣根越しに声を掛けると振り返ったのは二人のおかあさん。真福寺の場所を尋ねると

「ほら、そこだよ」

とお言葉。けれども指差す先にそれらしきものは見えず、

「ええっと…」

「ああ、違う違う。そんな遠くじゃなくて、ほら、道路渡ったそこ」

「…えっ」

わたしの目の前には県道が走り、それを渡った「そこ」って一体、と見上げてみれば高く茂った垣根の先に確かにお寺さんらしき屋根。県道よりは少しだけ高い位置に建てられているお寺さんのようで、しかもまたなんとも綺麗で近代的で

して…。

おかあさんたち曰く、お寺さんの境内に車を乗り入れても平気だよ、とのことだったので路肩に停めていた車をＵターンさせて、境内へ。そこには想像していたのとは凡そ繋がらない、二十一世紀のお寺さんがありました。

境内に入って左手すぐには、件の万葉歌の歌碑。また、その隣には歌の解説をしている石碑が立っています。

このさきもりの歌は天平勝宝七年二月九日（七五五年）朝廷に奉り、万葉集卷第二十に

取戴されてもので、妹（いも。妻・愛しい人）との別離の哀愁を詠んだものです。

長狭郡（なかさのこほり）は鴨川市とその周辺の古称です。

上丁（かみつよろぼ）は兵士の階級です。

丈部（はせつかべ）は馳せ使いの部民のことで、郷の名です。当地大幡と隣接の旧

大山村の地域といわれ、この地大幡小宇作掛は古く作壁と書き、地元では今に、さつかべ
と言いつつ慣れて、はつせつかべの転訛したもの、と伝承されています。

防人（さきもり）はこの地より遠く難波を経、瀬戸内海を筑紫に赴いて、三年の間北九州の防衛の任に当たったのです。

その労苦を偲んで、古代の人の心に触れたいものです。

真福寺境内の石碑「たちこもの抄」

安房国。天平期、この国は少し政治に翻弄されました。つまり、養老二年にお隣・上総国の平群・安房・朝夷・長狭の四郡をもって安房国として分離独立。けれども天平十三年には、再び上総国に併合されてしまい、天平宝字元年。ようやく国として確立できています。

乙未、越前国の羽咋・能登・鳳至・珠洲の四郡を割きて始めて能登国を置く。上総国の平群・安房・朝夷・長狭の四郡を割きて安房国を置く。陸奥国の石城・標葉・行方・宇太曰理と常陸国の菊多との六郡を割きて石城国を置く。白河・石背・会津・安積・信夫の五郡を割きて石背国を置く。常陸国の多珂郡の郷二百一十烟を割きて名けて菊多郡と曰ひて石城国に属く。

「続日本紀 卷八 元正天皇 養老二年（七一八年）五月二日」

十二月丙戌、外従五位下秦前大魚を参河守とす。外従五位下馬史比奈麻呂を甲斐守。外従五位下紀朝臣廣名を上総守。外従五位下守部連牛養を下総守。従五位下阿倍朝臣子嶋を肥後守。安房国を上総国に并せ、能登国を越中国に并す。

〔続日本紀 卷十四 聖武天皇 天平十三年（七四一年）二月十日〕

乙卯、勅して曰はく、

「頃者、上下れる諸使、惣て駅家に附ること、理に於て穩にあらず。亦、駅子を苦しめむ。今より以後、為ら令に依るべし。その能登・安房・和泉等の国は旧に依りて分ち立てよ」とのたまふ。

〔続日本紀 卷二十 孝謙天皇 天平宝字元年（七五七年）五月八日〕

一方「たちこものゝ」を含めた防人歌の多くは題詞に

天平勝寶七歳乙未二月、相替りて筑紫に遣はさるる諸国の防人等の歌

「万葉集 卷二十」

とありますから、少なくとも歌そのものが謡われた時、そして採られた時。安房国は地上に存在していませんでした。なのでこういう左注も書き添えられているわけです。

二月九日、上総国の防人部領使少目従七位下茨田連沙弥麻呂が進れる歌の数は十九首なり。但し拙劣なる歌のみは取り載せず。

「万葉集 卷二十」左注



真福寺の境内。

「上総国の」と明記されていますね。

じりじりと暑い夏のお昼前。いやに小綺麗なお寺さんと、撮影するわたし自身が写りこんでしまうくらい、ぴかぴかに磨かれた石碑たち。やや小高い位置の境内に敷き詰められた玉砂利が鳴る音と、肌を灼く陽射しとが相まって実際以上の暑さを感じていました。

果たして与呂麻呂は無事、勤めを終えて、再び安房へ帰還することが出来たのでしょうか。あるいはそれとも…。万葉歌は何も答えてはくれません。ただ、出立する際の、彼の胸に最もあったことだけを語るのみ、です。

たちこもの立ちの騒ぎはいかにあれど祈ひ待むもののふたつなきかも 遼川るか

(於：真福寺境内)

それまでの、半ば南国にも近かった印象が、一変してしまった安房国。その一つの現われとして

ある、万葉歌を刻んだ歌碑に低く低く、一礼している自分がいました。

(二)

万葉集に採られている東国の歌。それは何も、防人歌だけではありません。万葉集の巻十四。すでに「さねさしさがむゆく足柄峠」や「なまよみのかひゆ」などで書いていますが、これが丸まる一卷、東歌で編まれているんですね。ですが、ここに収録されているのは上総、下総、常陸、信濃、遠江、駿河、伊豆、相模、武蔵、上野、下野、陸奥、の十二ヶ国。甲斐、安房のものが全くありません。その理由はやはり、先述した安房という国が存在しなかった時期に、万葉集の巻十四がある程度編まれたからだ、とされています。：甲斐は純粋に採られなかったのでしょうかね。

ですが、同じく万葉集の巻十四には「未だ国を勘へぬ○○歌」という括りが巻末にあります。すなわち、東歌には違いのないのだけれど、どこの国のものなのか、未だに判明していない歌ですよ、ということですね。：勝手な推測ですが、おそらくは巻十四の編纂時にはすでに、人々が口々に謡う程度には流布・浸透していた民謡を編んで巻末に、という意図なのでしょう。そしてこの中に、おそらくは安房の国のものであろう、とされている歌があります。

安波峰ろの峰ろ田に生はるたはみづら引かばぬるぬる我を言な絶え

作者未詳 「万葉集 巻十四―三五〇一」

真福寺を後にして、国道四一〇号を一気に南下し始めると、周囲の景色はそれまでと一変します。

つまり、房総半島の東西のちょうど真ん中あたりを、南下しているわけで、当然ですがそれなりの山道になるんですね。

実際、房総半島には高山は存在していませんが、海拔の低い海岸部に対して、内陸部は当たり前ですけれど、標高が違います。三百m〜四百mくらいの低山がずっと続き、その間を縫うように走っているのが、国道四一〇号線、となりますか。

安波峰ろ。読んで字の如し安波の峰、という意味になりますけれど、この安波。これがどこなのかは「未だ国を勘へぬ」ということでして、けれども最も有力な説で語るならば、安波Ⅱ安房、ということですね。では、その安房の山々といったらどこの辺りになるのかしら、と。…もちろん、特定も限定もできません。が、個人的には現在の南房総市。国道四一〇号を千倉界隈まで抜ける一帯の山々のことではないか、と感じます。…いえ、これといった論拠も根拠もないのですが、車で走ってみて、何となく。

「安波の峰の棚田に生えるたわみ蔓をずるずる引き寄せるように解けない仲になって、わたしたちの仲をどうぞ、絶やさないでくださいね」

謡われている「たはみ蔓」という植物は、現代だとヒルムシロと呼ばれる水草だ、といいます。何でも浮遊性の水草らしく、なるほど。端を引っ張ろうものなら、ずるずるとたくさん茎や葉まで繋がってきってしまうのでしょうか。水田に生える雑草としてかつてはかなり嫌われていたようですね。いまでは逆に見かけるのも珍しくなりつつあるようですが。

…いくら水田に多く生える雑草だとしても、山の中の棚田ですから、それなりに近くに川なり、池なりがないと、そもそも田に水が引けませんし、こういう歌にならないんじゃないのかな、と愚

考しています。その点、この界限ならば近くに河川もあり、山中とは言えども大丈夫なのではないか、と。

…まさくし東歌、すなわち民謡なのでしょね。というのもこの歌の三句以降には、類歌が複数ありますし、もちろん万葉集にも採られています。

入間道の於保屋が原のいはゐつら引かばぬるぬる我にな絶えそね

作者未詳 「万葉集 卷十四―三三七八」

上つ毛野可保夜が沼のいはゐつら引かばぬれつつ我をな絶えそね

作者未詳 「万葉集 卷十四―三四一六」

余談になりますが、上古から始まって歌というものを時代ごとに追いかけてゆくと、本当に色々なことを考えさせられます。例えるならば発祥当時は本当に市井の、あえて語弊を招くことを恐れずに語るならば、下賤のものとされていた歌舞伎が、現代では古典芸能として芸術的な評価されていることであつたり。作られた当時は純粹に生活用具であつたはずの古民具、土器、などなどが現代では、学術的見地から。あるいは芸術的見地から。珍重されていたり、など。

そもそも、先にあつたものは生活であり、芸術や学術的価値は後世が評価・認識したものですし、そもそも芸術なり学術、という概念すらも、人々の生活よりずっと後から来たものです。なので、和歌ないしは古代歌謡というものも、そういう後世的なフィルター越しではなく、もっとシンプルに捉えていいのだ、とわたしは思うのです。

わたしたち現代人の感覚では、替え歌や真似っこなどはある種のおふざけであつたり、子どもた

ちのお遊びの範疇でしかないのかもしれませんが。宴会芸の延長、あるいはそのものであるのではないかと。

ですが、古代の人々が日々の生活の中で自然と口ずさみ、それを周囲と一緒に歌い真似るようになり、やがてはその地域一帯に根付いてゆく。それこそが民謡であり、古代歌謡の本来であるとするならば、件の万葉歌たちの類歌があるのはとても自然なこと。もつと言ってしまうればそれが必然。

時々、心から思うのです。もちろん、恋や生活の苦労などは別なのですが、こういった古代歌謡は、何も知らなかった、何も考えなかった、童心に戻らないと理解できないのではないかしら、と。剽窃だとか、芸術性だとか、学術的価値だとか。

現代社会に四十年以上も生きていると、良くも悪くも現代の価値観に染まってしまっていますし、それによって見えなくなってしまうものが、本当はどれくらいあるのどうか、と。

子ども心に、五線譜も音符も知らず、けれども即興で歌を作ったことはそれなりにありましたね、わたし自身にも。時には、どこかで聞いて耳に残っていた言葉を借りたり、誰かが即興で作ったものの二番を自分が作ったり。…あれとほぼ同じ感覚でそもそも古代歌謡というものは成立しているのだと、最近富に思うようになりました。

余談ついになります。本歌取りというものを最初に中学だったか、で教わったとき。不思議に思ったものでした。もう、その頃にはいわゆるパクリ、とか盗作という言葉も知っていましたし、同時にイコール良くないこと。そんな印象だっけ心には刻まれていました。だからこそ、学校の授業で習う、それも現代国語よりはずっと、なんと言いますか。高尚であったり、アカデミックであったりするように感じる古典文学の、一つの技巧として本歌取りというものに最初に触れたとき。何だかよく判らない違和感を覚えたこと、今でも記憶しています。

その労苦を偲んで、古代の人の心に触れたいものです。

真福寺境内の石碑「たちこもの抄」抜粋・再引用

あの何気ない石碑の一文が宿している重み。これに気づけるようになるのにも、本格的に上代文学と向き合うようになってから、かれこれ二十年を要してしまっているわたしがいます。いやいや、本当に。必要な遠回りなのかもしれませんが、改めて自身の未熟と、けれどももう気づけたという事実が、お腹の底のほうで柔らかな重みとなって伝わってきました。

ともあれ、たはみづらです。類歌に詠まれているいはゐつらは、現代でいうところのスベリヒユだとされていますけれども、どうなんでしょうね。スベリヒユ自体は畑の雑草として今でも、ここでも見かけますし、ただ結構簡単に抜ける雑草だったような…。あと食べられるのも知っていますけれど、それほどぬめりが強かったですかね。何となく、歌の印象とは合致していない気がします。

一方のヒルムシロ。こちらでも少し調べてみたのですが、近年ではずいぶん減ってしまっている、もしかしたらレッドデータなのかもしれません。農害草としての程度は「強」。多年草で繁殖力自体はかなり強いのですが、どうなのでしょう。ただ、確かに水中でどんどん繁殖するあたりは、一つを抜こうとすると一気にずるずる、たくさん根や水中茎が芋づる式になることは間違いないようですから、たはみづらⅡヒルムシロ、とするのはそれほど無理筋ではないのかもしれませんが。

男女の仲が途切れず、絶えず、長く続く。それを比喻するところに蔓系の草が登場するわけですが、このあたりも現代とは異なった感覚なのかもしれません。…個人的な感覚論になってしまっ



旧丸山町界隈の風車。

恐縮ですが、わたしならば少なくとも「ずるずる」続きそうな蔓草系のものは、そういう祈りや願いを仮託させる材にはやや…。もとい、かなり難しいか、と。むしろ、逆のイメージに繋がりそうなんですが。

勝手な解釈をさせて頂くならば、現代のような夫婦という概念も緩く、通い婚が前提だった大らかな時代。男女の仲というのは細く長く続くのが宜しかったのかもしれない。一夫一婦制が当たり前で、別居結婚もありとは言え、多くの人が夫婦で同居する現代とは、根本が違いすぎる気がします。

南房総内陸部の山道は、さほど急峻ではなく、けれどもそれなりの坂とカーブを繰り返します。そして、時々現れる白い風車。合併によって、現在は南房総市に組み込まれています。かつての自治体区分で丸山町とされていた地域は、この白い風車が名物。わたし自身も詳しくは知らないのですが、このあたりの地質があまり水田には向かなかったことから、開発・設置されたものだ、と聞いています。とても水持ちが悪く、直ぐに土に浸透してしま

ったそうなんですね。だから風車による水揚げを、ということなのでしょう。

余談ですが、その後はポンプによる水揚げがなされるようになったため、現存している風車は実質的には景観用なのだそうです。…さすがに万葉期にも風車があった、とは思いうけもありませんが、それでもこの地に暮らしていた人々の農作業上の苦労はうつすらと想像できそうですし、そうであるならばあいつた民謡が自然と謡われるようになったことも、何となくならば手繰れそうです。

水田に生えることが嫌われる蔓草。しかも元々が、水田にはあまり向かない地に、そんなものがたくさん生えてしまったら、当然みな生える端から抜こうとするでしょう。けれども、その蔓草は憎らしいことにぬるぬる、ずるずると抜いても抜いても繋がっている…。そんな、半ば呪わしいけれども、だからこそそれに等しく続く仲でありたい。そんな背景だと想像するのは、少しばかり穿った見方でしょうか。

あるいは、この手の古代歌謡に多く見られる主の諧謔、なのかも知れませんね。…いや、これこそがまさしく穿った見方、なのでしようけれども。

正直、初めての経験かもしれません。いや、この手の山を詠み込んだ歌の場合、どうしてもその姿がきちんと拝めるように少し離れた場所から、わたしは山を眺めてきましたから。ですが、この万葉歌に限っては山容は殆ど拝めませんし、もうすっかり山の中、です。そうしなければ手繰れない歌ですから、それ自体には何も問題がないのですけれど、こうして山中にいる自分が何だか馴染みなくて、若干の困惑も伴います。

何処かで車を止められたらいいな、とは思っていたのですが残念ながら叶いそうにありません。通行量は間違っても多くない道路ではありますが、かといって路肩に停めて云々、と構えられるほ

どではなし。

安波峰ろ。歌自体は山の中に軸足を置いているものですが、どうやらわたし自身は、やはり少し下ってから振り返り見ることになりそうですね。

安波峰ろの峰ろに穂の満つ

みづの満つ

風よりしかば

ひとゑふ

ひとゑひしかば

こゑは満ち

こゑ満ちしかば

歌のいづ

いで謡はむや

いで祝かむ

今夜に朝に舞ひ謡ひ

峰ろ田に集ひ

穂を成さむ

穂の真秀ならむ

去年今年ひと日を束ね

こゑ束ね

祈ひ待つことを束ねては

たれも幸はふ

みなひとの真幸きくあるを

なほしあれ

真幸きくあるを祈ひ禱みて

こにし来し来し

こゆ越ゆを

こゆ越え越ゆを

謡ひ謡はむ

地に在るはおほみたからのこゑゆゑ謡はむ

ひと在るは天のことはりゆゑなほし生く

遼川るか

(於：国道四一〇号途上)

(三)

「あきづしまやまとゆ・弐」で、こんな歌を引かせていただいたことがあります。

我が背子を莫越の山の呼子鳥君呼び返せ夜の更けぬとに

作者未詳 「万葉集 卷十一 一八二三」

鏡女王の歌に登場する、呼子鳥。これに関連しての引用だったと記憶していますけれども、その際にこうも書いていましたね。

余談になりますが、引用歌の中に登場している莫越の山。こちらもやはり場所が定かではありませんね。奈良盆地の巨勢方面にある、という説はよく目にします。けれども、そうかと思えば、はるか遠い東国は安房国。現在の千葉県ですが、その房総半島の先端へ程近い地に莫越山ではないか、といわれる山と、莫越山神社が存在しているのだ、といえます。

遼川るか「あきづしまやまとゆ・弐」

はい、その莫越の山です。恐らく、山そのものは定説通り大和国は巨勢が相応しいように感じます。といたしますのも、件の歌がどうにも洗練されているからなんですね。恋歌、それも妻から夫への恋歌となりますが東国のもの、すなわち民謡とするには、この端正さがどうにも…。

ならばといって防人に出た夫を思つての歌とするならば、地理的にいかなものか、と。「さねさしさがむゆく足柄峠」で詳細に書きましたが、東国から西へと向かった人との別れの地として詠まれたのは、やはり東国Ⅱあづまの際であった足柄が一番多いですし、この地の出身者ならば海路で相模に渡ったでしょうから、南房総内陸部とは位置関係が合致しません。

歌そのものの雰囲気からしても、やはりこれが詠まれたのは当時の都に程近い巨勢あたりなのでしょう。…目下、安房国を訪ねている身としては少々残念ですが、致し方ありません。ですが、前記引用のように莫越山神社、は存在しているんですね。それも何故か二社、です。延喜式にこうあります。

安房国六座 大二座 小四座

安房郡二座 並

大

安房坐神社 名神大。月次。新嘗

后神天比理乃咩命神社大。元名洲神

朝夷郡四座

並

小

天神社

莫越山神社

下立松原神社

高家神社

「延喜式 卷九 神祇九」

莫越山神社。式内社で社格は小。式内社なので当然、どれほど遅く見積もったとしても平安末期には、すでに安房国に莫越山神社と呼ばれるお社が鎮座していたことになりますけれど、恐らくはその後の時代、あるいはそれ以前から、何らかの経緯によって二つ建てられてしまった莫越山神社。

南房総の内陸部を南下。次第に道路は下りが多くなり、確実に海岸部へ向けて標高が低くなってきました。二つの莫越山神社はそれほど離れた場所に建っているのではなく、市町村合併前の自治体で語るならば、旧丸山町にいずれも存在しています。一方は宮下地区に、もう一方は杳見地区に、です。まずはより内陸にある宮下地区の莫越山神社へ、向かいましょう。

宮下地区の莫越山神社は、地図から判断するに、恐らくは三輪山に対する大神神社のように山を臨む形で建っているようです。元々は山岳信仰から始まった土着のひもろぎ、あるいは遥拝所だったのでしょうか。また、祭神は手置帆負命と彦狹知命。併せて祀られているのは、小民命と御道命、となります。きっと、土着の山岳信仰に後から、祭神たる手置帆負命や彦狹知命らが祀られた、と考えるが順当でしょう。

…しかし、ここで手置帆負命や彦狹知命といった名前が出てくると、やはり南房総、やはり安房国、と思ってしまうですね。安房が何故「あは」なのか。そもそものこの地の開闢…、としてしまうと語弊がありますが、開拓に纏わるお話です。

国道四一〇号を右折して、田圃の中を進みます。八月を目前に控えた青田は、すでに随分と稲の背丈も高くなっている時折、吹き寄せる風に田圃全体が大きくうねります。そんな抜けのよい視界に白い鳥居がぼつん、と浮かんでいて。…恐らく、あそこが宮下の莫越山神社なのでしょう。

車が行き違うことの出来ない幅の道、それも両側は田圃というシチュエーションをのんびり進みます。鳥居に近づくにつれ、どうやら短いながらもそれなりの参道があるお社だということも判明しました。ならば、適当なところで車を停めないとなりませんね。ちょうど鳥居の斜向かいが空き地になっているようですから、そこでいいでしょう。

実は、三年ほど前に莫越山神社を探して、この界隈を周ったことがあります。その時も仕事で近くまで来ていたことがきっかけだったのですが結局、こちら宮下の莫越山神社には辿り着けず、沓見の方だけで時間切れになってしまったこと、覚えています。…たまたま、その日、安房ではなく上総国の一ノ宮である玉前神社（長生郡一宮町）の例大祭だったものですから、ついそちらに時間を費やしてしまいました。

玉前神社が伝承しているという神楽舞や、氏子のチビちゃんたちに白装束を纏わせて馬に乗せて行う神事、そしてお神輿の行軍などをふらふらと眺め続けてしまつて、それから慌てて探した莫越山神社。

「あの時、これなかったのは、こんなお社だったのか…」
最初の鳥居を潜る瞬間、ちよつぱり不思議な気持ちになりました。

あの時も、そしてそれから今日までも。宮下の莫越山神社はずっと変わらずにここにあったのに。それどころか、あの時よりも更に更に昔から。…ずつとここにあったというのに、氣まぐれに立ち寄る者にとつてのそこは、線には到底なり得ない、点としてのみの存在。わたしにとつては、今日が初めて。けれども、それは宮下の莫越山神社という、長い長い線の途中にして刹那。…当たり前のことなんですけれどもね。でも、その当たり前がわたしには奇異なくらい、厳肅に思えました。

鳥居をくぐります。幣が風にそよぐ向こうに見えるのは恐らくはご神体の莫越山。正式名は渡度山（とどやま。同じく止々山という表記もあるようです）とのこと。この山自体の経緯は寡聞にして知りませんが、このお社の奥宮が、山頂にあるという記述は何かで読んだ記憶があります。やはり三輪山型の山信仰なのでしょう。



宮下地区の莫越山神社鳥居。奥には渡度山。

大和の巨勢山と山容が似ているからこそ、この名がついた、という通説も数回見かけていますが、真偽は不明。ただ、このお社の氏子さんたちが節分の夜に、件の万葉歌を唱える、という行事も戦

前くらいまでは続いていたと、聞いています。…少なくとも古くから地元の人々にとっては、渡度山は莫越山だったのでしょね。

また、実際に来てみて思うに、ご神体の山であれば禁足地。すなわち、越してはならない山という意を負ったのは、解らないお話ではありません。

「な越しそね」

どうか越さないでくださいね、という意を上代語に直すならば、こうもなりますし、なこしそね↓なこし、となるのはそれほど強引とも思えません。…もっともすべては後つけ、と言ってしまえばそれまでなのかもしれません。

どうなんでしょうね。前述している長狭郡上丁文部与呂麻呂の防人歌「たちこものゝ」も、東国のものとは思いいろい巧みさでしたから、あるいは洗練されているからといって、この地に縁のものではない、としてしまうのも少々早計なのかもしれません。

ですが、だとすればなおさら万葉後期あたりのものとなってしまうでしょうし、その時期の東歌が万葉集に採られる機会は、一も二もなく防人歌。そうすると地理もそうですし、そもそもの詠み手が逆転してしまっているわけで。…あるいは、夫にあとのことを託された妻が、その役目を放棄する＝禁を犯すことができないからこそ、ご神体の山を越えられない、としたのか。…ごめんなさい、やはり個人的にはここではない、と感じてしまいます。恋と神の組み合わせは、それはもう万葉歌では定番中の定番ですけど、そういう感覚自体が中央から遠い安房で、というのが何とも。

さほど長くない参道を進むとこぢんまりした境内。どうやら地元の自治会の会合か何かなのでしようか。社務所の奥から話し声がかすかに届きます。吹き抜けてゆくのは、心地よい風。

ここ・宮下の莫越山神社は、一帯に開けた水田の中。見渡す限り視界にひっかかるものと言ったら、莫越山しかないわけで、なるほど。三輪山しかり、近江の三上山しかり、とても判りやすいお

社ではあります。但し、だからといってこここそが、もう一方の莫越山神社ではなく本当の莫越山神社、と言いたいわけでは決してないのですけれども。

境内にある社伝を引きます。曰く

由緒

社記に「莫越山神社は、養老二年（七一八）神体山の麓である現在地に遥拝所として造営されたもので、延喜式神名帳所載の神社（式内社）安房国六座中の一である。」と記され、古くから多くの信仰を集め、とくに工匠の祖神としてあがめられ、この地域の中心的神社として今日に至っている。

莫越山神社案内文より抜粋

やはり遥拝所から始まったようですね。…しかしそれ以上に気になる、というよりは納得できてしまう記述が、

「工匠の祖神としてあがめられ」
となるでしょう。何せ、祭神が祭神ですからね。

手置帆負命、そして彦狹知命。彼らの名前が記紀で最初に登場するのは、日本書紀の天孫降臨にまつわる一説の中、となります。

即ち紀伊国の忌部の遠祖手置帆負神を以て、定めて作笠者とす。彦狹知神を作盾者とす。天目一箇神を作金者とす。天日鷲神を作木綿者とす。櫛明玉神を作玉者とす。

乃ち太玉命をして、弱肩に太手繩を被けて、御手代にして、此の神を祭らしむるは、始め

て此より起これり。

「日本書紀 卷二 神代下」

作笠者。かさぬひ、と読みますが菅を材として糸で縫い、神事幣物である笠を作る専門家という意味になります。同時に、作盾者もたてぬひの訓。往時の盾は、木製や鉄の鋌で留めたものなどもあったようですが、一般には皮革を縫い合わせたものだったようです。その専門家に手置帆負命と彦狹知命がそれぞれ定められた、と。

…いずれにしても、古代の政に関わる祭器具製作の始祖、ということですから、工匠の祖神としてあがめられるのは、もったいなお話。

そしてこの前記引用の中に、明確に記述されている件。曰く

「紀伊忌部の遠祖」

これこそが何故、この地を名づけて安房、としたのかを解く鍵にして回答、となります。それを端的に書き表しているのが、神社本庁が出している平成『祭』データです。ここ・宮下の莫越山神社についてこんな記載があります。

当社は、天正天皇養老二年（七一八）、勅願所にかかり地を賜る。神武天皇辛酉元年、天富命は阿波の忌部を率いて、当国に下り給う。この時小民命、御道命の請によりその祖手置帆負命、彦狹知命を祭祀し、延喜式に載する安房六座中小四座の一なり。

古語拾遺に曰く、天照大神、高皇産靈尊が天児屋根命、天太玉命に勅令して、番匠諸職の神々を天降された時にこの手置帆負命、彦狹知命を棟梁の神とされもろの工匠を率いて、日向国高千穂櫛触の峰に行宮を造り、天孫（迹迹芸命）の皇居を定めた。さらに神武天皇が大和国内を平定して橿原を都と定めた時、天富命が手置帆負命、彦狹知命二神の裔の一族を

率い、紀伊国名草郡御木、あらか郡より斎斧斎鋤を以て始めて山の材を伐りて宮城の正殿を造り、これがわが国建築のはじめとされる。

更に神武天皇の命により四国の阿波に赴き麻殻を殖培し、のち天富命は更に肥沃な土地を求め、阿波忌部氏を率いて舟で東方に向かい今の房総半島に上陸し、水利と渡度、狐座、御木の三官有林を中心とした豊かな山林に恵まれたこの地を開拓し故国の地名より安房と称し定住し、それまで土着の民の祀っていた神体山の渡度山（莫越の山）に祖神を祀り、また付近に莫越山神社を中心として、古墳時代後期には神祭が盛んに行われていたことを物語る東畑遺跡、石神畑遺跡、六角堂遺跡などが発掘されている。

神社本庁「平成『祭』データ」

はい、すなわち阿波Ⅱ安房、ということとでここというⅡの部分の意味するものが忌部。この氏族そのもの、というわけです。

忌部氏。すでに「わたのそこおきゆ」でそれなりには触れていますが、そもそも忌部と言えば、中央から派生して阿波忌部、紀伊忌部、出雲忌部、讃岐忌部、さらには筑紫忌部や伊勢忌部などにも繋がり広がっていった氏族にして、前述のように主に祭器具製作や宮の造営を専らとしていた職人氏族。

余談になりますが、恐らくは隠岐の忌部は出雲忌部から派生したものでしょうし、ここ・安房国は、阿波より東進・開拓・移住した一門の地、です。また、紀伊の那智勝浦と安房の勝浦という地名の相似も、忌部の東進と何らかの関わりがあつてのもの、と推測するのは決して難しいことではない、と考えます。

ともあれこの忌部氏。中央の忌部はのちに斎部と氏族名を改めています、そのいずれもが意味

するものは穢れを忌み、斎くものを祭る氏。いつてしまえば神職中の神職に携わってきていたわけで、その立場からまだこの国に文字というものがなかった頃より、口伝によって受け継がれてきた伝承を記述し、上奏した文献が存在します。

古語拾遺。日本書紀が編纂当時の権力者だった藤原氏Ⅱ中臣氏の影響色濃く編まれたものであるように。また、先代旧事本紀が勢力争いに敗れた物部氏の立場より書かれたものではないだろうか、とされているように。古語拾遺は斎部氏サイドから書き記された史書です。

また、それと同時に有職系の史料でもあるのですが、その記述の真摯な姿勢、あるいは美化・歪曲・捏造があまりされていない本質が、二十一世紀の現代でも高い信憑性をもつ史書として、多くの研究者たちにとっても好意的に受け入れられている、とよく耳にします。また、たかだか趣味の領域でこれら史料を読み漁っているわたし自身もまた古語拾遺を残した斎部広成老の人柄のようなものが感じられて、とても好きな読み物としてよく挙げさせて頂いていますね。

蓋し聞けく、「上古の世に、未だ文字有らざるときに、貴きも賤しきも老いたるも少きも、口口に相傳へ、前言往行、存して忘れず」ときけり。書契ありてより以来、古を談ること好まず。浮きたる華競ひ興りて、還りて旧老を嗤ふ。遂に人をして世を歴て弥新たに、事をして代を逐ひて変へ改めしむ。顧みて故実に問ふに、根源を識る靡し。国史・家牒、其の由を載すと雖も、一つ二つ委曲は、猶遺りたる有り。愚かなる臣言さずは、恐るらくは絶えて伝ふること無からむ。幸ひに召問を蒙りて、蓄へきたる憤りを◆ばまく欲りす。故、旧説どもを録して、敢へて上聞る、と云爾り。

斎部広成「古語拾遺」
※◆は手偏に「慮」という表記です。

「思うに、聞いているには上古の時代には、まだ文字もない時代だったのにも関わらず、当時は身分の上下も、老い若きの区別なく、すべての人が言葉だけで、語り伝えてきた昔の人が言ったことや、昔の時代にあったことが残っていて、忘れられることはなかった、という。

けれども文字で残すようになってからというもの、人は古い時代を語ることが好まなくなりました。表面だけが華やかで実質の伴わない傾向が、まるで競うかのように盛んになって、しかも古伝承を語る老人を嘲笑するようになってきている。そしてついには、時代が進むにつれて人々をますます新たな風潮に走らせ、物事を時代の推移とともに変革させるに至っている。今振り返るに古来からの慣例を遡っても源流を知っている験しがない。朝廷編纂の史書や氏族の記録がそれらの由緒を記録しているけれど、少数ではあれど細部が遺漏してしている点もある。

わたしのような者が申し上げないならば、恐らくは絶えてしまい、伝えることがないものになってしまうであろう。幸いにも陛下のご下問を頂戴し、ここに長年の間に積もった憤りを述べようと思う。そこでわが家に残る古伝承を記述して、積極的に朝廷に言上する、と申し上げる次第である」

斎部広成が平城天皇からの求めで記した古語拾遺の冒頭と、それを現代風にわたしが意識させて頂いたものです。：繰り返しますが、これはあくまでも天皇の求めで記述したものの。にも拘らず、その冒頭がいきなり天皇氏に対する賞賛その他の美句で飾られるのではなく、まさしく正述心緒と言いますか、変わりゆく世の中に対する憤りと、警鐘を真正面から綴っているわけで、いやはや広成老のお人柄が、それとなく手繰れますね。

さらには、上古には文字が無かったこと、文字が出来てからはかつてのように人が古伝をしなくなってしまうことを、明け透けに書いてしまっているのも、記紀の成立によって多くのことが歪曲されてしまったから、と遠まわしに伝えたがっているように読めちゃうのは、わたしがへそ曲

がりだからでしょうか。

例えば先代旧事本紀と記紀とでは、物部氏の始祖となった饒速日尊に関する記述部が大きく異なります。これは恐らく、物部氏独自の古伝も踏まえて書かれているから、という有力説があるのと同様に古語拾遺では、そもそもの忌部の始祖たる天太玉命の活躍場面が、記紀に比べて多いことが特徴的。さらには、その天太玉命に従った忌部五部神（櫛明玉命Ⅱ出雲忌部の祖、天日鷲命Ⅱ阿波忌部の祖、彦狭知命Ⅱ紀伊忌部の祖、手置帆負命Ⅱ讃岐忌部の祖、天目一箇命Ⅱ筑紫・伊勢忌部の祖）についても書き記されています。

又、天地割れ判くる初めに、天の中に生れます神、名は天御中主神と曰す。次に、高皇産靈神（古語に、多賀美武須比といふ。是、皇親神留伎の命なり）次に、神産靈神（是、皇親神留弥の命なり。此の神の子天児屋の命は、中臣の朝臣が祖なり）其の高皇産靈の神の生みませる女の名は、栲幡千千姫の命（天祖天津彦の尊の母なり）其男の名は、天忍日の命（大伴宿禰が祖なり）又、男の名は天太玉の命（斎部の宿禰が祖なり）と曰す。太玉の命の率たる神の名は、天日鷲の命（阿波国忌部等が祖なり）・手置帆負の命（讃岐国忌部が祖なり）・彦狭知の命（紀伊国忌部が祖なり）・櫛明玉の命（出雲国の玉作が祖なり）・天目一箇の命（筑紫・伊勢両国の忌部が祖なり）と曰す。

斎部広成「古語拾遺」

いや、恐らくは逆ですね。先代旧事本紀には、古語拾遺の記述の引用がありますから、没落した物部氏の末裔が、古語拾遺に倣って自身らの古伝も含めて記したのが先代旧事本紀となるのかもしれない。

いずれにせよ、これらの裏側に存在するのは大化の改新以降の中臣氏・藤原氏の専横によって舞台から消えていったかつての有力氏族たちの鬱屈、なのでしょいか。お話は逸れますが、この現代ですら教科書の記述の有り様について、様々な異論・意見がものさされていますし、その顕著な例が太平洋戦争当時の様々の取り扱いについて。国内のみならず対外的にも論争どころか一つ間違えば政争、紛争すらも起こりかねない情勢が続いていますので、考えるまでも無く殊、歴史というもの、の明文化には、いずれの時代も人々の悲哀が交錯するものなのだ、と。

余談が長くなりました。ともあれそんな忌部の、特に地方の忌部たちは朝廷に属する品部だったわけで、この品部とはそのまま職業集団というのが、やや早計ではあれど最も解りやすい説明なのかもしれません。

忌部五部神もそれぞれに専門的な役割があり、櫛明玉命を祖とする出雲の忌部は勾玉づくり。天日鷲命を祖とする阿波の忌部は木綿や麻布を織ること。手置帆負命を祖とする讃岐の忌部はすでに引用した日本書紀の記述にあるように笠縫。天目一箇命を祖とした筑紫・伊勢の忌部は鏡や斧、刀などの鑄造品づくり。そして、彦狹知命を祖とした紀伊の忌部は盾縫にして、宮を建てる際に不可欠な木材の貢納と、宮そのものの造営などに従事した、と。

仍りて、天富の命（太玉の命が孫なり）をして、手置帆負・彦狹知の二柱が神のを率て、斎斧・斎鋤を以ちて、始めて山の材を採りて、正殿を構り立てしむ。所謂、底つ磐根に宮柱ふとしり立て、高天の原に搏風高しり、皇孫の命の美豆の御殿を造り仕へ奉れるなり。

故、其の裔、今紀伊の国の名草の郡御木・鹿香二郷在り（古語に、正殿は鹿香と謂ふ）。材を採る斎部の居る所は、御木と謂ふ。殿を造る斎部の居る所は、鹿香と謂ふ。是、其の証なり。

又、天富の命をして、齋部の諸氏を率て、種種の神宝、鏡・玉・矛・盾・木綿・麻等を作らしむ。櫛明玉の命が孫は、御祈玉（古語に、美保伎玉といふ。言ふところは祈禱なり）を造る。其の裔、今出雲の国に在り。年毎に調物と共に其の玉を貢進る。天日鷲の命が孫、木綿、及、麻、并、織布（古語に、阿良多倍といふ）を造る。仍りて、天富の命をして日鷲の命が孫を率て、肥饒き地を求ぎて、阿波の国に遣はして、穀・麻の種を殖ふしむ。其の裔、今、彼の国に在り。大嘗の年に当たりて、木綿・麻布、及、種種の物を貢る。所以に、郡の名を麻殖と為る縁なり。天富の命、更に沃き壤を求ぎて、阿波の齋部を分かち、東の土に率往きて、麻・穀を播殖う。好き麻生ふる所なり。故、総の国（古語に、麻を総と謂ふ。今、上総・下総の二国と為す、是なり）と謂ふ。穀の木生ふる所なり。故、結城の郡と謂ふ。阿波の忌部の居る所、便ち安房の郡（今の安房の国、是なり）と名づく。天富の命、即ち其地に立太玉の命の社を立つ、今安房の社と謂ふ。故、其の神戸に齋部氏有り。又、手置帆負の命が孫、矛竿を造る。其の裔、今、分かれて、讃岐国に在り。年毎に、調庸の外に、八百竿を貢る。是、其の事等の証なり。

齋部広成「古語拾遺」

現在の島根県松江市に玉造温泉という地名があることや、畿内で大規模な宮を造営する木材は、当然畿内から最も近い樹木の繁殖地であつたであろうことから、紀伊は熊野界限が該当するものも領けますね。

…日本書紀の記述と古語拾遺の記述の差異は、ここではあえて触れないでおきます。そもその立位置が違う二つの書物の記述です。そして、その差異を埋める手段も、わたしには持ちえませんよし。



宮下地区の莫越山神社境内。

遥拝所であったであろうかつてを思いつつ、鳥居より社殿奥の莫越山を臨みます。風が止むたびに世界から音が消え、また風が吹くたびに稲穂が揺れる音だけが軽く響きます。本殿の前まで進み、いつもように参拝しました。

「自分に連なるすべての人が幸せでありますように」
自分に連なるすべての人。言ってしまうえば、すべての人々はかならず何処かで繋がっていますし、連なってもいます。こうやって古歌紀行をしていると本当によく感じるのですが、すべての人々が同じ地表を共有しているわけで、それは何も同時代の人だけには限りません。

この地で暮らしていた先住民がいて。その後に忌部が来てここを当時では最先端の技術や知識で開拓。けれどもその後の時代の時代では、また大和朝廷による東征があつて、その時、朝廷側から見ればこの地に居ついた忌部の子孫たちもまた、先住民です。

その後の時代にだって大なり小なり、一つの地表を共有せんがために、諍いもあれば融合もあつたでしょうし。そこにあつたのは、支配と服従なのか、融和と同化なのか、よく判りません。ただ、判ることはその時々人々が暮らしていたという事実と、その暮らしのためになされた努力と。そんな断片を訪ねて周る旅だからこそ、すべての人々の幸せを願わずにはいられませんし、その時々の方が願いを仮託していた祭神という存在にもまたあれこれと考えをめぐらせてもしまします。宮下の莫山神社祭神・手置帆負命と彦狹知命。その一方で、古語拾遺にはついで登場しない、小民命、御道命。この二人の申し出によって建立された、という説も莫越山神社にはあります。身勝

手な推測ですが、土地の開拓には当然、鋤や斧が不可欠だったのではないでしょうか。そのために小民命、御道命が東進に参加していた、とするならば。…莫越山神社が忌部の祖である天太玉命でも、東進した天富命でも、ましてや阿波忌部の祖である天日鷲命でもなく、あえて自身たちの遠祖・手置帆負命や彦狹知命だけを祭神としたのも、また解らなくもないのかもしれませんが。当時の海岸線がどこまで内陸部に入り込んでいたのかは寡聞にして知りませんが、そもそもの上陸の地や、古語拾遺にも明記されている安房の社、すなわち安房神社よりは、それでも内陸に位置するこの界隈。急峻とまでは言わずとも山があり、木々が生い茂っていたであろうこの地ならば。

…そんなことを、ぼんやりと考えては、薄く浮いてくる汗もそのままに、ただただ風の中に立ちすくんでしまっていました。解るような、解らないようなもどかしさばかりが、後頭部にじんわりと凝っていました。

天離る雛の地ともえ知じてみなひと向かふいづへともなし

遼川るか

(於::宮下地区・莫越山神社)

(四)

家風は日に日に吹けど我妹子が家言持ちて来る人もなし

朝夷郡上丁丸子連大歳「万葉集 卷二十一 四三三三」

「故郷の方角からの風は毎日、毎日、吹いてくるというのに妻からの便りを持って来てくれる人などいない」

こちらも防人歌ですが、作者は朝夷郡上丁丸子連大歳、とあります。丸子連。まるこむらじ、と読みます。ここで注目したいのは姓（かばね）が連（むらじ）だということでしょうか。

先ずはかばね、です。大和朝廷以前の古代日本で、かばねは家臣に与えられた称号のようなものとされています。判り易い例に置き換えると、会社という組織に於いて、各人に与えられる職位・職責が、かばねであった、と。なので、地位や権限を表すかばねと、担当を表すかばねがあった、ということになりますか。

そして、そのかばね、の中でも最高位だったのが連だ、とも。もちろん、ここでいう古代日本というのは天武以降の明確な中央集権以前。言ってしまうえば、各地の豪族、あるいは小国もあったであろう、という前提での話ではありますが、それを後から追認・整備・記述という形で一本化にしたにせよ、後付したにせよ、少なくとも記紀万葉の時代には、かばねの中で連は最高位、という認識であつたのでしょうか。つまり、丸子氏はそれなりの力（地位 or 技術）を持った一族だった、となります。では、その丸子氏とは、となるのですが、これがまた中々…。

今回少し調べてみたのですが、定説として丸子氏は大伴氏の系譜となっている一方で、いやいや実は和邇氏の系譜だ、とする説もいまだに多く、何とも。実は、丸子氏の他に丸氏、という一族が存在しました。といって、丸と書いてわに、と読みますから、似ているのは字面だけなのですけれど、どうにも混同されがちな様子。丸という氏族が上古から中古、中世の文献にぼつりぼつりと登場することが混同の原因と思われるのですが、恐らくは丸子氏と丸氏は別物です。

丸氏は確かに和邇氏の系譜なのでしょうね。丸邇という表記やら、和邇氏から後に派生した春日氏に、丸部某という人物がいたことも続日本紀には記載されていますから。

いずれにしても丸子氏は、東国ではかなりの広範囲にわたって居住していた一族だったのではないかと。余談になりますが、一方の丸氏はむしろ西日本にその足跡が多く見られます。「さゝなみのしがゆ」でも、それなりに書きました。

ただ今回、ややこしいと言いますか、紛らわしいと言いますか、誤解してしまいそうになったのが丸山町、という地名。ここから一瞬、和邇氏を連想してしまいましたし、某所で見かけた丸子氏は和邇氏から派生した、という説に慌ててあれこれ調べてしまひまして。でも、どうやらこの一帯の丸、は太伴氏系譜の丸子氏に縁の丸、なのでしょう。

ともあれ、丸子氏です。知りうる限りでは、崇峻天皇の妃となった小手古の父親・太伴糠手の子（小手古の兄弟）である頼垂が丸子氏の祖とされているようですが、浅学にしてそれ以上のことは手繰れていません。

ただ、この丸子連と莫越山神社一帯の旧丸山町界限。古くは丸という地名だったらしく、その関連については色々と議論・検討の対象となっているようで、インターネット上でも幾つか拝読させて頂きました。

万葉集に採られている「丸子」に関連するものは他に

難波津に装ひ装ひて今日の日や出でて罷らむ見る母なしに

鎌倉（郡）上丁丸子連多麻呂 「万葉集 卷二十一 四三三〇」

久慈川は幸くあり待て潮船にま楫しじ貫き我は帰り来む

久慈郡丸子部佐壯 「万葉集 卷二十一 四三六八」

が見られます。

「難波の港に船出の装いを重ね着して、今日この日に出航するのだろうか。この姿を見てくれる母はいないというのに」

「久慈川は、そのままであっておくれ。船に楫をたくさん取り付けて、わたしは帰って来るから」

はい、いずれも防人歌にして、前者が相模国、後者が常陸国出身、と。個人的にはこの中で最も悲壮感が漂っているように読めてしまうのは、丸子部佐壮のものですか。数年間の任地に赴く、という状況で親や妻と離れ離れになってしまうことを哀しんでいる、というよりはもはや祈りといえますか、まるで死地に赴くような覚悟が感じられます。…つまり、前述している通りの「防人の現実」もしっかり認識しているのではないかな、とも思えてしまうわけで、それなりの年齢に達していたのかもしれないね、佐壮は。行きたくなくとも、それはもう詮無いこと。あとは早く帰ることだけを、という「考え」も感じ取れますね。

一方の多麻呂は逆にとても幼い印象です。妻ではなく母ですから。行きたくない、という「感情」がストレートに表現されていますし、とにかく不安だったのでしょうか。

…といって大伴氏とも、和邇氏とも、そして万葉集とも、直接的にはほぼ無関係ではありますが、そんなかつての丸の地に行基が開祖とされている古刹があります。石堂寺です。

古くは日本三大石塔寺の一つに挙げられ、旧名はそのまま石塔寺といったようですね。場所が、宮下の莫越山神社のごく近くなので、その石堂寺へちらっと立ち寄ってみることにしました。

行基開祖、という「枕詞」は東国にまた、たくさんあります。元々が畿内に比べて上古の記述が極端に少ない東国で、上古の文学に縁ある地を訪ねて周ろうとすると、とにかく倭建命か、防人か、あるいは行基か、となってしまうのは仕方がないこと。とは言え、何だかすっぴんお馴染みになっ



石堂寺の鐘楼と多宝塔。

てきていること、思わず笑ってしまいました。

また、忌部が開拓という形で、技術面からこの地をリードしていったり、あるいは倭建命が東征という形で、各地を束ねていったとしたならば、行基はそれを仏教という形で実行した人、となるのかもしれませんが。原初はひもろぎなどから始まった自然信仰が、忌部によって祖神を祭り、また功労者を祭って、一方の大和朝廷の東征によって天つ神、国つ神信仰という、統治にして、日本という国家全体の信仰が伝道され、やがて中央が仏教に傾倒するにつれて、今度はそれで各地を上書きしていった、といえますか。

お寺さんの駐車場から、ゆるやかな坂道を登ります。途中で、それなりに樹齢を重ねているのでしょうか、大木の根が土から張り出している様なども見られますし、国や自治体から重要文化財指定されていると思われる建造物も複数あって、南房総最古のお寺さんであること、改めて実感していました。

お寺さんの由緒は、神亀三年（七二六年）に行基が建立、となっています。一方の大歳が件の万葉歌を上奏したのが天平勝宝七年（七五五年）。…この地を本拠とした安房の丸子氏。その中にはもちろん大歳もいたのでしょうかし、もしかしたら彼もまた、このお寺さんに詣でたことがあったのかもしれませんが。

古歌紀行をしていると襲われる不思議な感覚。それは歴

史は歴史と交差する、ということですから。ここにお寺さんとして時間を紡いできた場があり、その一方で歌集として歴史を重ねてきた万葉集があつて。それぞれの千三百年も経た今になって、わたしがその二つの歴史が交差したかもしれない様を、何となく感じている、といえますか。…もちろん、わたしだけではない、様々な分野からこの地へ関心をもつて訪れた人々もまた、そういった交差する歴史と歴史、というもう一つの新しい歴史を紡いできたのでしようし、ゆくのでしようし。

「重い…」

梅雨明け間際のまだ低く浮かぶ雲たちの下。気温はすでに三十度を超えていました。東国の哀しみ、それは西から来た為政者たちによる、支配の歴史。そう、わたしは「なつそひくうなかみがたゆ」で書きました。けれども、その為政者によって支配された者たちもまた、かつては西からやってきてこの地を開拓した者たちでした。

開拓民とはいっても、恐らくはそれ以前からこの地に暮らしていた原日本人と言いますか、いずれにせよ先住民が全く皆無だったとは思えません。先史時代の貝塚や、石器などが、その事実を二十一世紀の現代も、静かに物語っています。

ならば開拓民もまた、為政者だったのかもしれないし、その後によつてきた倭建命にしても、それこそ行基にしても…。歴史は、歴史と交差します。もしかしたら、そこに悲哀などという甘ったるい感傷を抱いてしまうのは、わたしの奢りや、傲慢なのかもしれません。

先住民は、それでも忌部が率いた開拓民によつて新しい技術という恩恵もまた、享受したことでしよう。麻にしろ、木綿にしろ、鋤や斧などにしろ。

その開拓民の子孫は、大和朝廷の東征によつて支配され、その解りやすい形の一つに防人という制度がありました。…が、同時にそんな彼らの歌が現代に残っている事実や、心の支えとして存在したかもしれない古刹もあつて。

人の歴史。土地の歴史。時代という歴史。果たして「それ」が正しかったのか、間違っていたのか。美しかったのか、醜悪だったのか。有効だったのか、無意味だったのか。：過去に対するすべての評価は、その時、その場ではなく、後の時代がくだすものです。そして、その後の時代の評価もまた、時代によって醸成される価値観によって次々と様変わりします。

いや、そもそも後の時代がくだした評価に、果たしてそれほど価値が存在するのでしょうか。前述している通り、バックボーンが違いすぎるのです。あくまでも、学術的に。あくまでも芸術的に、という側面での評価はもちろん存在するのでしょうが、ならばその学術や芸術とは、と。

同時代性の権威、というものは社会の一つの機構として必要なのでしょうか。学術としての筋道もまた、必要なのだとも思います。現にわたしはここまででも、定説が、有力説として、などの記述しています。

義務教育的な正解と不正解。これもまた古歌紀行をしていると判らなくなるものの筆頭格で、仮に学術的にそれがそうだ、と定められているから：。それに倣わなければ、それに寄り添わなければ、すべて不正解なのでしょうか。

万葉歌に謡われた場所が不特定の地。ではその地は何処なのか、と歩いて周ったところで、そもそも学術的な答えなど出ません。数多の先人たちをもつてしても定められていないものを、わたしが仕事の合間を縫って訪ね歩いたところで「未詳という定説」を覆すほどの大発見はなされるはずありません。

「あきづしまやまとゆ・式」で書きましたが、柿本人麻呂は誰だったのか。その問いに対するわたしの現時点での最高の答えは「判らない」です。ですが、それと等価で「わたしはこう思う」というものがあつたつていい、とも思います。あくまでも私見の範疇内であるならば。

そこに正解不正解という境界を設ける必要は果たしてあるのでしょうか。同時に、後世がどうジャッジしたからといって、それにもまた寄り添う「義務」はないではないでしょうか。

例えば、これが太平洋戦争中の価値観で捉えるとしたならば、家族とはなれるのが哀しい、などと心情を吐露している時点で非国民、とされたのかもしれませんが。戦後六十余年を経た今だからこそ、そこに人々の悲哀がとてむきやかに浮かびあがるのであって、仮にこの先、日本という国がまたしても軍国化するのならば、もしかすると万葉集は十九巻で完結、とされてしまうのかもしれませんが。あくまでも、仮定のお話になります。

ですが、その同じ時代の中にも、人それぞれのものの感じ方、考え方、が存在しますし、それらだって価値観、という言葉で括られます。歴史や考古学はただただ立証可能な事実のみ、裏打ちされて然るべきもの。

けれども人それぞれが、確かにその時、そう感じたという「心の事実」も、事実ではあります。但し、それを事実として立証する術が、存在し得ない……。たった一首の万葉歌に対する解釈が様々になってしまう所以でもあります。前出している佐壮の歌だって、字面の歌意こそは読み取れますが、それを悲壮感、それなりの年齢であったのではないかと受け止めているのは他でもない、わたし自身。あるいは、大歳や多麻呂よりも歳若く、防人という制度の実態を知らない少年の、ちょっと背伸びして詠んだ歌、という捉え方だってしようとすれば、できてしまうわけで。

歴史は、歴史と交差する。その交差点の一つとしてある、古歌紀行であり、わたし自身です。インターネットという術を得て、誰もが気軽に思いを発信できるようになってしまったからこそ、交差点の一つとしての自身の意味を、静かに重く感じてしまっていました。

そもそも、意味なんてものに縋ること自体、考えようによってはナンセンスなのかもしれません。

誰がどう受け止めようと、そう感じた、そう思った、という心の事実は、客観的な立証が叶いませ
んが、それも含めて事実でもあります。でも…。

宮下の莫越山神社で感じていたもどかしさが、また少しせり上がって来たように感じていました。
あの時と…。近江を最初に周った時と。よく似ている感じがします。きつと、またわたしは否定し、
破壊しなければならぬのでしょね。かつて自身が、そう感じたという心の事実を。…きつと。

息長鳥安房に來し來し今日の日のあり
息長鳥安房ゆ立ち立つ今日の日のあり

鶏の鳴く東いにしへみなひとの立ち
押し照るや難波しらぬひ筑紫の遠し

弥遠に時流るれど絶えざるものを
なほなほし頼らまくほしくたれもしあらむ

在るてふをたれもえ知らじ在るてふがゆゑ
在るがゆゑゑひかなしびて在るはかもなし

わくらばに忘るをほるもかひなき名なる
歌思ひここりこめこむ言にし出でむ

言繁きあれあれなほし揺らかし給へ
震り震りてあれな揺れそね謡ふてふこと

天ありて地あるをこそ神祝け謡はめ
しがはかに命生くてふゆゑのえあらず

あれなほりそなにしかあれかなにしかあるか
さかしまにいゆきもとほるのみ たまきはる

世に命あるは鳥草木ひとゆきゆく
咲き匂へず飛べずしかれどあれ謡はらる

こはこにて在るがまにまに思ふがまにまに
来ぬ来てはいつにいつへに玉矛の道

遼川るか
(於::石堂寺境内)

(五)

論社。恐らくは一般の方には耳慣れない言葉なのだ、と思います。かくいうわたしも、単語の存在こそは知っていましたけれど、正確な意味を調べ、なおかつ実際の検分という形で接したのは、



沓見地区の莫越山神社周辺。

今回が初めて。すなわち、似たような名前の神社が複数存在し、どれが延喜式に記述された式内社か決定できないもの、という意です。

：はい。すでに前述していますが件の莫越山神社は、宮下地区と沓見地区に一つずつ、同じ名前のお社が在って、さらには延喜式内社でもありますから、論社に該当しているわけなんです。

石堂寺を後にして、内陸部からより海岸線へ近い方へ。国道四一〇号を走り続けると、三年前に潜った鳥居が見えます。沓見の莫越山神社です。前回は、すでに稲の借り入れも終わった九月半ばの訪問でしたが、今回はまだまだ青田風ゆく七月。当時の何処となく煤けて寂れた印象から一変、すこんと抜けのいい開放的な光景の中、です。

三年前、たまたま台風が近づいてきていたために、時折吹く突風と降っては止み、止んでは降る雨に見舞われながら、このお社を探しました。そもそもの悪天候に加え、すでに暗くなりかかった時刻に、周囲の民家の中を社用車でぐるぐる走り回り、それでも見つからない、と道ゆく人に何度も尋ねては、ようやく辿り着けたこと、今でも明確に覚えています。

あの日、玉前神社の例大祭に立ち寄り、仕事を済ませてから、わたしが向かったのは御宿海岸でした。

「月の沙漠」 作詞者 加藤まさお

一月の沙漠をはるばると旅の駱駝が 行きました

金と銀との鞍置いて二つならんで行きました

二 金の鞍には 銀の甕 銀の鞍には 金の甕

二つの甕は それぞれに 紐で結んで ありました

三 先の鞍には 王子さま 後の鞍には お姫さま

乗った二人は おそろいの 白い上着を 着てました

四 広い沙漠を ひとすじに 二人はどこへ 行くのでしょうか

朧にけふる 月の夜を 対の駱駝は とぼとぼと

砂丘を越えて 行きました 黙って越えて 行きました

お馴染みの童謡・月の沙漠の歌詞となりますが、はい。こちらとても綺麗な今様歌の韻律です。元々は加藤まさおが詩と挿絵という形で発表したものへ、後から曲がついて童謡となったものなのですが、そもそもの加藤まさおが作品の着想を得たのが御宿海岸だった、と。

…といって、現代にも残る今様歌の韻律に縁の地、として御宿海岸に立ち寄ったわけではありませんでした。荒れた海、嫌いじゃないんですね、実は。まあ、これもまた、わたしの中の酔狂の一つなのかもしれませんが、古歌や韻律とは全く別の理由から寄り道をし、そのお陰で宮下の莫越山神社へは訪ねること叶わず。それどころか何とか、ここ・沓見の莫越山神社の鳥居を潜る頃になって、やつと月の沙漠の歌詞が今様の韻律だった、と気づいたこともありと思い出させていました。

旅の不思議。そう、これも旅をする中で感じてしまう不思議な感慨なのですけれど、三年という時間が流れたのに、ここはこのまま。この界限で暮らしていらつしやる人々にとっては身近すぎて、もはや何も感じられないほどに目に馴染んだ鳥居も、境内へと向かう石段も、そして拝殿も。ずっと変わらずここに在り続けていたはずなのに、わたしにとっては、時間軸の中のほんの点と点。季節が変わり、光景から受ける印象も変わり、では、もし今日わたしが再訪していなかったとしたらば。沓見の莫越山神社は、薄暗くて、少し怖いぐらいの印象しか、わたしの中には残らなかったのかもしれない。

違う印象、でも同じ場所。その場はその場であり続けていたというのに、こことは別の場所で暮らしていたわたしにとっては、ここがこととして在り続けていた空白の三年間が、とにかく不思議で、不思議で。

その同じ三年間、わたしは一体、何度このことを思い返したでしょうか。考えたでしょうか。興味のきつかけとなった万葉歌も、延喜式も、わたしの中では三年間、確かに継続していたもの、といいますか地続きの感覚なのに、ここという場所は地続きではない……。ですが、三年という空白の間、確かに地続きのものとして在り続けたお社です。

これもまた、気まぐれに立ち寄った旅人の傲慢、なのかもしれません。何故、自身の意識の外のものは継続的に捉えられないのでしょうか、人は。あるいはそれが人の限界、なのかも知れません。所詮人間は、どこまでいっても万能にはなり得ませんから。

沓見の莫越山神社の祭神も、手置帆負命と彦狹知命。けれども小民命と御道命は配祀されていないようです。代わって配祀されているのが、彦火火出見尊、鵜葺草葺不合尊、豊玉姬命という正直、びっくりしてしまうラインナップです。

彦火火出見尊は、古代神話で有名なあの山幸彦のこと。その山幸彦が、釣り針を探して訪ねた海神宮にいた豊玉彦命の娘にして、山幸彦の妻となったのが豊玉姫命。そんな二人の間に生まれたのが鵜葺草葺不合尊で、因みにその鵜葺草葺不合尊の子どもと言えは……。はい、初代天皇の神武です。

もう言ってしまうえば、がちがちの大和朝廷的な三柱が、ここに祀られているわけで、同じ論社の宮下の莫越山神社とは一線を画す気がしてしまいます。あちらの配祀は忌部の裔にして、実際に開拓・入植した小民命、御道命なのに対して、です。

現実的には神武にしても倭建命にしても、時代としてどちらが先だったのか、あるいはそもそもその实在だって未詳です。いやいや、それどころかのこの地の開拓神話たる忌部のことにしても、学術的なことはさておき、本当の意味での真実は未詳、と。そうしてしまっただけでもいいのかも知れませんが、ただ、この距離にしてたったの5kmしか違わない二つの論社。何故、分かれてしまったのか、を考えてしまいたくもなるわけでして一つ、わたしなりの拙い推理などをぶって見ましようか。

① 土着の山岳信仰など、よりこの地の古代に寄り添う印象が強いのは宮下の莫越山神社。

② 延喜式など、より時代が下った中での「神社らしい神社」は杳見の莫越山神社。

③ 一方は祖神をより祖神を祀るものとして。一方は、より国が定める神を祀るものとして存在するようになったのではないか。

④ 5kmというkm距離は現在の杳見界隈に暮らしていた、当時の人々が、神事・祭事を行うのに決して不便すぎるもの、とは考えがたい。但し、杳見から宮下へゆくには登り道となる。

⑤ 海側のほうがより、中央には近かった。

これらのことが瞬時に考察できるわけで、個人的な感覚論では、最初にあったのは宮下で、けれども次第に中央からの影響が色濃くなる中で、社格はむしろ沓見の方が高くなっていったのかもしれない。何となく原初はさておき、延喜式に記載されたのは沓見のような印象が根拠はないですけど、します。

分かれた原因を推理できる理由は、様々にありますが例えば「さゝなみのしがゆ」で書いた不破の関の若宮八幡神社と井上神社が壬申の乱で、天武方についた者たちと大友側についた者たちが分かれて興した、というようなことでは、きつとないのではないかと。

そういうことよりもむしろ、純粹に後から来たものも受け入れましたよ、という結果のように思えてなりません。こっちは本家のお墓、あっちは分家のお墓。分家（本家でも構いません）の先代は新しい物好きで、その先代が信奉していたものも、一緒にお祀りしちゃいましょうね。本家（分家でも構いません）は先祖代々の生業を継いでいるから、それに纏わるご先祖様たちも一緒にお祀りしましょうね、というような流れと申しましょうか。

由緒書きによれば両社とも、手置帆負命と彦狹知命は建築の神様、としているわけで、より海に。より中央に。近く稲作に軸足を置いていた一方と、より山に近く、開墾する中で建築的作業に従事する機会が多かった一方。しかも片方にはシンボルたる山があります。

さらに言うなら、一方は現代の海岸線にも2km足らずなわけで、海独・海運の守り神とされる鵜葺草葺不合尊を祀りたかったのかもしれないし、そもそものが山幸彦が海へ行って海神の娘を娶るなどなど、山と海のいずれもが近い距離ならば、案外自然。などと思ってしまうたりもするわけですね。



杳見地区の莫越山神社拝殿。

：わたし自身もずいぶん変わってきているのだと感じます。かつてであれば、この杳見と宮下の間に中央集権による覇権主義的なものを見て、きっと哀しみのようなものを感じてしまっていたことでしょう。

いや、そういうものをまったく感じていない、といったら嘘になります。ただ、それが覇権主義なのか、否か。それを哀しみと捉えるのか、それもまた人の営みと捉えるのか、否か。そういう部分で、わたし自身も静かに絶えず変わってきていますし、それは土地に暮らす人々の思いや考えとて同じ。

ただ、ここに論社が二つあって、一方は祖神信仰に厚く、一方はよりステレオタイプの信仰に厚い、という事実だけを受け止めてお終い、というのもまたずいぶんと味気ないものです。せつかくの旅、せつかくの古歌紀行なのですから、その愉しみ方の一つとして推理したり、想像したりがあってもいいのではないかと。

かつて悲劇的なものが好きでした。底流する人間の業であったり、罪深さであったり、時代という一定方向にしか流れることのできないものに対する諦念であったり、そういうすべてにある意味でのカタルシスを求め、東洋的な概念に染まりきっていた頃のわたしだったら、きっとここで軽く絶句したり、もしかしたら泣いたりもしたのかもしれない。

でも、根底で人間は強い。いや、弱いものだと常々思っ

もいるのですが、何というのでしょうか。情緒的、あるいは極めて個人的な情動における弱さを凌駕する、人間の逞しさ。荒地を拓き、そこに根付き、子を産んで育てて、そして、そして…。

上代文学を近しくする身として、けれども平安以降の「もののあはれ」のような前提でそれらを咀嚼し味わってきたのではないだろうか、わたしは。そもそも神話という名を借りた古代の間は、けれども工作機器などなくても巨大な陵を築き、科学によって却って弱くなってしまう現代人には、およそ想像もできないような逞しさで海を渡り、道を造っては命を紡いできたわけで。もっとシンプルに。もっと大らかに。それでも生きてきた人々の躍動とその恵みを愛しむことを。それをもっと、もっとやっただっていいんじゃない。参拝を終えて、石段を次第に駆けるように下りながら感じ始めていました。それだって、いいんじゃない、と。

歌謡ひ舞ひ舞へばなほもろひとの笑み
命生く道あらばゆくもろひとの歌

遼川るか

(於：沓見地区の莫越山神社前駐車場)

(六)

沓見を発って、まずは海岸線近くを目指します。沓見地区界限からは外房黒潮ライン(国道一二八号)で一気に館山、つまりは内房側へ出られてしまうのですが、それでは安房の安房たる地を素通りしてしまうことも同義。房総半島にあって、もっとも緯度が低く、もっとも南に位置する地

域を房総フラワーライン（国道四一〇号）に沿ってただただ南下。

時折見える海水浴場は、それなりに人出があるのでしようが肝心の天気は、徐々に怪しくなってきた。台風は近づいてきていないはずなのですが、どんより重たげな雲と、午前中が嘘のように薄暗い中、ついには車のフロントガラスにも大粒の雨がぼつり、ぼつりと。海もどうやら波が高いようです。

やがて名倉の海水浴場近くで房総フラワーラインと国道四一〇号が分かれます。そのまま房総フラワーラインを走り続けて、目指すは白浜町の滝口界限。下立松原神社、という莫越山神社同様の延喜式内社です。社格も同じく小。ただ、手持ちの地図でははっきりとした場所が全く解らず、といいますが、市町村合併で以前の住所ではないのですね、安房国の多くの場所は。南房総市という大きな市になってしまったものですから、昭和期に書かれた文献だけを頼りに探しても、もうどうにも。長尾川という川の近くだとは解っていましたが、その川すら解らない有様です。

これまでの古歌紀行文で何度も書いていますが、だめなんです、雨。雨に祟られるとどうしてもモチベーションが一気に落ちてしまっています。

房総半島最南端の野島崎の灯台をとりあえずのランドマークに、先ずは少し休憩しようかしら、と立ち寄ったのが白浜野島崎の道の駅です。車を止めたかったこともあるのですけれど、あとは道を尋ねたかったり、地図上で見つけられていない、この先に訪ねたいポイントの情報収集だったり。ですが、車を降りて最初に見えた灯台の姿にしばし立ち竦んでしまいました。それとやっぱり最南端という事実が、最果て好きにはたまらなかったわけ。

流石にこの天候で灯台はないです、先も詰まっているから今回は見送るとして。とにかく道の駅にいらつしやる地元の方に、下立松原神社の場所を聞きました。けれども皆様、ご存じない、とのこと。ならば、と昭和期の住所で聞いてみたところ、長尾川の位置だけは解りました。あとは川

沿いに周囲のお宅に聞いてゆくしかなさそうです。

「そんな地元の間でも知らない場所に、神奈川からねえ…」

「いや、はい…」

「あんま役に立てなくてごめんねえ、他にはなんか解んないことある？」

「相手をしてくださった年嵩のご夫婦は、わたしのことを物珍しそうに眺めます。」

「ああ、難しいのは無理だよ」

「そうそう、この辺のもんがみんな知ってるんじゃないと教えられないって」

「それはそうなんでしょうけれども。」

「あの、この界限ではないと思うんですけど浮島という場所も行きたくて」

浮島。当初、この地名はノーマークでした。安房Ⅱ忌部Ⅱ古語拾遺。もう頭からそう思い込んでしまっていて、あとは防人歌くらいだろう、と暢気に構えていたわたしが急に、慌てだしたのが実は今日、キャンプ場を出た後でした。途中々々のポイントで持参していた資料に目を走らせている時に、目に飛び込んできたのが浮島の行宮という文字…。

すみません、倭建命についてはそれなりに追いかけていたのですが、その父・景行天皇については、日本書紀を読み端折っていました。それで慌てて地図を調べるも、そもそものが土地勘なし、慣れない大型営業車の運転で余裕なし、ついでに言うならば最終的には会社まで車で帰らなければならぬわけで、それほど長く千葉にはいられない、という状況に、じっくり地図を調べられていなかった、と言いますか、地図のどのあたりを探しているのかすら、よくわかっていませんでした。

「浮島ったら勝山だよ、お姉さんそんなことも知らないの？」

「地元のお父さんは、こちらが意外に思うくらい驚いたご様子。」

「いや、あの勝山って」

「違うよ、地図のそんなところじゃないって、もつと北、北」

あとで聞いたら奥様は勝山のご出身とのこと。

地図上で確認した浮島は、東京湾フェリーの千葉側・浜金谷よりも少し南に位置する、安房勝山の海上一km辺りにある小島でした。∴因みにわたしが必死に地図で探していたのは、そこから二十km近くも南の館山界隈。ロードマップでは見開きにして二ページ手前でして、見つかるわけありませんね。

ただこれでこの日の残りのポイントの位置関係がすべて頭に入ったわけで、当然順路とそれぞれに割ける時間とが何となく計算できました。だって、浮島はどうしたって日のあるうちじゃないと訪ねても意味がなさそうです。最悪でも夕方六時。そこまでは、浮島に着いていないと∴。

萎えかけていたモチユベーションが一気に回復したものです。ならばもう、時間を無駄にできないので、車はここに置いたままで足で下立松原神社を探したほうが早い。そう思い立ち、雨が降ったりやんだりしている中、とにかく長尾川へ。途中、めがね橋という県指定の重要文化財を横目に見つつ、川沿いを山側へ。

恐らくは一kmは歩かなかったと思います。やがて川と川沿いの道路が分かれるあたりで道端の商店で聞き、ようやく大体の位置がつかめた下立松原神社を目指します。雨は相変わらずぽつぽつ落ちてきてはやみ、やんだかと思うとまたぽつぽつ。

そもそもこの下立松原神社。正直なところ式内社という予備知識があるだけで、あまりよく解っていませんでした。忌部五部神の石柱・天日鷲命が祭神であるということと、お社を興したのが、安房開拓の祖とも言える天富命の娘婿・由布津命だ、ということくらい。

順当に行けば、この天日鷲命あたりに関する記述を、となるのですがこれが中々手強い∴。記紀

と古語拾遺という立ち位置の異なる文献の隙間は、やはりどうにも埋めようもなく、けれども自身なりの思いを綴ろうにも、そもそもこれまで自身が書いてきている古歌紀行文は、それでも結局は記紀に準じていたわけで。「わたのそこおきゆ」で少し触れた古史古伝ともまた違って、わたしは一体、どうしたんだろう、と。

そんな疑問を、ようやく見つけられた下立松原神社の参道に立ったとき、ふいに思ってしまったものでした。そしてそれが後々まで解消不能のまま引きずるものとなっていたのは、また別のお話。ともあれ、先ずは境内へと続く石段を登ります。

下立松原神社。実際に境内に立ってみて、参道を歩いてみて、実感したのはその広さです。この手の古社の中では、過去に訪ねた中でも屈指の広さです。後に官幣大社であったり、一ノ宮であったりすれば、とんでもなく広いお社も多々ありますが、地元の人でも場所なんて知らない、と言われてしまう古社にしては、とにかく広い。

それと、先ほどまでぼつつ、ぼつつ、と降っていた雨が、参道両脇へ鬱蒼と繁る木々によって感じられなくなり、薄暗さも手伝って森閑、あるいは静謐。そんな言葉を添えたくなるような空気に包まれている空間に、

「ああ、今回はここだ…」

と言葉が漏れてしまいました。各地を周っていると、その土地で必ず一カ所は、自分はここに呼ばれたから来たのだな、と感じてしまう訪問地があります。今回は、ここ・滝口地区の下立松原神社にそれを感じてしまいましたし、けれどもこの存在自体、ほんの数日あるいは数時間前に知った筈なのに、と。



滝口地区の下立松原神社参道。

呼ばれるという感覚は、特に何かが圧倒的に違って覚えるわけではありません。不思議と毎回、ささいなことに納得してしまうだけです。ただ、境内に足を踏み入れた途端に風が変わった、とかそれまでの張り詰めたような空気が一変して、やわらかなものに包まれた感覚がした、とか呼吸が急に楽になった、とか。あるいはやたら懐かしさを覚える場合もあれば、この滝口の下立松原神社のように何らかの感触ではなくていきなり、

「ああ、ここだ」

というセンチンスが頭の中を過ぎることも稀にあります。ただし毎回共通しているのは、その根拠についてわたしは考えようとか、検証しようとか全く思わず、そのまま純粹に受け入れますし、それに対して違和感もない、という点。

ともあれ、それ自体の是非は擱いて、先ずは参拝。

祭神の天日鷲命という存在について、です。前述している通り、阿波忌部の祖、とされていますね。わたしが目を通した限り、古事記はともかく、日本書紀にも先代旧事本紀にも、そしてもちろん古語拾遺にも登場している一柱です。幾つかの別名を持っている、あるいは同一視されている、ということなのなのかもしれませんが、天日鷲翔矢命とか天加奈止美命、麻植神などなど。

新撰姓氏録には、

神魂命五世孫天日和志命之後也

「新撰姓氏録 第二帙／神別」

神魂命七世孫天日鷲命之後也

「新撰姓氏録 第二帙／神別」

という記述があり、一方で伊勢国風土記逸文には

夫伊勢国者、天御中主尊之十二世孫―天日別命之所平

「伊勢国風土記逸文」

ともあります。阿波忌部の系図で見ると、やはり神魂命（＝神皇産霊尊）の五世孫。驚いたのが、祖父に当たるのが天之常立神（天底立命）となっていることで、古事記に習うならば伊弉諾・伊弉冉が最後に現れる神代七代のその前。別天つ神五柱の最後の一柱なのですが。その孫が天日鷲命となりますと、なんだか急に古事記神代が史実のように思えてきてしまうのが、すごいと言いますか、逆に怖いともいいますか。

改めて今、自身が辿っている忌部の足跡というのは、まさしく神話と史実の境界線上をいったりきたりしている、それくらいこの日本のという国の原初に遡る行為なのだ、と思いついてしまいました。天岩戸で活躍する天太玉命では、そこまで感じなかったんですけどね。

というのもこの天日鷲。様々な俗説・記述の宝庫のような存在で、流石にそれぞれの原典までは

確認しきれいていませんけれど、

- ① 伊勢国を平定した
- ② 父親が天手力男
- ③ 父親が天群雲剣
- ④ 少彦名神と同一神

などなどなど。とてもすべては追いきれませんし、あくまでも安房国を訪ねているのですから、それはまた阿波なり、伊勢なりを訪ねた時のお楽しみにおいていいでしょう。いずれにせよ、恐らく天日鷲自体は阿波の祖ではあっても、安房には来ていません。実際に安房へやってきたのは、神魂神ではなく、高皇産靈尊の孫である天太玉命のそのまた孫の天富命と、それに従った由布津主命。

そしてその由布津主命の祖父こそが天日鷲命ですし、この下立松原神社を興したのも、由布津主命、と。莫越山神社を小民命・御道命が興し、それぞれの祖である彦狭知命と手置帆負命を祭神とした、という経緯と近いものがあるのでしょうか。

当時の新天地開拓というものは、それぞれの個人・家族・氏族とってどういう意味をもっていたのでしょうか。自身の家系に例えるならば、わたしの父親は次男で生まれ育った鹿児島を離れ、神奈川に移り住みました。長男一家は地元に残り、彼は首都圏へ。と、ここでまた所帯を持って、となったわけですが、それでも彼にとつての故郷は神奈川ではありません。

わたしが子どもの頃、飲むと故郷の話をしていた彼が何となく思い出されるわけですけど、父の上京当時も飛行機などはあまり一般的でなく、夜行なり何なりだったのだらうと思います。今で

こそ、日に直行便が複数あり、九州新幹線なるものまで走っていますけれど、やはりそれなりの覚悟はしていたのでしょうか。中々帰ることは叶わない、と。

仕事柄、在日ブラジル人と接する機会も多いです。彼らの親、あるいは祖父母が日本を離れて新天地を求め、すでにあちらの国で生まれた彼らは逆に今、日本へと太平洋を渡ってきています。日伯間は国内移動まで含めれば七十二時間も要する場合があります。

恐らくは、当時のそれはもともとと覚悟を要するものだったでしょうし、けれども逆にもしかしたら日本に限らず世界各国民族の、古代に於ける移動・拡散を考えると、そういう悲壮感もまた、なかったのかもしれませんが。より肥沃な地を求めるということは、すなわち生き抜くための行為であり、選択ですから。もともとと原初的な欲求や直前の事情の方が重要であって、情緒的な云々は、と。

莫越山神社で感じた「もののあはれ」を前提とした捉え方では、という思いが再度込み上げてきていました。防人は、言ってしまうえば律令という代物ゆえの制度。その制度に対する個人の感慨を歌に詠めば、時に妻恋なり、何なりもまた解ります。…が、律令がない時代の、あくまでも氏族単位でのお話なのですから。

天日鷲命とその孫・由布主津命。由布津主命は天富命の娘・飯長姫との間に訶多々主命をもうけ、この訶多々主命こそが安房忌部の祖。子孫たちはこの地に続く古社の宮司を代々務めている、とも聞き及んでいます。

いや、本来にある意味で凄いいことです。繰り返しになりますが、古事記に最初の造化の三神と謳われる存在のどれとも繋がりある、とされる血脈。いや、もちろん天皇家を筆頭に、例えば、某女優さんが藤原家の末裔であったり、現代にわたしたちが生きている以上、そこには何らかの形で続いた血脈があって、それらを辿ればむしろ天孫降臨や天岩戸に誰だって辿り着けても不思議ではな

いのかもしれません。

余談になりますが、わたしの父方の姓は諸説あるうち、新撰姓氏録に宣化天皇の皇子・火焰親王の子孫が賜ったものという記述もあれば、武甕槌神の十五世孫の子が云々というものであります。…武甕槌はご存知、伊弉諾尊が軻遇突智を斬った際に散った血から生まれ、天孫降臨に先駆け、葦原中国の平定に降りた存在です。

ですが、だからどうだというわけでもないですし、そこに裏を取ろうという気もなければ、ただ「ふうん」

としか思えないのは実感が湧かないから、という一語に尽きます。

なのに何故、今こうして自身が立つ下立松原神社では、それが奇妙なほど厳粛で、静かな興奮すらも伴う感慨を惹起してしまうのか。…それが呼ばれた、という感触の答えなのかもしれません。

ともあれ、天日鷲命に纏わる主だった記述を、改めて引用しておきます。まずは天岩戸に関連するもの。

一書に曰く、是の後に、日神の田、三処有り。號けて天安田・天平田・天邑并田と曰ふ。此皆良き田なり。霖旱に經ふと雖も、損傷はるること無し。其の素戔鳴尊の田、亦三処有り。號けて曰天◆田・天川依田・天口銳田と曰ふ。此皆礪地なり。雨れば流れぬ。旱れば焦けぬ。故、素戔鳴尊、妬みて姉の田を害る。春は廢渠槽、及び埋溝、毀畔、又重播種子す。秋は捶籤し、馬伏す。凡て此の悪しき事、曾て息む時無し。然れども、日神、愠めたまはずして、恒に平恕を以て相容したまふこと、云云。

日神の天石窟に閉り居すに至りて、諸の神、中臣連の遠祖興台産靈が兒天兒屋命を遣して祈ましむ。是に天兒屋命、天香山の眞坂木を掘して、上枝には、鏡作の遠祖天拔戸が兒

己凝戸邊が作れる八咫鏡を懸け、中枝には、玉作の遠祖伊弉諾尊が兒天明玉が作れる八坂瓊の曲玉を懸け、下枝には、栗國の忌部の遠祖天日鷲が作れる木綿を懸でて、乃ち忌部首の遠祖太玉命をして執り取たしめて、廣く厚く称辭をへて祈み啓さしむ。

「日本書紀卷一 第七段」

※◆は木偏に識の言偏を除いた旁の表記です

時に、八百萬神、天八湍河の河原に神会集て、其の祈謝奉可方を議計たまふ。高皇產靈尊の兒思兼神思慮之智有り。深く謀り遠く慮議て曰はく

「常世の長鳴之鳥を聚て、遂に聚て鳴合しむ。復、宜く日神の御像を圖造て、招祈禱奉るべし」

とまふす。

復鏡作の祖石凝姥命を治工と為し、則ち、天八湍河の川上の天堅石を採る。復真名鹿皮を全剥にし、以天之羽備を作り、復天香山之銅を採て、日矛を鑄造令む。此鏡少意に合わす。則ち紀国に所坐す日前神是なり。

復鏡作の祖天糠戸神を使召す。石凝姥命の子なり。天香山之銅採て日像之鏡を圖造使む。

其狀美麗し、而に窟戸に觸て小瑕有り。其瑕今猶存り、即ち是伊勢に崇秘大神なり。所謂八咫鏡、亦の名は真經津鏡是なり。

復、玉作の祖櫛明玉神に令じて、八坂瓊之五百箇御統之珠を作しむ。櫛明玉神は、伊弉諾尊の兒なり。

復宜く、天太玉神に令して、諸部神を率いて幣を造しむ。

復、麻續祖長白羽神麻を種て以て青和幣を為せ衣令む。

白羽と稱ふは此其縁なり。

復、津咋見神に穀を種植しめ、木綿を以て、白和幣を作む。並て一夜に蕃茂ぬ。

復、栗の忌部祖―日鷲神に令して、木綿を造しむ。

復、倭文造の遠祖天羽槌雄神に令してて文布を織しむ。

復、天棚機姫神に令して、神衣を織令む。所謂和なり。

復、紀伊忌部の遠祖手置帆負神に令して、作笠と為す。並びて一食とす。

復、彦狹知神に令して盾を為作む。

復、玉作部遠祖豐球玉屋神に令して玉を為作る。

復、天目一箇神に令して雑の刀斧及鐵鐸を為造む。

復、野槌者に令して五百箇野薦八十五玉簀を採す。

復、手置帆負、彦狹知二神に令して、天御量に詔て大小く雑の器類を量り以て名をつく。

復、大峽少峽之材を伐て、瑞殿を造しむ。古語に美豆乃美阿良可と云ふ。

復、山雷者に令して天香山之五百箇真賢木を掘にせしむ。古語に左禰古自乃禰古自といふ。

上枝には八咫鏡を懸く。亦の名を真経津之鏡と云ふ。

中枝には八咫瓊之五百箇御統之玉を懸く。

下枝には青和幣白和幣を懸く。

凡て、厥種種諸物儲備之事具に謀所如し。

「先代旧事本紀 卷一 神祇本紀」

爰に思兼神、深く思ひ遠く慮りて、議して曰はく、

「太玉の神をして諸部の神を率て、和幣を造らせしむべし。仍りて、石凝姥神（天糠戸命の子、作鏡が遠祖なり）をして天の香山の銅を取りて、日の像の鏡を鑄しむ。長白羽神（伊勢国の麻績が祖なり。今の俗に、衣服を白羽と謂ふは、此の縁なり）をして麻を種ゑて、

青和幣（古語に爾伎弓といふ）と為さしむ。天日鷲神と津咋見神とをし穀の木を種植ゑて、白和幣（是は木綿なり。已上の二つの物は、一夜に蕃茂れり）を作らしむ。天羽槌雄神（倭文が遠祖なり）をして文布を織しむ。天棚機姫神をして神衣を織しむ。所謂和衣（古語に爾伎多倍といふ）なり。櫛明玉神をして八坂瓊の五百箇の御統の玉を作らしむ。手置帆負・彦狹知の二神をして天つ御量（大き小さき斤雑の器等の名なり）を以ちて大峽・小峽の材を伐りて、瑞殿（古語に美豆能美阿良可といふ）なり。を造り、兼、御笠、及、矛・盾を作らしむ。天目一箇神をして雑の刀・斧、及、鐵鐸（古語に佐那伎といふ）を作らしむ。其の物既に備はりて、天の香山の五百箇の眞賢木を掘じて（古語に、佐祢居自能祢居自といふ）、上枝には玉を懸け、中枝には鏡を懸け、下枝には青和幣・白和幣を懸け、太玉命をして捧げ持ち称讃さしむ。

斎部広成「古語拾遺」

いずれの記述も、少なくとも天日鷲命が果たした役割に限るならば、大筋では差異がありません。ただ、彼の系譜にまでその範囲を広げるならば、古語拾遺はもちろん、先代旧事本紀の記述はかなり詳細です。天日鷲命の子、とされている津咋見神・天羽槌雄神・長白羽神までもが登場しています。余談になりますが、こういうところに、古語拾遺より後に先代旧事本紀がものされている片鱗を見ることができすね。

続きまして、今度は天孫降臨にまつわる記述を引きます。

時に高皇産靈尊、大物主神に勅すらく

「汝若し国神を以て妻とせば、吾猶汝を疏き心有りと謂はむ。故、今吾が女三穗津姫を以

て汝に配せて妻とせむ。八十萬神を領ゐて、永に皇孫のために護り奉れ」

とのたまひて、乃ち還り降らしむ。即ち紀伊国の忌部の遠祖手置帆負神を以て、定めて作笠者とす。彦狹知神を作盾者とす。天目一箇神を作金者とす。天日鷲神を作木綿者とす。櫛明玉神を作玉者とす。乃ち太玉命をして、弱肩に太手繩を被けて、御手代にして、此の神を祭らしむるは、始めて此より起これり。且天兒屋命は、神事を主宗源者となり。故、太占の卜事を以て、仕へ奉らしむ。高皇產靈尊、因りて勅して曰く、

「吾は天津神籬及び天津磐境を起し樹てて、当に吾孫のために斎ひ奉らむ。汝、天兒屋命・太玉命は、天津神籬を持ちて、葦原中国に降りて、亦吾孫の為に斎ひ奉れ」
とのたまふ。乃ち二の神を使して、天忍穗耳尊に陪從へ降す。

「日本書紀 卷一 神代下」一部再引用

高皇產靈尊、大物主神に詔く

「汝若国神を以て妻と為ば吾猶汝疏心有りと謂はむ。故、今以吾女三穗津姫命を以て汝に配て妻と為む。宜く八十萬神を領て永に皇孫の為に奉護れ」
とのたまひて、乃ち還降り使たまふ。

紀伊国忌部の遠祖手置帆負神を以て作笠を定為す。

彦狹知神を以て作盾と為す。

天目一箇神を以て作金之者と為す。

天日鷲神を以て作木綿と為す。

櫛明玉神を以て作玉と為す。

太玉命を使って以て弱肩に太手繩を被御手代以て以て此神を祭り此より起り。
且、天兒屋命神事を主る宗源なり。故、太占の卜事を以て奉仕しむ。

高皇產靈尊敕て曰はく

「吾則天津神籬及び天津磐境を葦原中国に起樹て、亦た吾孫の為に齋奉らむ」とのたまふ。

「先代旧事本紀 卷三 天神本紀」

意外かもしれませんが、実は肝心の古語拾遺。天孫降臨に関して、忌部氏の活躍はほとんどふれていません。これは、そもそも古語拾遺が記紀に対する拾遺として書かれているもの、つまり広成老から見るに、前記引用の日本書紀の内容に特に書き加えるものはなし、と判断したからなのではないか。

あるいは、天孫降臨のあとに続く、古語拾遺の記述にこそ、広成老の本当に書き残したかったことが読み取れるから、なのかもしれません。いや、恐らくはそうなのでしょう。

仍りて、天富の命（太玉の命が孫なり）をして、手置帆負・彦狹知の二柱が神のを率て、斎斧・斎鋤を以ちて、始めて山の材を採りて、正殿を構り立てしむ。所謂、底つ磐根に宮柱ふとしり立て、高天の原に搏風高しり、皇孫の命の美豆の御殿を造り仕へ奉れるなり。

故、其の裔、今紀伊の国の名草の郡御木・匳香二郷在り（古語に、正殿は匳香と謂ふ）。材を採る斎部の居る所は、御木と謂ふ。殿を造る斎部の居る所は、匳香と謂ふ。是、其の証なり。

又、天富の命をして、斎部の諸氏を率て、種種の神宝、鏡・玉・矛・盾・木綿・麻等を作らしむ。櫛明玉の命が孫は、御祈玉（古語に、美保伎玉といふ。言ふところは祈禱なり）を造る。其の裔、今出雲の国に在り。年毎に調物と共に其の玉を貢進る。天日鷲の命が孫、木綿、及、麻、并、織布（古語に、阿良多倍といふ）を造る。仍りて、天富の命をして日



現代の大幣(紙製)。かつては木綿を原料としていた。

鷲の命が孫を率て、肥饒き地を求ぎて、阿波の国に遣はして、穀・麻の種を殖ゑしむ。其の裔、今、彼の国に在り。大嘗の年に当たりて、木綿・麻布、及、種種の物を貢る。所以に、郡の名を麻殖と為る縁なり。天富の命、更に沃き壤を求ぎて、阿波の斎部を分かち、東の土に率往きて、麻・穀を播殖う。好き麻生ふる所なり。故、総の国(古語に、麻を総と謂ふ。今、上総・下総の二国と為す、是なり)と謂ふ。穀の木生ふる所なり。故、結城の郡と謂ふ。阿波の忌部の居る所、便ち安房の郡(今の安房の国、是なり)と名づく。天富の命、即ち其地に立太玉の命の社を立つ、今安房の社と謂ふ。故、其の神戸に斎部氏有り。又、手置帆負の命が孫、矛竿を造る。其の裔、今、分かれて、讃岐国に在り。年毎に、調庸の外に、八百竿を貢る。是、其の事等の証なり。

斎部広成「古語拾遺」

はい、すでに莫越山神社に関連して引きました、この件です。おそらく、ここ・安房国に限るのならば、もつとも重要とも言える記述ですし、この一文があつてこそ、安房を訪ねたく思う者もまた、いるわけですね。

それから、この滝口の下立松原神社を興したとされる由布津主命。天日鷲命の孫であることは、前述していますが、では父親は、と言いますと津咋見神なのだそうです。

身勝手な想像になってしまいましたが、天岩戸で木綿を作った祖父・天日鷲命と父・津咋見神。その息子は麻や、木綿の元となる楮のよく茂る肥沃の大地を求めて東国開拓に加わり見事、安房と

上総、下総を拓きました。麻と総が同義であることは「なつそびくうなかみがたゆ」でも書いていますが、他に木綿は音にしてゆふであり、下総は結城郡、現在も群馬県結城市としてその名にかつてを遺しています。結城はゆふき。息子の名も由布津主（ゆふつぬし）。

いやいや、ここまで踏み込むと由布津主が祖父・天日鷲を祀ろうとしたのも、何だかとても得心してしまいます。二十一世紀の現代でも、神道では玉串についている木綿や麻から作る麻苧は欠かせません。政教一致だった時代の、天皇家の政に欠かせない神具の原料と、その栽培地を求めての開拓に彼が、自らの名に従って従兄弟に当たる天富命と一緒に黒潮に乗って東へと向かった思い。かつて、天孫と一緒に降臨した祖父たちの思いを受け継ぎ、そしてさらに進め、広めるために東へ、東へ。その思いの名を、誇りと呼ぶのではないでしょうか、きっと。

ただし、字面からわたしたちが即座に思い浮かべる木綿（もめん）が国内栽培されるようになったのは一六世紀後半、安土桃山時代の頃。ここで言う木綿（ゆふ）は現代の木綿とは全くの別物です。むしろ繊維によるものとはいえ成分からすれば紙に近い代物だった、と言えそうですね。というのも、引用にもある通り、穀の木ですから。そして、この穀が現代でいうところの梶、あるいは楮のことです。

：はい。和紙の原料となるあの楮なんですね。現代では、神事に使われる幣は殆どが紙製ですが、それもその筈。

さらには、当時の紙がどれくらい貴重だったのか、を考え合わせると、忌部の人々が、天富命が、そして由布津主命が。それらの栽培に適した地を求めて船の舳先を東へ向けた姿が、くきやかに立ち上がります。：神代から神武期はおろか、万葉期に至るまで、紙ではなく木簡・竹簡に様々な記述が残されたことが、恐らくはこの裏打ちともなりましょう。

鳥が鳴くあづきゆきゆくゆくへ

もろひと欲りす手向草

かみろぎかむおや

神そ祝き祝かむ玉串

わたつみにふねかち浮かべ

漕ぎ出でぬ

漕ぎたみ漕ぎたみ

こはいかに

こはいかなるや

しながとり安房

日緯の阿波紀伊ゆ

漕ぎたみ漕ぎたみ

こしたりて

穀種植ゑしめぬ

木綿畳

しろにきしろにき

あきづしまやまと天地

もろひとの真幸くあるを

祈ひ待みて

穀種植う麻種植う

みづひたし蒸し蒸しつくる

木綿倭文

しろにきあをにき

遠祖にならひならふを

ほこりゐしゆゑ

あるを欲りあるこそほこりほりさばほらめ

ゆくを欲りゆくこそほこりほりさばほらめ

遼川るか

（於：滝口地区の下立松原神社境内）

由布津主の誇り。それが、改めて手繰れるような思いに駆られながらの雨上がり。立ち込めた靄と、それゆえに一層、厳肅さが増した下立松原神社境内で、臉の裏で結んだ像を確かめていました。

ところで、天岩戸や天孫降臨はもちろん、神武よりもさらに時代が下った万葉期。この木綿（ゆふ）は多くの歌に詠み込まれています。大体三〇首くらいでしょうか。すべては無理なので、個人的に好きなもの、特徴的なものを幾つか引いておきます。

三輪山の山辺真麻木綿短か木綿かくのみからに長くと思ひき

高市皇子「万葉集 卷二―一五七」

ひさかたの 天の原より

生れ来る 神の命

奥山の 賢木の枝に

しらか付け 木綿取り付けて

斎瓮を 斎ひ掘り据ゑ

竹玉を 繁に貫き垂れ
獣じもの 膝折り伏して
たわや女の 襲取り懸け
かくだにも 我れは祈ひなむ
君に逢はじかも

大伴坂上郎 「万葉集 卷三―三七九」

木綿畳手に取り持ちてかくだにも我れは祈ひなむ君に逢はじかも

大伴坂上郎 「万葉集 卷三―三八〇」

うちひさつ 三宅の原ゆ
直土に 足踏み貫き
夏草を 腰になづみ
いかなるや 人の子ゆゑぞ
通はすも我子 うべなうべな
母は知らじ うべなうべな
父は知らじ 蜷の腸
か黒き髪に 真木綿もち
あざさ結ひ垂れ 大和の
黄楊の小櫛を 押へ刺す
うらぐはし子 それぞ我が妻

作者未詳 「万葉集 卷十三―三二九五」

後れにし人を思はく思泥の崎木綿取り垂でて幸くとぞ思ふ

丹比屋主真人「万葉集 卷六―一〇三一」

肥人の額髪結へる染木綿の染みにし心我れ忘れめや

作者未詳「万葉集 卷十一―二四九六」柿本人麻呂歌集より撰

天雲の 向伏す国の

ますらをと 言はれし人は

天皇の 神の御門に

外の重に 立ち侍ひ

内の重に 仕へ奉りて

玉葛 いや遠長く

祖の名も 継ぎ行くものと

母父に 妻に子どもに

語らひて 立ちにし日より

たちねの 母の命は

斎瓮を 前に据ゑ置きて

片手には 木綿取り持ち

片手には 和栲奉り

平けくま 幸くいませと

天地の 神を祈ひ禱み

いかにあらむ年月日にか
つつじ花にほへる君が
にほ鳥のなづさひ来むと
立ちて居て待ちけむ人は
大君の命畏み
おしてゐる難波の国に
あらたまの年経るまでに
白袴の衣も干さず
朝夕にありつる君は
いかさまに思ひませか
うつせみの惜しきこの世を
露霜の置きて去にけむ
時にあらずして

(七)

大伴宿禰「万葉集 卷三―四四三」

滝口の下立松原神社を後にして車に戻り、海岸線を再び。目指すは、今回の古歌紀行の最重要ポイント、とすべきなのでしょうね。ここまでの莫越山神社は、安房開拓に加わった氏族のうち、紀伊忌部や讃岐忌部の流れが色濃かったですし、下立松原神社は阿波忌部の流れ、としてしまつて

いいでしょう。

ですが、忌部五部神の系譜というのは忌部の系譜そのものからすれば、傍流、あるいは朝廷より与えられた品部です。当然ですけれどそれらを束ね、忌部本来の神事・祭事を執り行っていた中央忌部とでもいいいますか、解りやすくいえば本家のような存在があるわけでして。その祖たる存在こそが、天孫降臨に付き従った五伴緒の石柱・天太玉命そのひとですし、その孫にあたる天富命が安房開拓の祖でもあることは、すでに書きました。つまり、ここ・安房の地にも忌部の本流を祀るお社は必ずあるはずですし、あるとするならばやはり、安房上陸を果たした地にこそ、と。そう考えるのが自然だと思います。

今日、内陸部から海岸線を目指して来たわたしが、ここまで品部たちの足跡を辿ってきているのもその証左となるでしょうし、先ずは開拓民の団がそこにいるすべての者たちの祖、あるいは主の祖を祀り、そこから開拓が進むにつれて、それぞれの定住していった地も次第々々により小さな単位での集団の祖を祀った…と。とてもシンプルな構図が描けますね。

延喜式に、安房国には社格が大とするお社が二座。

安房国六座 大二座 小四座

安房郡二座 並

大

安房坐神社 名神大。月次。新嘗

后神天比理乃咩命神社 大。元名洲神

朝夷郡四座

並 小

天神社
莫越山神社
下立松原神社
高家神社

「延喜式 卷九 神祇九」再引用

安房坐神社。現在では、一般に安房神社と呼ばれる後の官幣大社は、先の野島崎を房総半島の最南端として、すでに東京湾側へ入った地に鎮座しています。因みに住所地番も、そのものの大神宮、です。それくらい大規模な神領がその昔、存在していたのでしょね。



安房神社の大鳥居。

営業車にはカーナビがついていますから、いつものように地図を片手に右往左往する必要が、今回はないのですけれど、それでもここまでのお社はカーナビの地図上には名前がありませんでした。が、流石は官幣大社。地図上に名前があるどころか、五十音検索の項目にも存在しています。

海岸線の大きな通りから、細い路地を何度か曲がりまた大層、立派な鳥居へ。鳥居の傍に数台の駐車スペースもあって、そこからは歩きます。

安房という地に於けるこのお社の権勢がいやでも感じられるほどの、そもその敷地の広さと、参道の広さ。安房国の一ノ宮は洲崎神社、と認識しているのですが、現代では安房神社もほぼ一ノ宮として周知されているのが、納得できてしまいます。

玉砂利を敷きつくした参道を進み、拝殿前の由緒書を確認します。曰く

房総半島の南端神戸郷に鎮り坐す旧官幣大社安房神社は、天太玉命を主祭神に天比理刀・命を配祀として奉斎し、摂社下の宮に天富命を祀る。

延喜の制には名神大社に列せられ、安房国唯一の由緒正しき名社である。

本社的主祭神天太玉命は中臣氏の祖神天児屋根命と相並んで天照皇大神の側近に奉仕し祭祀を司られた重要な神に坐します。

天照皇大神が天石窟に御幽居あらせられた時には、天太玉命は天児屋根命と共に大神の御を侍り遂に再び大御神の天日の如き御威徳を仰ぎ奉られたのである。

安房開拓の神として当社の下の宮に祀らるる天富命は、天太玉命の御孫にあたらせられる。天富命は四国の阿波国忌部族の一部を割いて関東地方に大移動ほ起し、最初に占拠されたのが房総半島の南端、即ち現在の安房神社の鎮座地であつて茲に本拠を定めて祖神天太玉命の社を建てた後、次第に内地の方に進みこの半島に麻穀を播殖しその産業地域を拡められたのである。

安房神社の御祭神は、日本産業の総祖神として崇められ更に現在では家内安全、交通安全守護神、厄除開運等、関東地方随一の神社として信仰が厚い。

安房神社由緒書

主祭神は上の宮が天太玉命、相殿が後の天比理乃咩命。一方の下の宮の祭神が天富命と天太玉命の弟・天忍日命となっています。それに加え、かつては忌部五部神も相殿とされていたようですね。正直、ここ安房神社に限らず、各地のいわゆる名神大社クラスのお社の由緒書というものがわたしはあまり得意ではありません。というのも唯一の、とか随一の、という修飾を本当に良く見かけ

るものですから。もちろん、その地にあつてそのことを最大の拠所として今日まで至っているのですから、そこに変な誇張や他意はないのでしようけれど、少々肩が凝ってしまっています。

ですが、少なくとも安房神社のこの由緒書は読むべきもの、と感じてしまえますし安房国開拓神話そのものでもあるわけですから、しみじみ読み耽つてしまいそうです。後で安房神社の厩も確認していますが、内容的にはほぼ古語拾遺を踏襲していて、曰くそもそものは神武勅命の阿波開拓から始まり、さらには安房開拓へ、と発展していった、と。

ただ、大筋はさておき、安房神社の由緒で一つだけ引つ掛かつてしまったのが、占拠という表現です。…文字通りの占拠、だったのでしょうかね、恐らくは。当時、どれほどの先住民が暮らしていたのか、は全くもって不明ですけれども。

先ずは上の宮に参拝します。これも実は、後から知ったのですが主祭神の天太玉命、驚いたことに天宇受売命の父親に当たる、とのこと。正直、以前から天孫降臨伝説に違和感は覚えていたんですね。というのも天孫・瓊瓊杵尊に随行した五伴緒。天児屋命・天太玉命・天宇受売命・伊弉理度売命・玉祖命、という顔ぶれなのですが、これはどういう意図での組み合わせなのか、と。

天児屋命は祝詞をあげる神です。伊弉理度売命は神器の鏡を作りますし、玉祖命も神器の勾玉を作る神です。天太玉命は、これまで書いてきているように、その他の神事に必要な祭具全般を作りますし、古語拾遺に拠るならば祝詞はあげないまでも祈禱もする。では天宇受売命の役割は、と。

因みに天孫降臨には五伴緒の他にも思金神や天手力男神なども従っています。…現代的な考え方ならば。いや、もしわたしが高皇産靈尊だったとしたならば、一も二もなく先ずは思金神は随行させるでしょうし、あとは身辺警護の役を担える神は当然、従わせます。もちろん、先行した経津主や武甕槌によって、葦原中国はすでに高天原に恭順しているのですが、それでも…、と。

五伴緒。言ってしまったえば神事を行うのに必要な神を、天孫と一緒に送り込んで葦原中国を高天原

が完全掌握せんとしていたのでしようし、その中の一柱としては、天宇受売命の存在が極めて異質に感じられていました。さらには、天孫降臨に際しての猿田彦との一件が、その異質さをさらに際立たせているような、逆にその違和感を払拭しているような何とも説明のし難い印象をずっと覚えていました。

ですが、古語拾遺を読み進めていくと、身勝手ではありますが

「ああ、そういうことか…」

と感じられる記述に行き当たります。天岩戸の件でも解るとおり、天宇受売命は舞踊する神。天孫降臨での働きはそれとはかなり異なりますが、本来はそうなります。では、舞踊の真髄とは、となります。…あくまでも私見で語らせていただくのなら鎮め、ではないかと。

日本神話で語られる神々の本質は二つ。荒魂と和魂となるわけで、供物を捧げたり歌舞を奉納すること、その荒魂を鎮めて和魂とするのではないかと。はい、天岩戸神話そのものです。そして神様への供物としての巫女、というのはいま日本神話に限らず洋の東西を問わずに見られる共通項。ただ、その一方で天孫降臨の際は、異界のものに対するある主の威圧の役割を果たしているわけで、これ自体もまた天宇受売命自身の荒魂と和魂とも言えるのかもしれないし、別の形で鎮めの役ともなる、…のかもしれない。かなり穿った見方なのは、重々承知していますけれども。

天照大神は、本、帝を同じくしたまへり。故、供へ奉る儀も、君と神と一体なりき。天上より始めて、中臣・斎部の二氏は、相副に日の神を侍り奉る。猿女が祖も、亦、神の怒りを解く。然れば、三氏の職は、相離るべからず。而るに、今、伊勢の宮司は、独り中臣氏を任して、二氏に預からしめず。遣りたる三つなり。

これまでに何度も書いてきますけれど、個人的に天宇受売命は本当に好きな一柱です。ただ、その好きという感情が先行して、彼女が日本神話の中で、どういう役割を負っていたのか。また、神代があくまでも神話とは言えども、彼女は何らかの形で日本という国の歴史に影響を与えたのか。あるいは歴史に影響を受けて生み出された存在、なのかもしれません。いずれにしてもそこには何らかの意図、政としての意思が先にあったことは否定するまでもないでしょう。

ですが、そこにわたしは思い至ってはいなかったわけで、ただただ何故、彼女が五伴緒の一柱に加わっていたのかに漠然と、違和感を抱き続けていたのですがけれどもね。

和魂を請ぎ荒魂を鎮めては謡ひ舞はむやけふもみなひと 遼川るか

(於：安房神社境内)

猿女氏。言うまでもなく天宇受売命と猿田彦を祖とする氏族です。主に神楽舞を司っていたわけですが、広成老が書き記したように、氏族としては忌部(斎部)同様、没落していったのだ、と。しかし、そもそもの系譜が忌部と同じくするものであるのなら。平安期、藤原でなければ人ではない、とまで謳われた時代と、そもそも日本書紀の編纂には藤原鎌足の息子・不比等の思惑が背景にあることなどからして、ようやく繋がる一本の糸が浮かび上がってきますね。

天太玉命を主祭神とする安房神社の境内で、天宇受売命のことばかり考えてしまうのも、また随分な不敬。気を取り直しまして、引き続き天富命を祀る下の宮へ参拝します。

天富命に関する記述は、記紀に一切ありません。また、一つ気になるのが安房忌部の系図です。前述している通り、天富命は娘の飯長姫を、天日鷲の孫・由布津主に娶わっています。そして生まれた訶多々主こそが安房忌部の祖。事実、安房神社や下立松原神社に伝わる安房忌部の家系図には、



安房神社の下の宮。

その後の約八十代近くにもなる系譜が記されている、とのお話を聞いたことがありますし、その系譜は天太玉命とその孫・天富命、さらにその孫の訶多々主などが、間違いなく記載されている、とのこと。わたし自身は、残念ながら家系図を見せて頂いたことはないのですけれどもね。

ただ、天富命が神武の勅命を受けた、とある以上、やはり当時の忌部宗家の当主は天富命となりますし、けれどもここ・安房には娘以下の系譜が残るだけ、と。嫡流たる男子は大和にいたのでしょうか。：いなければ、そもそも古語拾遺を記した広成老は一体、誰の血筋になるのでしょうか。因みにわたしが調べた範囲では、広成老は天富命の一九世孫、となっていました。

それと、古語拾遺を読んでいると安房開拓以降と思われる中央の記述に、天富命の存在が見られまして、
 て。どうしても彼は、中央へ帰参した印象が拭えません。つまり、開拓にある程度の目鼻がついた時点で、由布津主にすべてを託したのではないかと、と。

日臣の命、来目部を師めて、宮門を衛護り、其の開闔を掌る。饒速日の命、内の物部を師めて、矛・盾を造り備ふ。其の物、既に備はりて、天富の命、諸の斎部を率て、天璽の鏡

・ 剣を捧げもて、正殿に安き奉り、并、瓊玉を懸け、其の幣物を陳ねて、殿祭の祝詞〔其の祝詞の文は、別巻に在り〕す。次に、宮門〔其の祝詞も、亦、別巻に在り〕を祭る。然る後に、物部、乃ち矛・盾を立てつ。大伴・来目・仗を建て、門を開きて、四方の国を朝らして、天位の貴きことを觀しむ

斎部広成「古語拾遺」

これは神武即位に関連する記述です。先に引用している忌部の東進は、記述で言いますとこれよりも手前、つまり時代が古い記述です。さらにもう一つ。

又、天富の命をして作り供へまつる諸氏を率て、大幣を造作らしめ訖はりぬ。天種子の命〔天児屋の命が孫〕をして天つ罪・国つ罪の事を解除へしむ。所謂天つ罪は、上に既に説き訖はりぬ。国つ罪は、国中の人民の犯せる罪なり。其の事、具さに中臣の祓の詞に在り。爾して乃ち、靈の時を鳥見山の中に立つ。天富の命、幣を陳ねて、祝詞して、皇天を◆祀り、群望を■秩りて、神・祇の恩しびに答ふ。是を以ちて、中臣・斎の二氏、俱に祠祀の職を掌る。猿女の君氏、神樂の事を供へまつる。自余の諸氏、各も、其の職有り。

斎部広成「古語拾遺」

※◆は示偏に西と土を縦に並べた旁の表記です。

※■は行人偏に扁という旁の表記です。

あるいは、こうやって中央と安房を行き来した天富命の行程が、後の古東海道の下敷きになったのかもしれないね。初代天皇である神武と、実在が危ぶまれている倭建命はともかく、その父である第十二代景行天皇の東征。途中、欠史八代をなかったものとしても、時代は明らかに天富命の

方が手前になりますよし。

そうじゃなければ、海路。難波から太平洋にぬけて一路、安房へ。難波・大和間ももしかしたら大和川に沿った水路、ということだって考えられます。そしてそれならば、徒歩よりもさらに行程は楽だったことでしょう。

思えば、ほんの百余年前までは、江戸・京都間も人は徒歩で行き来していました。幕末の京都と江戸を繋いでいたのは現代のものとそう変わらない東海道となりますが、同時に大阪湾から海路で江戸へ、というルートもかなり発達していたわけで、現代のわたし達からすれば、大変だったのだろう、と感じてしまうことも逆に当時の人々にとってはそれが当たり前。案外、大和と安房はそう遠くはなかったかもしれません、当時の感覚ならば。

…文明によって得たものと、文明によって失われたもの。こういう瞬間、古史古文などに見られる古代の超文明、なんてものも信じる信じないは別として、発想そのものの根拠は解らなくない、と感じます。それくらいポテンシャルは人間に備わっているのだ、と思ってしまう。ですがやはり、こうして古歌紀行をしていると、思ってしまう。わたし達は本当に、進化しているのだうか、と。むしろ退化しているのではないか、と。そして、何故か一抹の寂しさのようなものが胸を過ぎってしまうのも、またいつものことです。

中央に帰参した天富命。その末裔たちがいずれどう時代の流れの中で、表舞台から去っていったのか。いや、表舞台から遠ざけられていったのか、は古語拾遺の後半に詳しいです。中々、広成老の忸怩たる思いが、赤裸々に記されていますが、ともあれ古語拾遺の記述にそって、追いかけてみましょう。

小治田の朝に至りて、太玉が胤、絶えざること、帯の如し。天恩しび、廃れるを興し、

絶えたるを継ぎて、纔かに其の職に仕へまつる。

斎部広成「古語拾遺」

経緯は解りませんが、推古期にはすでに天太玉命の末裔は衰退していて、細々と続いている、といった状態になっていた、とのこと。ですが推古の援助よって何とか家職に奉仕できている、と。

天太玉命の末裔といっても、この場合はおそらく忌部（斎部）氏のことだけを差しているのでしょうが、後世から見れば猿女氏とて同じような憂き目に遭ってゆくことからして、あるいは猿女氏のことも含まれている、と考えてしまうのは流石に穿ちすぎてしまうか。

ただ、神武期から欠史八代を度外視したとしても、推古期までは数百年近い時間が流れていますし、その間に繰り広げられた様々な豪族の盛衰なども考え合わせると、むしろ自然な流れだったのかもしれない。逆に、それでも推古の後ろ盾があったことこそが、神職に携わる一族ならではの、だったのかもしれない。

因みに仏教が日本に伝来したのは、日本書紀に習うならば推古の父親・欽明の時代。そして、仏教を信奉する蘇我氏と天神地祇を奉る物部氏が争ったのが用明天皇の後継争いでのこと。それによって物部氏は没落、蘇我氏は権勢を握りましたし、用命の後継者は蘇我氏が推挙していた崇峻。そしてその後継が推古その人ですから。

恐らくは、同じ五伴緒にして、神職に奉仕してきた天児屋根と天太玉・天宇受売それぞれの末裔のその後が、あれほどまでに明暗を分けたことの一つには、この仏教の存在があるのでしょう。神職に専心した一族と、それもさることながら同胞から、政治家としての手腕を発揮する者が現れた一族の、境界線。

他にも秦氏を始めとする渡来系技術者集団の存在も、きつと浅くはない関係があったと考えられ

ます。…時代が、大きく変わり始めたこの時期。けれどもそれよりもさらに後世の人であった広成老は、ただ簡素に書き記しているだけです。

纔かに其の職に仕へまつる。

と。

斎部広成「古語拾遺」再引用

淨御原の朝に至りて、天下の萬の姓を改めて、分かちて八等と爲す。唯、當年の勞りのみを序て、天降りし績に本づかず。其の二つを朝臣と曰ひ、中臣氏に賜ひて、命に大刀以ちてす。其の三つを宿禰と曰ひ、齋部氏に賜ひて、命に小刀を以ちてす。

斎部広成「古語拾遺」

大化の改新・壬申の乱などを経た天武期、中臣と忌部の間に少しずつ格差が生まれ始めます。古語拾遺にある記述と同じ内容を日本書紀から引きます。

十一月の戊申の朔に、大三輪君・大春日臣・阿倍臣・巨勢臣・膳臣・紀臣・波多臣・物部連・平群臣・雀部臣・中臣連・大宅臣・栗田臣・石川臣・櫻井臣・采女臣・田中臣・小墾田臣・穗積臣・山背臣・鴨君・小野臣・川邊臣・櫛井臣・柿本臣・輕部臣・若櫻部臣・岸田臣・高向臣・完人臣・來目臣・犬上君・上毛野君・角臣・星川臣・多臣・胸方君・車持君・綾君・下道臣・伊賀臣・阿閉臣・林臣・波彌臣・下毛野君・佐味君・道守臣・大野君・坂本臣・池田君・玉手臣・笠臣・凡て五十二氏に姓を賜ひて朝臣と曰ふ。

「日本書紀 卷二九 天武天皇下 天武一三年（六八五年）十一月」

十二月の戊寅の朔、己卯に、大判連・佐伯連・阿曇連・忌部連・尾張連・倉連・中臣酒人連・土師連・掃部連・境部連・櫻井田部連・伊福部連・巫部連・忍壁連・草壁連・三宅連・兒部連・手繼連丹比連・靱丹比連・漆部連・大湯人連・若湯人連・弓削連・神服部連・額田部連・津守連・縣犬養連・稚犬養連・玉祖連・新田部連・倭文連・氷連・凡海連・山部連・矢集連・狹井連・爪工連・阿刀連・茨田連・田目連・小子部連・菟道連・猪使連・海犬養連・間人連・春米連・美濃連・諸會臣・布留連、五十氏に、姓を賜ひて宿禰と曰ふ。

〔日本書紀 卷二九 天武天皇下 天武一三年（六八五年）十二月〕

單純に、中臣と忌部だけでは解りにくいのですが、こうやって朝臣、宿禰それぞれの姓を賜った氏族をずらり、並べるとなるほど。広成老の不滿にも合点がゆきます。つまり、朝臣になっているのは、系譜的に殆どが景行天皇以降の諸天皇の後裔と伝えられる氏族なんですね。もちろん、時代が随分離れていますから、当時でもすでに皇族とは言い難いものも含まれるのでしょうか、そういう氏族のたちの中に混じって、突出した扱いとなっているのが中臣氏と物部氏。

一方、忌部と同じ宿禰を賜った氏族たちは、と言いますと天神・天孫の末裔とされるものが殆ど。：広成老にしてみれば、物部のことは横に置いたとしても、かつては等しく神職を分け合っていた中臣が何故、宿禰ではなく一等上の朝臣なのか。妥当なのは宿禰であって、逆に中臣が朝臣ならば、われら忌部だって、朝臣となってもおかしくはないはずだ、といったところなのでしょう。

余談になりますが、朝臣や宿禰は、天武が制定した姓です。真人を筆頭に、朝臣が二番目で、宿禰が三番目、となりますね。前述している連云々は、この制定以前のものです。

ここに、一つの史観が変化していること、読み取れると思います。かつては天孫や高天原の天神たちの末裔が、この国の中枢であるという考え方だったのに対し、神代もはや遠くなり皇統も第

四十代（弘文天皇）大友皇子もカウントしています）ともなると、皇統により近い氏族こそが、高貴あるいは上位、とされるようになった。

そして、中臣氏は、すでに鎌足を輩出しています。天智と一緒に、大化の改新を成し遂げた政治家の氏族が、そういう扱いを受けたこともまた、現代に生きるわたしたちならば理解できるのでしようが、あくまでも神職であることこそが、氏族の誇りである、としてきた忌部氏、その広成老には、納得するのが難しかったのかもしれない。

これ以降、各地神社の取り扱い、神事に使う道具類の作り手、本来、二氏で司るべき神職を中臣氏が専横しているなど、広成老の筆は中々止まりません。一括で引用します。

天平の年中に至りて、神帳を勘へ造る。中臣、権ひを専らにして、意の任に取りみ捨てます。由有る者は、小さき祀りも、皆列なる。縁无き者は、大きな社も猶廢てらる。敷奏し施行ふこと、当時、独歩なり。諸社の封税、総べて一門に入る。

齋部広成「古語拾遺」

天照大神は、本、帝と殿を同じくしたまへり。故、供へ奉る儀も、君と神と一体なりき。天上より始めて、中臣・齋部の二氏は、相副に日神を捧り奉る。猿女が祖も、亦、神の怒りを解く。然れば、三氏の職は、相離るべからず。而るに、今、伊勢の宮司は、独り中臣氏を任して、二氏に預からしめず。

齋部広成「古語拾遺」

凡べて、神殿・帝殿を造り奉らむことは、皆、神代の職に依るべし。齋部の官は、御木・鹿香の二郷の齋部を率て、伐るには齋斧を以ちてし、堀るに齋鋤を以ちてす。然る後に、

工夫、手を下して、造り畢へて後に齋部、殿祭し、及、門祭し訖はりて、乃ち御座すべし。而るに、伊勢の宮、及、大嘗の由紀・主基の宮を造るときに、皆、齋部に預からしめず。

齋部広成「古語拾遺」

又、殿祭・門祭は、元、太玉の命の供へ奉りし儀にして、齋部氏の職する所なり。然れども、中臣・齋部、共に神祇官に任され、相副に供へ奉る。故、宮内省の奏す詞に称さく、「御殿祭に仕へ奉らむとして、中臣・齋部、御門に候ふ」

とまをす。宝龜の年中に至りて、初めて宮内少輔從五位の下中臣朝臣常、恣に奏す詞を改めて云さく、

「中臣、齋部を率て、御門に候ふ」
とまをす。彼の省、因循ひて永く後の例と爲して、今に改めず。

齋部広成「古語拾遺」

又、神代より肇めて、中臣・齋部の神事に仕へ奉ること、差降有ること無し。中間より以來、権ひ一氏に移る。齋宮の寮の主神司の中臣・齋部は、元、七位の官に同じかりき。而るに、延暦の初るに、朝原の内親王の、齋き奉る日に、殊に齋部を降として、八位の官と爲し、今に復らず。

齋部広成「古語拾遺」

凡べて、幣を諸神に奉ることは、中臣・齋部、共に其の事に預かれり。而るに、今、大宰の主神司は、独り中臣を任して、齋部に預からしめず。

齋部広成「古語拾遺」

諸國の大きな社にも、亦、中臣を任せし、齋部に預からしめず。

齋部広成「古語拾遺」

凡べて、鎮魂の儀は、天鈿女の命の遺跡なり。然れば、御巫の職さ、旧の氏を任すべし。而るに、今、選ぶ所、他氏を論はず。

齋部広成「古語拾遺」

凡べて、大幣を造ることに、亦、神代の職に依りて、齋部の官、供作る諸氏を率て、例に准ひて造り備ふべし。然れば、神祇官の神部は、中臣・齋部・猿女・鏡作・玉作・盾作・神服・倭文・麻績等の氏有るべし。而るに、今、唯、中臣・齋部等の二三氏のみ有り。自余の諸氏は、考選に預からず。神の裔多亡せ散りて、其の葉絶えなむとす。

齋部広成「古語拾遺」

又、勝宝九歳に、左弁官の口宣に、
「今より以後、伊勢の大神の宮の幣帛の使は、専ら中臣を用ゐて、他姓を差はすこと勿れ」といへり。其の事行はれずと雖も、猶、官の例に載する所にして、未だ刊り除かれず。

齋部広成「古語拾遺」

古語拾遺が上奏されたのは平城天皇の時代。京都遷都を実行したのが、その先代の桓武です。すでに大化の改新すらも遠く、不比等・藤原四兄弟も没して。ですが、もうその頃の天皇は何代も、藤原氏の娘を后にしていますし、すなわちそれは藤原氏の子が皇統を継いでいることと同義。…広成老の憤懣やるかたない様は、文面からも、そしてそれ以上に行間からも滲み出ているのですが、

難しいでしょうね。

逆に、平城がよく、この上奏文を認めたものだ、とすら思えてしまいそうです。さらに言うならば、もし…、もし当時の忌部（斎部）が、藤原氏にとってそれなりの脅威となるものである、そもそも古語拾遺は現存していなかったかもしれない。書くのが少々切ないですけど、この古語拾遺の存在こそが、すでに藤原Ⅱ中臣にとって、忌部がそれくらい存在でしかなかったこと、証明してしまっているのだと思います。

逆に、ここでもうしても目を奪われてしまうのは、藤原氏の要職掌握の手腕。前述しているように、それまでの史観が変化しているからこそ、なんですが、そもそも最初に天皇という概念、天皇制という体制を固めたのは天武です。その天武亡き後に皇統を継いだ持統は自らの都に藤原氏の名前を冠したほど。

壬申の乱はあくまでも天智の後継を争ったものであればこそ、大友にすべての罪を被せて天智の正当なる後継者として、新時代を切り拓いた、という立場の天武・持統が、天智と供に大化の改新を為した鎌足を手放すはずも無く、その結果としての平城の世が有る…。持統の時代から約百年の後のことになりますけれども。

そういう意味では、神代に謡われた五伴緒の諸氏が、こんなにも蔑ろにされているのに、なぜ中臣だけが、という広成老の論拠自体が、移りゆく時代の流れに乗り切れなかった者たちの視野を表しているようで、何とも言えない感情が込み上げてきます。

そう、つまり大化の改新とは、まさしく一つの時代の終焉と幕開けでもあり、同時に現代で言うところの革命にも値しているわけで、それをそれとして気づけていない、あるいは認められないゆえのもの。それこそが古語拾遺である、とも言えてしまうでしょう。

ただ、一つ面白いのがその平城の時代に起きたこんな訴訟について、日本後紀が記している一文があります。

庚午。先是中臣忌部兩氏各有相訴。中臣氏云。忌部者。本造幣帛。不申祝詞。然則不可以忌部氏爲幣帛使。忌部氏云。奉幣祈禱。是忌部之職也。然則以忌部氏爲幣帛使。以中臣氏可預祓使。彼此相論。各有所據。

是日勅命。據日本書紀。天照大神閉天磐戸之時。中臣連遠祖天兒屋命。忌部遠祖太玉命。掘天香山之五百箇眞坂樹。而上枝懸八坂瓊之五百箇御統。中枝懸八咫鏡。下枝懸青和幣。白和幣。相與致祈禱者。然則至祈禱事。中臣忌部並可相預。又神祇令云。其祈年月次祭者。中臣宣祝詞。忌部班幣帛。踐祚之日。中臣奏天神壽詞。忌部上神璽鏡。劍。六月十二月晦日大祓者。中臣上御祓麻。東西南部上祓刀。讀祓詞訖。中臣宣祓詞。常祀之外。須向諸社供幣帛者。皆取五位以上卜食者充之。宜常祀之外。奉幣之使。取用兩氏。必當相半。自餘之事。專依令條。

〔日本後紀 卷十四 大同元年（八〇六年）八月十日〕

日本後紀はこう語ります。曰く

「庚午。これより先、中臣と忌部の両氏からの訴訟があり、中臣氏が

『忌部の役割は本来、幣帛を作ること。祝詞を上げることではないので、祝詞を読み上げ、幣帛を捧げる幣帛使になることができない』

と主張したのに対し、忌部氏は

『奉幣と祈禱は忌部の職掌であるので、忌部が幣帛使、中臣氏は祓使となつて祓えに当たるべきだ』と主張。両者それぞれに拠もあることから、本日、次のような勅命が出された。

『日本書紀には天照大神が天岩戸にこもった時、中臣連の遠祖である天児屋命と忌部の遠祖である天太玉命が、天香山の五百箇真坂樹を掘り出し、上の枝に八坂瓊の五百箇御統を架け、中の枝に八咫鏡を架け、下の枝に青和幣と白和幣を架け、共に祈祷した、とある。これにより、祈祷は中臣・忌部両氏が共に与えるべきである。また、神祇令には「年・月次祭では中臣氏が祝詞を宣べ、忌部氏が幣帛を班て。天皇の踐祚大嘗祭の時は、中臣氏が天神の寿詞を奏上し、忌部氏が皇位の象徴である神璽の鏡と劔を上進せよ。六月・一二月の晦日の大祓えでは中臣氏が祓の麻を進め、東西の文部が、祓刀を上進して祓詞を読め。終わったら中臣氏が祓詞を宣べよ。臨時の祭礼では、五位以上で卜いに適った者を選び、諸社に向いて幣帛奉納のことに当たらせよ」とある。これより臨時の祭礼にあつては、奉幣使には中臣・忌部両氏を充て、共に相半ばとなるようにせよ。自余については令条に従い行え』

果たしてこれを、どう見るべきなのでしょうね。神祇令は現代でも確認できる最古のものは養老令になりますが、ここで詔されている内容は、すべて養老令のものと何ら相違がありませんけれども。

神祇令九 季冬条 季冬へ月次祭／鎮火祭／道饗祭／前件諸祭。

供神調度及礼儀。斎日皆依別式。其祈年月次祭者。百官集神祇官。
中臣宣祝詞。忌部班幣帛。

神祇令十三 踐祚条 凡踐祚之日。中臣奏天神之寿詞。忌部上神璽之鏡劔。

神祇令十七 常祀条 凡常祀之外。須向諸社。供幣帛者。皆取五位以上卜食者充。

（唯伊勢神宮。常祀亦同）

神祇令十八 大祓条 凡六月十二月晦日大祓者。中臣上御祓麻。東西文部上祓刀。読祓

詞。訖百官男女。聚集祓所。中臣宣祓詞。卜部為解除。

「養老律令 神祇令 拔粹」

天皇の詔、としては極めて無難、あるいは真つ当なもの、なのでしょね。故事、あるいは律令に則っているのですから。ただ、これはあくまでも訴訟に対する詔であって、その後の実際についてはよく解りません。

ですがそもそも、古語拾遺自体をどう見るのか、という点では一つの指針ともなるのではないかと。…つまり、古語拾遺はいち氏族が、あくまでも自身たちのアピールを行っているものであって、歴史的信憑性はどれほどのものか、ということですね。同様の理由で先代旧事本紀なども、未だに様々な議論の元となっていますけれども。

時代は前後してしまいますが中央の忌部氏、つまり天富命の末裔たちの足跡は、日本書紀にも様々に見られます。その中でも、個人的に注目してしまった記述を幾つか引きます。

壬辰に、將軍吹負、乃樂山の上に屯む。時に荒田尾直赤麻呂、將軍に啓して曰さく、

「古京は是れ本の營の処なり。固く守るべし」

とまうす。將軍従ふ。則ち赤麻呂・忌部首子人を遣して、古京を成らしむ。

「日本書紀 卷二十八 天武天皇上 即位前記（六七三年）七月」

將軍吹負、と言えば「さゝなみのしがゆ」でも随分書きましたけれど、そう。壬申の乱に於ける天武勝利の立役者の一人。つまり、中央忌部は壬申の乱の際、天武側について戦った、ということになります。

ここに登場する忌部子人（別名・子鷹）は次第々々に衰退してゆく忌部氏の中で、本来あるべき神職として、名前が残っている唯一ともいっていい人物・忌部作賀斯の子。

難波の長柄の豊前の朝に至りて、白鳳四年に、小花の下諱部首作賀斯を以ちて、祠官の頭に拝して、王族、宮内の礼儀、婚姻・卜筮のことを掌り叙てしむ。夏・冬二季御卜の式、始めて此の時に起れり。作斯の胤、其の職を継がず、陵遅れ衰微へて今に至る。

斎部広成「古語拾遺」

その子が何故か神職ではなく、武人として活躍したわけですね。さらにもう一つ。こちらの記述はある意味ではもっと注目すべきものとなります。

丙戌に、天皇、大極殿に御して、川嶋皇子・忍壁皇子・広瀬王・竹田王・桑田王・三野王・大錦下上毛野君三千・小錦中忌部連子首・小錦下阿曇連稻敷・難波連大形・大山上中臣連大嶋・大山下平群臣子首に詔して、帝紀及び上古の諸事を記し定めしたまふ。大嶋・子首、親ら筆を執りて以て録す。

「日本書紀 卷二十九 天武天皇下 天武十年（六八二年）三月」

お解りでしょうか。はい、つまり日本書紀の元となった帝紀の編纂にあたり、主たる執筆者として参加していたのが、やはり子人だった、と。今度は武官ではなく、文官もしくは学者としての活躍、とも言えるでしょう。蛇足ではありますが、他にも記紀の出雲神話や、出雲国造神賀詞にも関与していたのではないか、という学説を見たことがあります。…いや、これが事実だとしたら、後世への影響という意味では忌部氏、やはり五伴緒の一根の末裔、とも思ってしまうかもしれません。

ですが、繰り返すことになってしまいますけれど、いかに神官としての作賀斯が優れていたとしても。その子であった子人が武官として、文官あるいは学者として、優れていたのもあっても。政治家ではなかった…。なかったんです。

果たして、子人はその約百年後、自らの子孫が氏族の扱いについて、その忸怩たる思いを上奏すること、ほんの一瞬でも想像できたのでしょうか。因みに、広成老は子人の玄孫に当たります。

また、それからさらにさらに時代を下って千二百年もの後。その広成老の上奏文すらもまた、いち氏族のアピールにすぎない、という見解を負う結果となってしまうことは、…誰一人として想像もしていなかったのでしょうか、そもそもが出来なかったことでしょうか。

何が正しいかはさて置き、少なくともわたしの自身の基本姿勢は

「それを言ってしまったら日本書紀や続日本紀などの正史とされるものだって、そう大差ないもの」です。すでに繰り返し書いていますが、歴史というものは何処から見るか、何を見るか、でまるで万華鏡のように変わってしまうのが宿命だと思っています。何よりもわたしはあくまでも上代文学を文学として捉えたいというアプローチをしているのであって、決して歴史学としてこれら紀行文をものしているわけではありませんよ。

ともあれ、政治と宗教。政教一致の時代に於いて、けれども、確かに時代はその境界に少しずつ、少しずつ、溝を穿ってゆきました。そして迎えた平安期。持統の時代からだとして三百年、広成老が切々と訴えた平城の時代から二百年の後、この天下は自分のものだ、と思う。そう謡いきったのが藤原道長でしたね。

古語拾遺を読む度、わたしが覚える感慨はいつだって一つです。

「神代は、本当に遠くなってしまった。…神代は、もう終わってしまったのだ」と。

けれども、その一方で、中央ではないここ・安房の地で、神代からの習いを継ぎ伝えしてきた一族がいます。幣のための麻と木綿（ゆう）、を求めて拓かれた土地があります。ならば今、こうして安房神社に詣でている身としては、それをそれとして享受すればそれでいい。それだけを胸に、次の訪問地へと向かいます。雨はもう、止んでいました。

遠つ神遠つ祖みな離れなほし稲むしろみな川ゆくごとし

遼川るか

（於：安房神社境内）

（八）

上代文学とはおよそ無関係なのですが、房総半島最南端の野島崎付近には、子どもの頃よりいつかはきつと訪ねたい、と思っていた地名があります。布良。訪ねてみたかった理由は、小学生くらいでしたか、視力がかなり悪いことから、星を眺めるよう、親から勧められました。それ関連の子ども図鑑などを読むうちに、シリウスに次いで全天で二番目に明るいのが、りゅうこつ座のカノープス、という星であることを知りました。

けれどもこの星、南半球ではよく見えるのですが、関東の緯度だと水平線ぎりぎりにしか見えないう、とのこと。恐らく彼の地では昔から、ぎりぎり見えていたのですね。地元でのカノープスの古名は布良星、と。

子ども心に、布良に行けばカノープスが見られる。布良、いつかきつとゆくんだ、と思っていたものでしたが、まさかこの地を訪ねる理由が、カノープスではなく安房忌部氏に成り代わってしま

う、とは今日の今日まで、思っていないませんでしたね、そう言えば。しかも、夜ではなく真昼。それ
もついさっきまでは雨まで降っていた、という星を見るには全く適さない条件です。これには流石
に、自分でも笑ってしまいました。

きっかけは、安房神社へ向かう途中、地図や資料を確認していて、ふと見つけてしまった布良神
社、という文字。当然ですが式内社にはないお社で、けれども布良の二文字は子ども時代からの興
味が拭い去りがたく、急遽

「行ってみよう…」

と思っってしまったんですね。しかも安房神社のごく近くという立地にどうしても、と。厳密に言
えば、行ってみなかったのはあくまでも布良、という土地であって布良神社ではないのですが。い
や、それ以前に、すでに自身は「あの」布良に來ているわけで、それが頭の中でどう飛躍してしま
ったのか、

「布良神社？ 行きたい…」

と。きっかけは星。けれども着地は上代文学。そんな不純なのか、純粹なのかよく解らない衝動
だけが、一気に込み上げてしまっ、とにかく行こう、と。

けれども、よほど小さなお社なのか、ロードマップなどでは拾うこと叶わず。そこで安房神社境
内にあるコミュニティ・センターのような建物に寄り、職員さんに頼りました。

「布良神社の場所を教えてくださいませんか」

「ああ、布良崎神社ですね」

いま思い返すと、お社の名前を間違えていること、指摘していただいたものでしょうが、それ
に気づくだけの知識すらない状態でして。対応してくださった女性職員さんが
「わたしの実家のすぐ近くなんで」



布良崎神社の一の鳥居。

と描いてくださった地図と、加えて口頭での説明も書き取って、安房神社から来た道を少し戻る形でそろそろ、と。細い細い地元の方にとつての生活道路のような道を、案内通りに行ったりきたりしているうち、小ぶりな白い鳥居が。東国鎮護・布良崎神社、という文字を見て、この時初めて布良神社、ではなく布良崎神社であること、理解しました。

何分、こぢんまりしているお社で、参拝自体はすぐに終わってしまいましたが、印象的だったのは拝殿の引き戸が、ほんのわずかに開いていて、そこから垣間見えた鏡が、何だかまるで波の音を聞きたがっているように感じられてしまったこと。それと拝殿から戻る際、石段の上から見えた、布良の海。もちろん、布良星が見えるはずも無く、けれどもこういう自身の好き、という大きなくりの中に偶然入ってしまった二つの

ものが、何故かそれぞれに響きあって、ここに來てしまっている自分がいて。

不思議な気持ちでした。下立松原神社の時とは違う、別の何かに自分が呼ばれた、というより何だかここへ來ることがまるで決まっていたような、不思議な気持ち。海は少し波が高いのでしょうか。夏の午後によくある薄曇りの中、海と空との境界線が曖昧で、けれどもこの海を渡って、この地へ上陸し、祖神を奉り、入植した一族がいる…。

叶うことなら、海からこの地を眺めてみたい、と思っていました。かつての忌部たちが、この安房という地を、どうその目に映したのか。上総でも、隠岐でも、近江でも、わたしは上陸した者たちの視線を、なぞることができていただけに、余計にそう思ってしまったんですけれどね。…残念ながら、この界限でそれを叶えるには、漁船に乗せてもらうくらいしかできそうにありません。とても、残念なんですけれどね。

境内にある由緒書きには、こうあります。

主神は天富命にして後に須左之男尊、金山彦命を合祀す。

祭神天富命、神武天皇の勅命を奉じて、沃土を東方に求むべく四国の忌部を率いてこの房総の地に至り、すなわち此の布良の一角を駒ヶ根と称す。駒ヶ根の東海岸に聳ゆる二峯あり。海岸に近きを男神山、他を女神山と称す。男神山に祖神天太玉命を、御后天比理乃咩命を女神山に祀る。

命は此の本郷の地を出発点として現在の安房神社に祖神天太玉命を祀り、漸次開拓の歩を進められ北上し特に麻穀の播殖を奨励、亦建築並みに漁業の技術をも指導され、衣食住の神として崇敬厚い社なり

由良崎神社由緒書

なるほど、つまり忌部たちの安房上陸の地が、ここであるということなのでしょう。それと男神山と女神山。現在もそう呼ばれている山が、帰宅後に調べたら布良漁港を囲うように存在しているようです。標高はそれぞれ百m以下の、本当に小さな山とのことで、女神山はともかく、男神山は登れるみたいです。

地図で確認すると解るのですが男神山も、女神山も、正確には布良崎神社よりも二、三百mほど南、国道四一〇号を挟むようにしてあります。ただ、現在の海岸線では女神山の方が海に近く、これが果たして、漁港の建設などで海岸線が変化したからなのか、あるいは往時の男神山・女神山と、現在のそれが別のものを差しているのか、までは調べ切れませんでした。

ただ、ここを上陸の地とするならば、やはり倭建の上総上陸とは異なるルートで、忌部たちが東を指したのが、何となく手繰れます。つまり、倭建は陸路を来たからこそ、走水く木更津界隈への上陸となり、忌部たちは海路を来たからこそ、布良に上陸した、ということ。

むしろルートとしては、かなり後年の源頼朝が真鶴から安房へ上陸した際の海路に近いとも言えます。逆を言えばかつてはそれくらい、そちらの海路は一般的だった、と言いますか、潮流などからしても、無理が無かったということなのでしょう。…そもそも阿波から安房へ、と至る海路。恐らくは途中々々で食料などの補給をしていなかったとは、潮と風と人力のみが推進力であった以上、考え難いですから。

もう一つ、気になるのが合祀されているのが素戔嗚と金山彦、という点でしょうか。元々、この地にあった忌部の祖神・天富命を祀ったお社が、のちに安房神社の地へと遷り、布良崎神社は前殿となったのですが、その頃には素戔嗚と金山彦が合祀、と。金山彦は鉾山や鍛冶の神様ですから、まだ解らなくはないんですけどもね。

天孫降臨に付き従い、天つ神の末裔であることを氏族の誇りとしていた忌部と、素戔嗚という組み合わせが何とも。あるいは、もうその頃には素戔嗚信仰が、各地にまで広がっていたのかもしれないし、そうではないならば日本書紀にあるあの記述から、なのかもしれません。

素戔嗚尊の曰はく

「韓郷の嶋には、是金銀有り。若使吾が児の所御す国に、浮宝有らずは、未だ佳らじ」
とのたまひて、乃ち鬚髯を抜きて散つ。即ち杉に成る。又胸の毛を抜き散つ。是、檜に成る。尻の毛は、是椈に成る。眉の毛は是豫樟に成る。已にして其の用あるべはものを定む。

乃ち称して曰はく、

「杉及豫樟、此の両の樹は、以て浮宝とすべし。檜は以瑞宮を為る材にすべし。椈は以て頭見蒼生の奥津棄戸に將ち臥さむ具にすべし。夫の◆ふべき八十木種、皆能く播し生う」
とのたまふ。

「日本書紀 卷一 神代上」

※◆口偏に「敢」という表記です。

はい、つまりは木。木の繁殖とそれら木材よって得られる船や宮、ということですね。個人的には、これが一番しつくりくる、と思っっていますし、そうであるならばここ・布良崎神社に合祀されている神もまた、忌部ならでは。そう言えるのかもしれませんが。

うみつみちその先ゆかば

なほなほし玉鉾の道生れ生れて

ひと生れ木生れ宮の生れ

神なほ生れぬ

いにしへゆ今のまさかも違はざる

もろひと継ぎてしかあるは

生くるてふわざ

生す謡ふ舞ふ奉る天地に

しかあるごとく

しかあることを

あれあるを今のまさかにあるてふを伝へ知らすやうみつみちなほ

遼川るか

(於…布良崎神社境内)

古東海道。そう書いてうみつみち、と読みますが倭建よりもさらに昔。まだ陸路すらも果たして存在していたか定かではない道の、一つの果てしとてあるこの地に。風と波の音だけは、変わることなく今も響きます。

(九)

安房神社と並び、この安房の国に鎮座する社格大のお社。

安房郡二座 並

大

安房坐神社 名神大。月次。新嘗

后神天比理乃咩命神社大。元名洲神

「延喜式 卷九 神祇九」再引用

延喜式神名帳曰く、その名を后神天比理乃咩命神社というお社は、けれども現在、その名を残すものが存在していません。というよりも、延喜式にあるこの名自体にも、かなり疑問があります。

読んで字のごとく、天太玉命の後であった天比理乃咩命を祀ったものであることは、想像に難くありませんし、先の布良崎神社の由緒書きにあったように、安房の地に上陸した忌部たちが男神山と女神山を祀った、という点から考えても、忌部たちの始祖とその后神は、神として祀られるのが当然の流れ。

ですが、その后神の名をそのまま社名にしているのが、かなりの違和感です。そこで注目したいのが、元の名が洲神であった、という添え書きとなりますし、恐らくは延喜式神名帳を編纂するに当たって、正式名のなかったそのお社に、この名をつけて記載したのではないのでしょうか。

同時に気になるもう一点が、安房神社の上の宮に、この天比理乃咩命が配祀されていること。もしかすると、本来の後神天比理乃咩命神社は、もう廃社されてしまい、そこで安房神社に配祀という形をとったのではないか。…そんな推測も出来てしまうのかもしれませんが。

その一方で安房には洲神、という元名の面影を残すお社もまた二社、存在しています。一つが安房国一ノ宮の洲崎神社、もう一つが洲宮神社。もし、元名を根拠とするならば、この二社は、あるいは、莫越山神社や、下立松原神社同様、論社ともなりましようか。…なかなか、ややこしいのですけれどもね。

いずにしても、洲宮と洲崎。それぞれに先ずは行ってみたいと。…そうしないことには、何も考えることなど出来ません。

布良崎神社を後にして、国道四一〇号をやや内陸部へと進みます。直線距離にして、約4kmほどの一帯に、洲宮という地番が存在。ちょうど国道と、近くを流れる小川が交差している地点のごく



洲宮神社拝殿から見る周辺の丘陵地帯。あの中のどこかに魚尾山がある。

近くに、洲宮神社は建っています。道路から少し入った場所に白い鳥居。周囲は、昭和中期の頃の農村地帯にも似た、静かで懐かしい風景が広がっています。

車を降りて、まずは参拝を。ですが、ちよつと意外だったのは、それでもかつての社格大、とされるお社としては、この鄙びた感じはどうなのだろうか、と。見る限りで、境内には社務所やそれに類するものは見当たりませんし、これでは社格小、とされていた下立松原神社や莫越山神社と、大差なく…。

社伝に曰く、神武元年に天富命が近くの魚尾山の頂上に、創建。その後、文永年間に社殿が焼失したため、今の場所に遷された、とのこと。魚尾山の山頂付近からは、確かに勾玉などが出土しているようで、古代祭祀の遺跡とされてもいるようですね。

だからなのか、明治期には一度、こちら洲宮神社が式内社、と定められたこともあるようです。…が、その直後には、それ自体が覆され、今なお議論は絶えていない、とのこと。

どうなんでしょうか。まだもう一方の洲崎神社を訪ねていませんので、わたしの自身の考えをまとめるタイミングではないのですが、それでもやはり覚えてしまう違和感は、洲宮の洲、です。

得てしてこういう沿岸部は、土地の隆起も起こりやすいので、現代に比べて上古はきつと、もつと内

まで海岸線は入り込んでいたはず。けれども、そうだとすると遠すぎるのではないかと。

布良崎神社や安房神社が、当時とそう変わらない場所に今なお建っている、という前提に立つならば、洲に祀られた神、すなわち元名の洲神は、なかなか無理があるような気がしてなりません。もともと、お社の前を流れる小川、その名も洲宮川というのですが、仮にこの洲宮川が往時はそれなりの洲をつくるほどの河川だったというのなら、解らなくもないですけど、それもちよつと想像しがたく。

：いや、その洲宮川の両岸に丘陵がずっと続いているんです。まるで、その丘陵の中でもっとも低い部分に流れているのが洲宮川だ、といってしまう風情です。しかもそれらの丘陵がある以上、海岸線もまたここまでは入り込んでいなかったこと、立証してしまっているのではないかと。

けれども、魚尾山に最初は祀られて、という社伝自体は一も二もなく信じたいところ。やはり古代信仰の基本は、山岳にあったはずですから。出土品があるのも納得できます。

残念ながら、その魚尾山。地図上でもわたしは確認し切れなかったのですが、様々な記述曰く、洲宮神社の向かい、とのこと。きっと、男神山や女神山と同様の、本当にささやかな丘のようなものなのでしょう。もしかしたら、視界には入っていたのかもしれない。ただ、わたしがそれ、と認識できなかっただけで。

もう一度、境内をゆっくり歩いてみます。鳥居を潜り、短い参道を進んで、駅の階段ほどもない石段を登り、そして拝殿へ。拝殿奥の本殿と、その先には丘陵。：いやいや、決して風情のないお社だ、とは思っていません。もちろん、古社らしい佇まいはちゃんとあります。ですが、どうしてもイメージが結びつかないのです。

后神天比理乃咩命神社なるお社が正史に登場する最初は、続日本後紀になります。

冬十月辛酉朔壬戌。奉授安房国従五位下安房大神正五位下。无位第一后神天比理刀咩命神。

「続日本後紀 卷十二 承和九年（八四二年）十月」

それから延喜式が編纂された醍醐期までは約百年弱。その間にも他の正史・日本文徳天皇実録や、日本三代実録にも登場しています。当然、それなりのお社がきちんと、現在の社殿はともかくとしても、魚尾山には建っていた、ということなのでしょうけれども。∴、肝心の魚尾山すらも確かめられていない状態では、もはやどうにも。

ともあれ、もう一つの論社・洲崎神社へと急ぎましょう。

ここにあらずにありしかを弥立てて来したるもののいかにしてかも

遼川るか

（於∴洲宮神社境内）

余談になりますが、この洲宮神社に伝えられている洲宮神社縁起。こちらの中々、興味深いと言いますか、叶うことならば見てみたい、と思つてしまします。忌部氏の安房開拓と、安房神社や洲宮神社、下立松原神社の創建の経緯といった古伝をまとめたものらしく、本文の三分の一は失われた安房国風土記ではないか、と推測されている、とのこと。

古語拾遺からの引用もあるので、縁起そのものの成立は早くても、平安末期以降となりますか。∴確かに、安房国風土記を引用した、と考えるには十分な時系列ではあると思います。本当に、見てみたいものです。実際に見ることが叶わないならば、せめて全文を。そう願わずにはいられません。



洲崎神社の二の鳥居から、御手洗山中腹の拝殿を臨む。

一時は雨も降ったのですが、雲間から日が射す瞬間が、少しずつ増えてきています。そして、悟るのはすでにすっかり日は傾いている、ということ、何とか日があるうちに、浮島へ。そんな思いが募ってしまい、つついアクセルを踏み込む足にも力が入ります。

館山市洲崎。ずっと外房側を海岸線に沿って、西へと走ってきた房総フラワーラインが、大きく右に。いえ、正確には蛇行する形で、再び東へと伸びる突端にあるのが、洲崎灯台。その向かいはず、外房ではなく、館山湾です。そして、洲崎灯台よりも少し外房側に鎮座しているのが安房国一ノ宮、とされている洲崎神社。もう一つの元名洲神、と目されているお社です。

境内二の鳥居の傍の駐車場で車を降り、流石に今回だけは、参拝へもってゆく荷物をもう一度確認しました。今回の古歌紀行では、きつと出番はないだろう、と思っていたんですけれどね。このお社の立地を見た瞬間に必要な、と悟ってしまいました。喘息の吸入薬です。それくらい、段数のある石段を登らないことには、参拝できそうない境内には、氏子さんたちでしょうか。結構な人数の奥様方と子どもたちが、わいわいと集っています。

聳える石段の手前には楼門。その楼門には、日

丸が掲げられていて、そういえば今日、世間では祝日だったのだ、と思いました。
先ずは由緒書きを確認します。

祭神 天比理乃咩命

当社は延喜式神名帳に「后神天比理乃咩命神社大 元名洲神」と記され、天太玉命の後神を祀る式内大社で、元の名を洲神と称した。

由緒

当社は宝暦三年（一七五三）の「洲崎大明神由緒旧記」によると、神武天皇の御宇、天富命が御祖母神天比理乃咩命の奉持された御神鏡を神霊として、洲辺の美多良洲山に祀られたことに始まる。

鎌倉時代の治承四年（一一八〇）安房に逃がれた源頼朝が、戦勝と源氏再興を祈念して神田を寄進、後、妻政子の安産を祈願している。室町時代には江戸城を築いた太田道灌が、江戸の鎮守として明神の分霊を勧請したと伝えている。房総里見氏も当社を尊崇して、七代義弘が神領五石を寄進し、江戸幕府もこれに倣って朱印状を下した。

幕末の文化九年（一八一二）房総沿岸警備を巡視した老中松平定信は「安房国一宮 洲崎大明神」の扁額を奉納している。

神位は平安時代に正一位、鎌倉時代に元寇戦勝祈願の功により勲二等に叙せられ、明治六年（一八七三）県社に列せられた。往時、別当寺は養老寺など五ヶ寺を数えた。洲崎明神は古来伝承されている数々のあらたかな靈験から、安産・航海安全・豊漁・五穀豊穰や厄除開運の守護神として信仰が厚く、現在に及んでいる。

洲崎神社境内の石碑より抜粋

：どうなんでしょうか。由緒書を見るだけならば、率直に洲宮神社のそれの方を採りたい気持ちになってしまいそうですが。けれども、立地という点で見れば、元名洲神により相応しいのは、比べるまでもなくこちら、洲崎神社だと感じます。何せこのお社、一の鳥居は海の目の前。洲崎、という単語自体、洲が岬のように海中に突き出した所、という意味をそのまま体现しているようなものですから。

百段はゆうに超す石段のそのまた奥には御手洗山。ちょうど山の中腹に拝殿と本殿が建てられているのも、海沿いのお社としては、古社たる風情に満ちています。

大きく息を吸ってから楼門を潜ります。喘息もさることながら、そもそもの体力からしてこの石段、途中で休むことなく登れるでしょうか。：きっと無理でしょう。全く鍛えてなどいませんので。急ぐことなく、休むことなく、一定のリズムで淡々と登ります。頭の中では一段々々のカウント。五十段を越えたあたりから、少し息が乱れ始めました。それでも

「あと十段、あと十段」

と励まし続けて結局、八十段くらいで休憩と吸入。そして振り返った視界に広がる景色に、圧倒されました。石段と、楼門と、参道両脇の御手洗山の木々、そしてその先には海と空と。

根拠なんてありません。ただ、わたしがそう思ってしまっただけです。少なくとも、延喜式に社格大、元名洲神、と記された式内社は、この洲崎神社ではないのか、と。それくらいの威厳を湛える光景に、ここではないのか、と。

けれども同時に、こうも思いました。四国から、畿内から、黒潮に乗ってやってきた忌部たちが、始祖の一柱である后神天比理乃咩命を祀ったのは、ここではないのではないだろうか。洲宮神社がかつてあったという、魚尾山だったのではないか、と。



洲崎神社拝殿より。

繰り返しますが、根拠など全くないのです。ただ、各地で様々なお社を周ってきたことから、なんとなく感じられるようになったその土地が放っている匂いや、温度、そして色たち。どれくらいの人為によるものか、その地の土の匂い、そして往時にもっとも近い存在として未だ生きている木々の佇まい。そういったものたちから、そう思ってしまった、というだけ。たった、それだけです。

つまり、この洲崎神社にはそれ、

とはつきり感じられるだけの威厳があって、けれどもその威厳こそが人為によるもの。古代のひもろぎなどは、明らかに一線を画すものでもあるからなんですが。

石段を登りきり、もう一度吸入。参拝のため臨んだ拝殿には、由緒書きにあった通り、松平定信の筆による扁額が掲げられています。今でこそ、安房国一ノ宮といえば安房神社の名前も度々、取り沙汰されますが、少なくとも江戸中期までは、安房国一ノ宮と言えば、間違いないここだけを差していたのでしょうか。

そして、参拝。閉じた目の奥には、洲宮神社の鄙びた境内と、その向かいに続く丘陵地帯。ここ

の石段途中で振り返り見た、外海と内海が交差する洲崎の海。そのまた先に横たわっているものは黒潮。

何を、どう、謡えばよいのか。そんなことを強烈に、厳格に問うてくる場所に、時々遭遇します。謡うよりも早く、様々なイメージが自分の中の流れ込んできて、息苦しくて圧倒されてしまう場所、です。

ですが、そういう場所ではいつも、わたしがすることは一つだけ。ポケットに入れているボイスレコーダーのスイッチを押すだけです。あとはもう、自然と溢れてくる言葉たちが溢れたいように任せます。自分はただの依代でしかなく、言葉を紡ぎ、謡っているのは多分、わたしではなく言葉たちであり、歌という韻律であり、そして、その土地。

ほりたるはうがらつ誉れ

ほりたるは遠つ祖より神祖より

かみろきかみろみ継ぎ来る

伝へられたるかみづかさ

神祀るわざ独神

天之御中主神

高御産日神

次に神産巢日神

しが子にて布刀玉命

畏みて

天の香具山

眞男鹿の肩うつ抜きて抜きて亦

天の香具山

朱櫻とり占合ひまかなはしめて亦

天の香具山

眞堅木を五百箇眞堅木

こじこじて根こじにこじて

いで枝にそ

八坂瓊の勾玉

御統の五百箇勾玉

八尺鏡

白和幣・青和幣とり垂でて亦

取り持ちし地高天の原ゆ天降りて祀り来し

ひむがしに亦

ひむがしに行き来せば

五百重の波にうみつみち

漕ぎたみ漕ぎたみ

ふるさとが名こそ告らめや安房国

あづまひむがし

安房てふ地を

しながとり安房洲神はこにそ祀れる

遼川るか

（於：洲崎神社境内）

洲崎神社そのもの創建は、洲宮神社の社家を長く勤めていたという、小野氏が伝える斎部宿禰本系帳なる家系図によると、養老元年（七一七年）の春。勝ヶ崎の洲宮という地に神戸を定めたこと。さらには養老四年（七二〇年）に、その勝ヶ崎洲宮へ天比理乃咩命を祀った仮宮を設け、洲崎神社と名づけたこと、などが書かれている、といえます。

ですが、ごめんなさい。わたし自身はその斎部宿禰本系帳の本文を自身で確認出来ていませんので、そういう記述があるらしい、という旨のみ書き添えておくに留めさせていただきます。

式内大社・后神天比理乃咩命神社。果たして、それが洲崎神社だったのか、あるいは洲宮神社だったのか。今でも諸説様々にあるようですが、わたし自身が感じたものとは別に、

「ああ、こうであつたらいいな」

と思つてしまったのが、こちら洲崎神社が拝殿で、洲宮神社が奥宮である、というもの。徳川家康の時代にもなされた金丸家累代鑑という史料に残る、といえます。

けれども、江戸中期にはここが安房国一ノ宮にまでなっていることなどを考え合わせると、それとて何処まで信じていいのかは定かではありません。それぞれへの評価は時代の中で様々に移ろうもの。

現代ではすっかり鄙びしてしまっている洲宮神社と、その一方でこうも人為の匂いを放つ洲崎神社が、元正期である養老年間とでは一体、どれほどに変わってしまったのか、などもはやわたしには手繰れそうありませんので。

それでも、どちらが正で、どちらが誤で、という線引きはやはりしたくはありませんし、事実出来ないからこそ、の論社でもあります。解らないものは、ただ解らないままに。けれども、確かに自身が感じてしまったものは、ただ感じてしまったものとして。

そう接してゆければそれでいい。そう思うだけで、何故か不思議なほどすっきりと、納得できてしまった胸のまま、まだ百五十段近い石段を降ります。

(十一)

雲が多くて、早くも日が暮れかけているのか、それとも翳っているだけなのかは、判断できません。できませんが、それでももうあまり時間はない、ということだけは確かなわけで、とにかく急ぎます。目指すべき浮島は、すでに館山市ではなく、その北側にある鋸南町。洲崎からの移動距離も二十km近くなりそうです。

浮島。鋸南町勝山の沖約1kmに浮かぶ小さな島なのですが、私有地のため、基本的には上陸できない、とのこと。なので、とにかくできる限り浮島に近づける対岸の場所。恐らくは勝山漁港界限になるのではないかと考えているのですけれど、果たしてこちらの目的に適うポイントを探し出せるでしょうか。……ちよつと自信がないんですけれどね。

房総フラワーラインから国道一二七号へと進み、ただただ北上します。日没までの時間を、窓の外をちらちら確かめてから推測して、目的地周辺までの距離を思い、少なからずギリギリと。……上陸できない以上、少しでもしっかりと眺めたいですし、画像だって押さえたいです。けれども完全に日没してしまったら、もうそれらは叶いませんよし。

時折、視界がひらけては見える海は、もうすっかり内房のそれです。何故なんでしょうね。わたしには古歌紀行を始めるよりもずっとずっと前から、外房の海と内房の海は、かすかに違う色をし

ているように見えます。外房の海は色が少しだけ淡く、逆に内房の海は濃く感じる、と言いますか。それと、匂い。潮の香りもやはり、違うんですね。内房のそれは、もう自身が住んでいる神奈川の海と変わらずに、重たいですし、逆に外房の海の香りは、軽い。あるいは浅い、と言うべきなのかもしれません。

前述している通り、浮島界限を訪ねる目的は浮島の行宮にあるわけなのですが、そもそもの浮島の行宮。これについて語るには、先ずは倭建の東征からご説明しなければなりません。ご存知の通り、第十二代景行天皇の皇子・倭建こと、小碓王が東国各地を平定。けれども大和へと帰参する途上で、帰らぬ人となったわけですが、それを受けて父・景行が言ったんですね。

「わたしの愛しい息子を思い偲ぶことは、いつになったら止まるのだろうか。彼が平定した国々を巡幸したい」と。

五十三年の秋八月の丁卯の朔に、天皇、群卿に詔して曰く

「朕愛みし子を顧ぶこと、何の日にか止まむ。冀はくは、小碓王の平けし国を巡狩むと欲ふ」とのたまふ。

是の月に、乗輿、伊勢に幸して、転りて東海に入りたまふ。

冬十月に、上総国に至りて、海路より淡水門を渡りたまふ。

「日本書紀 卷七 景行天皇五十三年（一二三年）八〜十月」

日本の書記のこの記述に準拠するならば、八月に大和を發ち、伊勢を経由。古東海道を輿に揺られてやってきて十月、上総に到着。…余談ですが、恐らくは走水の海を渡るルートだったのでしょ。そして、そこからまた海路で淡路安房の水門へと渡った、ということですね。なので、木更津

界限から、海路を南下して安房へゆく途上の行宮の地が浮島、という解釈が成立するわけです。そもそも、日本書紀と古事記では、倭建の東征ルートが結構、異なっています。特に走水の海を越えてからの行程は

古事記：く走水く上総（木更津界限）から陸路を北上。下総を経由して常陸着。

帰路は陸路で常陸く武蔵く相模く足柄峠く甲斐く（以下略）

日本書紀：く馳水く上総（木更津界限）から海路を南下。房総半島を迂回して常陸く

陸奥着。帰路は陸路で陸奥く常陸く武蔵く上野く碓氷峠く信濃く（以下略）

陸路で常陸入りしたのか、海路で常陸入りしたのか、最大の相違点。その後の最終目的地が常陸までだったのか、遠く陸奥まで進んだのかは、話題が逸れるのでここでは擱きますが、前記引用の景行の巡幸は日本書紀のものですから、とりあえず整合はしていることになります。…古事記の景行期、率直に言って景行のことなんて殆ど記載されていませんので、はい。

ともあれ、前述のルートから見ても、少なくとも景行が安房界限を通過したことは、疑わなくてもよい、と考えられるでしょう。…が、日本書紀には肝心の浮島宮、という記述が存在しません。

是の時に、覚賀鳥の声聞ゆ。其の鳥の形を見さむと欲して、尋ねて海の中に出でます。

仍りて白蛤を得たまふ。是に、膳臣の遠祖、名は磐鹿六鴈、蒲を以て手綱にして、白蛤を膾に為りて進る。故、六鴈臣の功を美めて、膳大伴部を賜ふ。

十二月に、東国より還りて、伊勢に居します。

「日本書紀 卷七 景行天皇五十三年（一二三年）十く十二月」

これは「淡水門を渡りたまふ」に続く日本書紀の記述です。つまり、淡水門でのあれこれの記述の後は、もう伊勢に戻った、という内容ですから、行程から鑑みるに浮島宮なるものが、安房にあったのか、それとも常陸、はたまた陸奥か、なども理屈としては成立してしまうわけでして。一方、浮島宮と少なくとも字面にきちんと記している文献は、二つ。高橋氏文と常陸国風土記です。それぞれを引きます。

掛けまくも畏き卷向日代宮に御宇ひし大足彦忍代別天皇五十三年癸亥八月に、群の卿たちに詔りたまひて曰りたまひしく、

「朕、愛しき子を顧ふこと、何の日にか止む。小碓王「又の名は倭武王そ」の所平し国を巡狩む」

とのりたまひき。是の月に、伊勢に行幸したまひ、転りて東国に入りたまひき。冬十月、上総国の安房の浮島宮に到りたまひき。

『本朝月令』所引 高橋氏文逸文

郡の北十里に碓井あり。古老の曰へらく、大足日子の天皇、浮嶋の帳宮に幸ししに、水の供御無かりき。即ち、卜者をして占訪はしめて、所々穿らしめき。今も雄栗の村存れり。

「常陸国風土記 信太郡」

はい、高橋氏文が安房の浮島宮、と明記しているのに対し、常陸国風土記もまた、浮嶋の帳宮、と明記。場所は当時の常陸国信太郡。現在の茨城県稲敷市浮島、つまり霞ヶ浦の中にある島なのか、あるいはその沿岸部なのか、といったところでしょうか。言うまでもなく、いずれも景行巡幸の際の行宮のこと。

さてさて、悩ましいことこのうえないですね。一見して、どちらにも破綻は見受けられませんから、安房か、常陸か。…ですが、この答えは常陸の浮島を訪ねた時にきつと、出るのだと思っています。それよりも今は、この安房の浮島へ。日が完全に沈みきってしまう前に、少しでも早く。

夕されば何しかさはくたれに鳥こもりてのこるけふそをしかる

遼川るか

(於：国道一二七号途上)

鋸南町に入り、下佐久間の丁時路を越えた辺りから、自然と意識は自分の左側に集中します。少しでも海の近くへ、車で入れるぎりぎりの所まで。それに適いそうな路地を探して、車のスピードも、そうは思わずとも次第にゆつくりと。勝山の信号や県道二四八号も過ぎ、あとはもう本当に地元の方の生活道路や私道を何度も曲がり、ようやく見えた堤防と、日没直後のまだまだ明るさの残る空と。…間に合いました。間に合えました。あとはこの限られた時間の中で、どれだけ。どれだけ、浮島に肉迫できるのか…。

慌てて車を降ります。ここからはもう自分の足で、一番浮島が、それと映るポイントを探すしかありません。堤防まで走ります。勢い込んで登ると目の前には、思っていた以上に近く感じる島影。…浮島です。

漁港を囲うように設えられた、向こう側の堤防と、係留されている漁船たちが、浮島の下半分を隠しているのがもどかしく、ならば、とさらに堤防の上を走ります。

「漁港の端までゆけば、向こう側の堤防はきつとなくなる。そうすればきつと、もつとちゃんと浮島が…」

早くも息が上がり始めます。背中ではリュックが右へ、左へと躍っています。帽子がずれて脱げて

これは帰宅後に気づいたのですが、その浮島神社の大祭。ほんの数日前だったはず。そう言え。惜しいことをしてしまいました。



勝山漁港より眺める浮島。左側の岩礁は大ボッケと小ボッケ。

しまいそうで、思わず脱いで、左で握り締めました。

そして途切れた堤防の傍、すぐ側に並ぶテトラポットと、打ち寄せる波たちの先によろやと全身を現してくれた浮島。左側に連なるのは大ボッケ、小ボッケと呼ばれる岩礁。大ボッケには、浸食で穿たれた空洞があつて、そこから垣間見えるのは、小さく切り取られた海と空。

千葉県安房郡鋸南町浮島。個人所有の完全なる私有地につき、基本的に上陸は不可。島の頂上部には、浮島神社というお社があり、祭神は景行、倭建、弟橘姫、磐鹿六雁、とまでは聞き及んでいます。ですが何分、上陸できるのは年に一回、浮島神社の大祭の時だけ、とのことで詳細なデータは確認できていません。神社本庁編纂のデータベースにすら、ないくらいですから。

まだ息も切れたまま、それでもまるで吸い寄せられて、目が逸らせなくらいの引力で惹きつけられてしまっていました。慌てていたので喘息の吸入薬もなくて呼吸はとても苦しく、なのはどうしても。どうしても、視線が外せない……。魅入られた、というのはきつとこういう状態のことを言うのだ、と思います。

泣いたら、余計に息が苦しくなるのは解っています。それでも、これを泣かずにいろ、という方があまりにも無体です。

高橋氏文が伝える、安房の浮島宮を舞台とした故事を意識してみます。

時に、磐鹿六◆命、從駕に仕へ奉りき。天皇、葛鰯の野に行幸したまひ、御◆したまひき。太后八坂媛は借宮に御坐し、磐鹿六◆命も亦留守り侍ひき。此の時、太后、磐鹿六◆命に詔りたまひしく、

「此の浦に異しき鳥の音聞ゆ。其れ駕久我久と鳴けり。其の形を見むと欲ふ」

とのりたまふ。即ち、磐鹿六◆命、船に乗りて鳥の許に到れば、鳥驚きて他し浦に飛びき。猶追ひ行けども遂にえ捕ふること得ず。是に、磐鹿六◆命、詛ひて曰ひしく、

「汝鳥、其の音を恋ひ兒を見むと欲ふに、他し浦に飛び遷りて其の形を見さず。今より後、陸に登るを得ざれ。若し大地の下に居ば、必ず死なむ。海中を住処とせよ」

といひき。

『本朝月令』所引 高橋氏文逸文

※◆は獣偏に葛という旁の表記です。

「このとき、磐鹿六雁命も天皇の一行に従っていた。天皇は葛飾野へ行幸して、狩りをされた。一方その時、太后の八坂媛は仮宮にいて、磐鹿六雁命も留まって太后にお仕えしていた。

太后が磐鹿六雁命に仰せられた。

『この浦で、ガクガクという靈妙な鳥の声が聞こえました。その姿が見たいのです』

そこで、磐鹿六雁命が船に乗って鳥のところへ行くと、鳥は驚き、他の浦へ飛び去ってしまった。なおも追いかけて行つたが、捕らえることはできず、そこで磐鹿六雁命は呪いをかけて言った。

『鳥よ、そなたの声を慕って姿を見たいと思ったのに、他の浦に飛び移って姿を見せませんでしたね。なので、今から以後、陸に上がってはなりません。もし陸に降りることがあるならば、必ず死にます。海中を住处としなさい』

還る時、舳を顧れば魚多に追ひ来たり。即ち磐鹿六◆命、角弭の弓を以ちて遊べる魚の中

に当つれば、即ち弭に著きて出でて忽ちに数隻を獲つ。仍りて号けて頑魚と曰ひき。此、

今の諺に堅魚と曰ふ「今角を以ちて釣の柄に作りて堅魚を釣るは此の由なり」。船過るに、

潮涸れて、渚の上に居ぬ。掘り出さむとするに、八尺の白蛤一具を得たり。磐鹿六◆命、

件の二種の物を捧げて、太后に献りき。即ち太后誉め給ひ悦び給ひて詔りたまひしく、

「甚味く清く造りて御食に供へよ」

とのりたまひき。

『本朝月令』所引 高橋氏文逸文

※◆は獣偏に葛という旁の表記です。

「帰る時、船の艫を振り返ると魚がたくさん追いかけてきていた。磐鹿六雁命が角弭の弓を、泳ぐ魚たちの中に入れると魚が弭にかかり、たちまちたくさんの魚を獲ることができた。そこで、その魚を名づけて「頑魚」と呼んだ。これを今の言葉で鰐という「今、角を釣り針の柄にして鰐を釣るのは、これに由来する」。船は潮が引いてしまつて渚の上に乗り上げ動けなくなった。船を掘り出

そうしていると、大きな白い蛤が一つ出てきた。磐鹿六雁命は、鰹と蛤の二種類の品物を捧げて、太后へと献上した。すると太后は、そのことをとても誉め、喜んで仰せられた。

『それを美味しく、美しく料理して、天皇のお食事に差し上げてください』

時に、磐鹿六◆命の申さく、

「六◆、料理らせて仕奉らむ」

と白して、遣はして、無邪志の国造の上祖大多毛比、知々夫の国造の上祖天上腹、天下腹らの人等を喚び、膾を為り、及た煮焼して雑に造り盛りて、河曲山の梔の葉を見て高次八枚さし作り、真木の葉を見て、枚次八枚さし作りて、日影を取りて鬘とし、蒲の葉を以ちて美頭良を巻き、麻佐気の葛を採りて、多須岐にかけ帯とし、足纏を結びて、供御の雑物を結び飾りて、乗輿、御◆より還御りたまひ、入り坐す時に供奉りき。

『本朝月令』所引 高橋氏文逸文

※◆は獣偏に葛という旁の表記です。

「磐鹿六雁命は

『六雁が料理をさせて頂きましょう』

と言ひ、武蔵国造の上祖・大多毛比、秩父国造の上祖・天上腹、天下腹の一族を呼び寄せて、膾をつくり、煮炊きして様々に料理し盛りつけ、河曲山の梔の葉を選び採って来て高次八枚、真木の葉を選び採って来て平次八枚を作った。ヒカゲノカズラを採って鬘にし、蒲の葉で角髪を巻き、まさけの葛を採って纏にかけて帯として、足結を結んで天皇に供する様々な物を美しく整えて、天皇が狩りからお戻りになり、宮へお入りになった時に献上しようとした」

この時、勅りたまひしく、

「誰が造りて進る物そ」

と問ひ給ひき。時に、太后奏ししく、

「こは磐鹿六◆命が献れる物なり」

とまをしき。即ち歛び給ひ誉め賜ひて勅りたまひしく、

「此は磐鹿六◆命独りが心にはあらず。斯は天に坐す神の行ひ賜へるものなり。大倭国は、行ふ事を以ちて名に負する国なり。磐鹿六◆命は、朕が王子等に、あれ子孫の八十連属に、遠く長く天皇が天つ御食を斎ひ忌はり取り持ちて仕へ奉れ」

と負せ賜ひて、則ち、若湯坐連等が始祖、物部意富売布連の佩ける大刀を脱き置かせて、副へ賜ひき。

『本朝月令』所引 高橋氏文逸文

※◆は獣偏に葛という旁の表記です。

「この時、天皇が仰せになるに

『これは誰が料理し進上したものか』

とお尋ねになった。そこで太后が

『これは磐鹿六雁命が献上したものです』

と答えた。天皇は喜び褒めて、仰せになられた。

『これは磐鹿六雁命一人の力で行ったことではない。天にいらつしやる神が行われたものだ。大和の国は、行う仕事によって名をつける国である。磐鹿六雁命は、我が皇子たちに、そしてまた生まれ継ぐ我が子々孫々にまで、永遠に長く天皇の食事に関わる職掌に清め慎んで従事し、仕え申しあげよ』

と膳の氏の名を負わせになって、若湯坐連らの始祖の物部意富売布連が帯びていた大刀を解かせ、

添え与えた」

又、

「此の行なふ事は、大伴立ち双びて仕へ奉るべき物と在れ」

と勅りたまひて、日豎日横、陰面背面の諸の国人を割ち移して大伴部と号けて、磐鹿六

◆命に賜ひき。又、諸の氏人、東方の諸の国造十七氏の枕子各一人づつ進らしめて平次

比例給ひて、依さし賜ひき。山野海河は多爾久久の佐和多流きはみ、加幣良の加用布きは

み、波多の広物、波多の狭物、毛の荒物、毛の和物、供御の雑物等を兼ね摂めて取り持ち

て仕へ奉れと依さし賜ひき。

『本朝月令』所引 高橋氏文逸文

※◆は獣偏に葛という旁の表記です。

「また、

『この仕事は、多くの伴が立ち並んで奉仕するものとせよ』

と仰せになり、東西南北の諸国から人を割き、移して大伴部と名づけ磐鹿六雁命へ与た。また、

諸氏の氏人や東方諸国の国造十七氏の童子を、それぞれ一人づつ献上させて平坏と領布をお与えになり、彼らの統括を委ねた。

『山野海河は蟾蜍の渡る果てまで、船の通う果てまで、海の大小の魚、山の様々な獣など、供える全てのものを統括し取り仕切って奉仕せよ』

と任じた」

かく依さし賜ふ事は、朕が独りの心に非ず。是は天に坐す神の命ぞ。朕が王子磐鹿六◆命、

諸友緒人等を催し率て慎しまり勤しく仕へ奉れと仰せ賜ひ誓ひ賜ひて依さし賜ひき。この時、上総国の安房の大神を御食つ神と坐せ奉りて、若湯坐連等が始祖、意富売布連の子、豊日連を、火鑽らせて、これを忌火として斎ひゆまへて、御食供へまつり、また大八洲に像りて八をとこ八をとめ定めて、神斎・大嘗等仕へ奉り始めき「但し安房大神を御食つ神と為すと云へるは、今大膳職に祭る神なり。今忌火鑽らしむる大伴造は物部の豊日連の後なり」。

『本朝月令』所引 高橋氏文逸文

※◆は獣偏に葛という旁の表記です。

『『このように委ね、任じることは私一人だけの意思ではない。これは、天にいらつしやる神のご命令であるぞ。我が王子・磐鹿六雁命よ、諸々の伴たちを督励し統率して慎み勤めて奉仕せよ』

と仰せられ、祈誓されて委ね任じられた。この時、上総国の安房大神を御食つ神としてお祀りし、若湯坐連らの始祖・意富売布連の子の豊日連に火を鑽らせて、これを神聖な火として、斎い清めて御食に奉仕。また大八島を象徴するものとして、八男八女を定めて、神嘗や大嘗などのご奉仕を始めた「安房大神を御食つ神とするとしたのは、いま大膳職で祀っている神である。いま斎火を鑽っている大伴造は、物部豊日連の後裔である」

御食。みけ、と読みますが、まさしく神様や天皇に献上する食料のことを差す言葉です。ここに引かせていただいた高橋氏文が記しているのは、その調理・調達に携わる職務である膳部の誕生と、それを司る者として磐鹿六雁が任じられた経緯そのもの。そしてそのドラマを生んだのが、山海の珍味豊かな安房国浮島の地、と。

御食には、御食向かふ、という枕詞も存在し、膳の上で食物が向かい合っている様から生まれた言葉、とされています。掛かる言葉は膳の上に並ぶ、栗（あは）、味鴨（あぢ）、蜷（みな）、酒（き）、

などの御食になるものと同音の淡路や味原、南淵山、城上などの地名。…なるほど何故、日本書紀の記述で安房が淡とされたのか、もこう考えると辻褄が合っていますね。

御食向かふ、が詠み込まれた万葉歌をご紹介します。

御食向ふ 淡路の島に

直向ふ 敏馬の浦の

沖辺には 深海松採り

浦廻には なのりそ刈る

深海松の 見まく欲しけど

なのりその おのが名惜しみ

間使も 遣らずて我れは

生けりともなし

山部赤人 「万葉集 卷六―九四六」

飛ぶ鳥の 明日香の川の

上つ瀬に 石橋渡し 「一云 石なみ」

下つ瀬に 打橋渡す

石橋に 「一云 石なみに」 生ひ靡ける

玉藻もぞ 絶ゆれば生ふる

打橋に 生ひををれる

川藻もぞ 枯るれば生ゆる

なにしかも 我が大君の

立たせば 玉藻のまゝころ
臥やせば 川藻のごとく
靡かひし 宜しき君が
朝宮を 忘れたまふや
夕宮を 背きたまふや
うつそみと 思ひし時に
春へは 花折りかざし
秋立てば 黄葉かざし
敷栲の 袖たづさはり
鏡なす 見れども飽かず
望月の いやめづらしみ
思ほしし 君と時々
出でまして 遊びたまひし
御食向ふ 城上の宮を
常宮と 定めたまひて
あぢさはふ 目言も絶えぬ
しかれかも 「二云 そこをしも」 あやに悲しみ
ぬえ鳥の 片恋づま 「二云 しつつ」
朝鳥の 「二云 朝霧の」 通はす君が
夏草の 思ひ萎えて
夕星の か行きかく行き
大船の たゆたふ見れば

慰もる 心もあらず
そこ故に 為むすべ知れや
音のみも 名のみも絶えず
天地の いや遠長く
偲ひ行かむ 御名に懸かせる
明日香川 万代までに
はしきやし 我が大君の
形見かここを

やすみしし 我が大君の
あり通ふ 難波の宮は
鯨魚取り 海片付きて
玉拾ふ 浜辺を清み
朝羽振る 波の音騒き
夕なぎに 楫の音聞こゆ
暁の 寢覚に聞けば
海石の 潮干の共
浦洲には 千鳥妻呼び
葦辺には 鶴が音響む
見る人の 語りにすれば
聞く人の 見まく欲りする

柿本人麻呂「万葉集 卷二―一九六」

御食向ふ 味経の宮は
見れど飽かぬかも

田邊福麻呂「万葉集 卷六一〇六二 田邊福麻呂歌集より撰」

御食向ふ南淵山の巖には降りしはだれか消え残りたる

作者未詳「万葉集 卷九一七〇九 柿本人麻呂歌集より撰」

他にも万葉歌には御食つ国、という言葉で御食を供する国のことを詠み込んだものが複数、採られています。謳われているのは淡路、志摩、伊勢。歌番号九三四は、九三三の反歌なので、ここで謳われている野島は、そのまま淡路のこと。

天地の遠きがごとく
日月の長きがごとく
おしてゐる 難波の宮に
我ご大君 国知らすらし
御食つ国 日の御調と
淡路の 野島の海人の
海の底 沖つ海石に
鰻玉 さはに潜き出
舟並めて 仕へ奉るし
貴し見れば

山部赤人「万葉集 卷六一九三三」

朝なぎに楫の音聞こゆ御食つ国野島の海人の舟にしあるらし

山部赤人「万葉集 卷六―九三四」

御食つ国志摩の海人ならしま熊野の小舟に乗りて沖へ漕ぐ見ゆ

大伴家持「万葉集 卷六―一〇三三」

やすみしし 我ご大君

高照らす 日の御子の

きこしをす 御食つ国

神風の伊勢の国は

国見ればしも 山見れば

高く貴し 川見れば

さやけく清し 水門なす

海もゆたけし 見わたす

島も名高し ここをしも

まぐはしみかも かけまくも

あやに畏き 山辺の

五十師の原に うちひさす

大宮仕へ 朝日なす

まぐはしも 夕日なす

うらぐはしも 春山の

しなひ栄えて 秋山の

色なつかしき ももしきの

大宮人は 天地

日月とともに 万代にもが

作者未詳 「万葉集 卷十三―三三三四」

さらには、時代がかなり下ってしまいましたが、延喜式によると御食とは別に御贄。みにえと読みますが、こちらは天皇や宮中に供出する食材と、その産地として畿内五国の山城・大和・河内・和泉・摂津と、志摩・紀伊・淡路・若狭・近江・参河などが記載されています。

：当時の食品輸送を考えると、恐らくはこれらが限界で、当たり前になりますが、安房のような東国は適するわけありませんね。

余談になりますが、そもそも安房という国が置かれたのは、歴史的に意外と後だったことは、一番最初にお話した通り。

乙未、越前国の羽咋・能登・鳳至・珠洲の四郡を割きて始めて能登国を置く。上総国の平群・安房・朝夷・長狭の四郡を割きて安房国を置く。陸奥国の石城・標葉・行方・宇太・日理と常陸国の菊多との六郡を割きて石城国を置く。白河・石背・会津・安積・信夫の五郡を割きて石背国を置く。常陸国多珂郡の郷二百一十烟を割きて菊多郡と曰ひて石城国に属く。

「続日本紀 卷八 元正天皇 養老二年（七一八年） 五月二日」再引用

景行期に安房という国は当然、存在していませんでしたから日本書紀で淡水門が上総国とされて

いるのも、極めて自然なこと。因みに、その日本書紀の成立は二年後。養老四年（七二〇年）のことです。

走った所為なのでしょう。汗が噴き出して、こめかみと背中を流れてゆきます。相変わらず鼻の奥はつん、としていて滲み続ける涙と涙水。呼吸はまだ、楽になったとはとても言えない状態で、もっともつと浮島を眺めていたのですが、そうも言っていられません。吸入薬は車に残したままで、仕方なく、そろそろとまた、堤防を戻り始めます。

自分でも解りません。何故、こうまで自分が浮島に惹かれてしまうのか。そもそも、安房国を周ると決めた時点で、わたしの頭にあったのは、とにかくにも安房忌部でした。浮島の存在など、考えてもいませんでしたし、何処にある島かすらも知らなかったわけで。

ですが、布良崎神社もそうなのですけれど、旅をしているとこういう、全くのノーマークの場所を、気づけば訪ねてしまい、訪ねてしまえば、そこには新しい歓びが待っていてくれます。巡り合せ、あるいは偶然。そんな言葉で語るにはあまりにもそぐわない、まるでわたしではない、何かの意思によって出会い、招かれたのうに感じてしまう場所たち。

正直、実際にほんの1km先に横たわる浮島は、わたしの感覚では高橋氏文や日本書紀が言う白い大蛤や鰹を獲るには果たしてどうなのか、と思えてしまっています。鰹はまだしも蛤は厳しいのではないかと。淡水と海水とが交じり合う、砂地でしか蛤は獲れなかったはずですから。…もちろん、かつての浮島界限と現代のそれとは、また地形も多少は異なっていたのでしようが。

安房国【行程上卅四日、下十七日】

調、緋細布十二端、細貲布十八端、薄貲布九端、縹細布二百五十端、鳥子鰯、都都伎

鰯各廿斤、放耳鰯六十六斤四兩、著耳鰯八十斤、長鰯七十二斤。自餘輸細布、調布、凡鰯。

庸、輸海松四百斤。自餘輸布。

中男作物、紙、熟麻、蓼、紅花、堅魚、鰯。

「延喜式 卷二四 主計寮上 安房国」

常陸国【行程上卅日、下十五日】

調、緋帛七十疋、緋纈◆卅、紺帛七十疋、黃帛一百六十疋、◆一千五百廿五疋、長幡

部◆七疋、倭文卅一端。自餘輸◆、暴布。

庸、輸布。

中男作物、麻四百斤、苧、紙、熟麻、白暴熟麻、紅花、茜、麻子、雜醋、鰯。

「延喜式 卷二十四 主計寮上 常陸国」

※◆糸偏に施の旁の表記です。

やはり延喜式の記述になりますけれど、安房は鰯、獲れていたようです。一方の常陸には、記載なし。それでは蛤は、となりますが千葉県出土の木簡に、蛤の文字が認められるようです。ただし、あくまでも千葉県であって、安房、ではありません。

かつて干潟だった東京湾。当時の国で言うならば、安房はもとより、その先の上総でもなく、さらに先の下総。つまりは、現代の幕張や船橋周辺になりますけれど、その辺りであるならば、蛤は確実に獲れていた、とも思います。逆に、湖と鹿島灘という外海にごく近い常陸の方が、しつくり来てしまう予感、まだ常陸を訪ねていないはずなのに、してしまっています。

それだけではありません。海の色が…、わたしにはどうも、ここではないよと言っている感じがしてならなかったんですね。実際に勝山側はともかく、浮島周辺は海が急激に深くなっていること、後からの調べで判明しています。

ですが、それとは全く別次元で、浮島という島が、神意のようなもので護られている印象を放っていたことも事実。そして、こちらも後からの調べて判明したのですが、浮島内は滅多に人が足を踏み入れないだけあって、原生林で覆われている、とのこと。

「日本最後の原始の島」

そんな風にも呼ばれているようです。…だから、ですね。だからあれほど、泣けてしまったのでしよう、きっと。

御食つ国安房の浮島

荒磯越す波を畏み

うちひさつ宮ありし日の

知らえずも

漕ぎ渡らむや漕ぎ渡らまく欲しきてふ

しくしくに思ひ思へど

白波の五百重の波のさはきては

よく見ていませ

畏みて見れども飽かず

旅なれば夕さりていまあれ離れむ

荒磯に波に島蔭に

いつにそ逢はむ

しなが鳥安房の浮島

畏けば

目こそ隔てれ心隔てや

神坐す斎つ島ゆゑに忌はりて渡らまく欲し安房の浮島

遼川るか

(於：勝山漁港)

ようやく車に戻り、先ずは吸入を。人心地ついてから見上げた空には、鳶が数羽、ゆったり描く弧。間もなく、夜がやってきました。

これまでも、上古に東国、と呼ばれた土地を歩いてきています。その土地、その旅ごとに思い感じることは様々でしたが初めてでした。東国、すなわち為政者たちによって何かを変えられてしまった哀しみを負う土地、という思い込みではない目で見つめ、そしてそれを肌で感じ取れた国は。

この国へ渡り、開拓していった忌部と末裔たち。彼らが祀ったのは自らの祖であり、恐らくはわたしたちが日頃思っている神という存在よりも、ずっとずっと近く、何よりも人そのものでした。それから数百年後、安房に至ったのは倭建。その父・景行は我が子の足跡を確かめながらも、この地の産物を認めました。そして、それらは後に中男作物という税の一つとして、畿内へ。さらに数百年後、もう一つの税である防人たちが、この地から筑紫へと旅立ち、また帰った来ていたのでしょう。

果たして彼らは、哀しんでいたのでしょうか。嘆いていたのでしょうか。…それは、解りません。氏族の誇りを負い、それに生きた者もいます。統治者として、それでも乱れることなく、多くの民たちが平らかに生きられることを望み続けた者がいます。故郷を後にすることの哀しみに耐えなが

らも、やはりみなが平らかに生きられるのであるならば、と辛い勤めに臨んだ者たちもいます。

哀しみは哀しみとして、嘆きは嘆きとして、けれども同時に誇りもまた、誇りとして。それぞれの立場で、人は生きます。…生きています。

知りすぎてしまったわたしは現代人とは違い、知る術が少なかったからこそ、知らなかったからこそ、もしかしたら現代よりもずっと恐れずに、構えもせずに、未知なるものを受け止め、受け入れていたかもしれない、いにしえの人々。

彼らが見つめていたのは、いつだってきつと、その先に広がる無限の可能性だった。…そんな風に感じてしまうのは、今のわたしが少し疲れてしまっているからなのかもしれません。ただ、そう思いたいのかも、しれません。

かつて上総で、道はそれでも繋がってゆく、と感じていました。そしてその思いをまた新たにしてくれたのが、安房国。すでに陸路すらもなく、海路を丸木舟とさして変わらないもので、畿内と安房を行き来していた往時が見せてくれたのは、人の子が宿す力であり、知恵であり、そして何よりも思いというもの。

土に生き、海を行き、そして謡う。播いて、殖やして、刈り、また謡う。産んで、育んで、護って、謡い、生きて、ただ生きて、ただなお謡う。きつと、それだけです。たった、それだけであることが、逆にあまりにも眩しい。太古より人というものが負っているのは、たったそれだけなのでしょうね。

うみつみちの果てとしてある安房国。この国に掛かる枕詞はしなが鳥、となります。万葉集にたった一首だけ採られている、高橋蟲麻呂のあの名歌によります。

題詞・上総の末の珠名娘子を詠む一首 短歌を并せたり

しなが鳥 安房に継ぎたる

梓弓 周淮の珠名は

胸別けの 広き我妹

腰細の すぐる娘子の

その顔の きらきらしきに

花のごと 笑みて立てれば

玉梓の 道行く人は

おのが行く 道は行かずに

呼ばなくに 門に至りぬ

さし並ぶ 隣の君は

あらかじめ 己妻離れて

乞はなくに 鍵さへ奉る

人皆の かく惑へれば

たちしなひ 寄りてぞ妹は

たはれてありける

高橋蟲麻呂「万葉集 卷九―一七三八」

高橋連蟲麻呂歌集より撰

題詞・上総の末の珠名娘子を詠む一首 反歌

金門にし人の来立てば夜中にも身はたな知らず出でてぞ逢ひける

高橋蟲麻呂「万葉集 卷九―一七三九」

高橋連蟲麻呂歌集より撰

しなが鳥。様々な水鳥をさす言葉のようですが、恐らくは現代のカイツブリが最も有力である、とされています。ただ、興味深いのはこのカイツブリ、その生涯を殆どを水上で暮らし、歩くというところが極端に少ないようですね。何でも、足が身体のかなり後ろから生えていて、とてもバランスが悪く、そもそも歩くことにはあまり適さない身体なのだそうです。

けれども、その足は一度水中に入るや否や、まるで櫂のような役割を果たし、泳ぐのにも、潜るのにもとても適している、と。

覚えていらつしやるでしょうか。磐鹿六雁命が、駕久我久と鳴く鳥に掛けた呪いを。

「汝鳥、其の音を恋ひ兒を見むと欲ふに、他し浦に飛び遷りて其の形を見さず。今より後、陸に登るを得ざれ。若し大地の下に居ば、必ず死なむ。海中を住処とせよ」

『本朝月令』所引 高橋氏文逸文
※◆は獣偏に葛という傍の表記です。

「陸に上ることは赦さない。ずっと海中で暮らすといい」

…件の鳥、もしかしたらカイツブリだったのかも知れませんが。もしそうだとしたら、蟲麻呂にはもはや天晴れ、と言いたくもなりますし、同時にちよつと出来すぎかな、とも思ってしまうのですが。…因みにカイツブリの鳴き声は決して、ガクガクとは聞こえないらしいですけれども。

そしてもう一つ。それほど水を力強く掻くカイツブリの足は、黒潮に乗ってこの地へやってきた忌部たちの舟の櫂にも通じると、思えてなりませんし、陸上を不恰好に歩く様を想像すると何故か、愚直に、不器用に、それでも誠意をもって生きようとした広成老が残した、古語拾遺の言葉たちさえも、透けて見えてきそうです。



勝山漁港の空に昇る月。

しなが鳥安房。後日談になりますが、実は、訪ね漏らしてしまった場所が幾つかあり、この地を再訪するのは、そう遠くありません。秋になるのか、冬になるのか。ですが、今日のところは帰ります。会社に車を戻さなくてはなりませんし。日もすっかり沈んでしまいました。

最後にもう一度、浮島を振り返ります。向こう側の堤防に隠されて、もう大ボツケも小ボツケも見えません。続いて今日、自身が訪ねて周って来た東と南の方角へ、また来ることを約束しながら深く、深く、一礼を。海に、空に、そして土にも、です。

しなが鳥安房のくぬかにわたつみに幣取り向けむ早帰り来む

遼川るか

(於：勝山漁港)

し
な
が
と
り
あ
は
ゆ
・
拾
遺



牧田地区の下立松原神社本殿。拝殿はない。

あれから半年。梅雨明けの蒸し暑さばかりが思い出されるあの日の安房国は、今ではすっかり冬枯れて、寒々とした景色ばかりをわたしに映します。年も変わり、すでに松の内すらも過ぎてしまったこの日、ようやく叶う安房再訪の為、家を出たのは四時前のこと。アクアラインを通過して千葉県に入り、このお社へ向かう途中で見たのは、今年になって初めて拝めた日の出でした。

千葉県南房総市千倉町牧田。内房線千倉駅から程近い、この地到下立松原神社の論社が鎮座していることに気づいたのは、夏の安房訪問から数週間後。確か、宮下や杳見の莫越山神社から真っ直ぐ野島崎へと進んでしまい、ちよつとモチユベーションが落ちていた時間帯に、通り過ぎてしまつたのでしょう。

…というよりも、そもそもがもう一方の滝口地区の下立松原神社を訪ねて、それで延喜式では社格小とされる下立松原神社の存在に俄然、興味を持った、というお粗末な経緯だったことも少しずつ思い出しました。

下立松原神社。莫越山神社が宮下と杳見、という地名を冠して地元でも呼ばれているように、下立松原神社もまた、夏に訪ねたものが滝口の、そして今訪ねているものを牧田の、と地域では呼んでいる、とのこと。

お陰様で、滝口の時とは違い、さほど迷うことなく着けたお社で、そういえばこれもまた、今年初めて。まさしく初詣になるのだな、と思いながら参道を進みます。

牧田の下立松原神社の主祭神は天日鷲命、合祀が木花開耶姫命、月夜見命、と。滝口のそれは主祭神が天日鷲命、天太玉命、天富命、伊弉諾命、伊弉冊命。合祀に至っては、やたらに多いのでここでは割愛。：天日鷲命はともかく、天太玉命、天富命あたりの名前が上がって来ないことを是と見るか、非と見るか、が難しいところになりそうですか。

それぞれの創建は、前述の通り滝口が由布津主命。牧田は社伝によると美奴射持命とのことです。が、ごめんなさい。この美奴射持命が誰か、はわたしには手繰れていません。一説には由布津主命と同一人物だ、とのとこなのですがどうでしょう。

二つの下立松原神社に関し、いまだどちらが式内社であること判明していない根拠は、実は立地にあるようです。：いや、正鵠に言うならば、立地の問題さえなければ滝口と定めてしまってもよいのではないか、という気持ちすらわたしの中にもあります。

安房国六座 大二座 小四座

安房郡二座 並

大

安房坐神社 名神大。 月次。 新嘗

后神天比理乃咩命神社 大。 元名洲神

朝夷郡四座

並 小

天神社

莫越山神社

下立松原神社

高家神社

「延喜式 卷九 神祇九」再引用

曰く、下立松原神社は、延喜式に朝夷郡にある、とされているのに対し、滝口地区は延喜式編纂当時は、安房郡に、牧田地区は逆に朝夷郡に、それぞれ属していたのではないかと。根拠としている文献は和名類聚抄、となります。

和名類聚抄によると、安房郡には太田・塩海・麻原・大井・河曲・白浜・神戸・神余の郷があり、一方の朝夷郡には、御原・新田・大瀦・満祿・健田の郷がある、と。そして、滝口は白浜郷、牧田は健田郷に含まれていたことになるのですが。

ならば、牧田で決まりじゃないか、と言えたら良かったんですけどね。そうは単純なお話ではない訳で、その根拠が先にご紹介している洲宮神社縁起にある、とされる下立松原神社に関する記述です。繰り返しますが、わたし自身は洲宮神社縁起を確認していないので、その書き下し文を孫引きとしてご紹介します。

またここに奇異き鳥ありて大空を翔る。金色の羽、日に輝きて雷光の如し。其の鳴声山川に答えて地震る。故れ人悉く恐れ戦きて逃げ惑えり。ここに於て由布津主命、靈物と思えり。故れ手に大はじ弓、天の羽羽矢を取り、八目鳴鏑を持ちそえ、弦音高く打ち響かせて申さく。神まこと神明ならば、請いねがわくはその験を現わすべし。荒振る神ならば、直に飛び去れと。このとき神、人に著きて告る。吾は天日鷲翔矢神なり。吾この国に鎮座せ

んと欲す。故れ天上の祭式の如く吾が前に斎き奉らば、まさにこの国安泰におわらん。ここに於て由布津主命、祖神の御稜威を畏れて、請のまにま瑞の新宮を造りまつり、御稜威と幸魂奇魂を鎮座せしめて祭拜。松原神社と称え奉る。其の称うる故は、この神山、松樹大いに茂り生いて、蒼々緑々、大空を凌ぐがゆえなり。又この神、宝殿の正面の戸よりは、高貴の大神並みに天布止玉命を出入し給わしめ、それを畏みて常に妻戸より出入れし給う。

「洲崎神社縁起」
※菱沼勇・梅田義彦著「房総の古社」よりの孫引きです。

恐らく下立松原神社というお社に関する史料としては、これが最重要だと思われます。そして注目すべきは、やはり創建が由布津主命、と明記されていることですね。逆に、美奴射持命の名前は見当たらず。同一人物説も、恐らくはこれを根拠として興ったものである、と考えた方が妥当でしょう。つまり、洲宮神社縁起に、下立松原神社の創建者が由布津主命とあるからこそ、誰かは判明しない美奴射持命は、きっと同一人物、と後付けされたのだろう、と。加えてもう一点。「松樹大いに茂り生いて」という描写は、牧田には当たらない印象がしてしまうのです。

これは実際に、来てみてたからこそ感じられるのですが、こちら牧田の下立松原神社は、境内にあるのはほぼ杉の木ばかり。もちろん、千年以上の昔のことですから、当時と変わらずに今もある、とは決まっているのですが、それでも滝口には、その形跡が残っているわけでして。

あとは、相変わらず根拠も論拠もない、わたしがただそう感じた、という印象の話になってしまいうのですが、牧田のものは、お社として湛えている空気にかすかな違和感を覚えてしまひまして。何がどう、ということではなくて、ただ何となく、なんですけれどもね。

参拝を済ませ、境内をひと回りしてみます。源頼朝の馬洗池跡や御霊白幡神社など、後世の影響を受けたものも多く見られますね。あるいは、鎌倉期などは、こちらの神社の方が栄えていた、ということでしょうか。

…古歌紀行をしていると、本当に自分の中の不思議を思います。例えば洲崎神社と洲宮神社でのことなど、物的な証拠があったとしても、それで納得できなければ従いませんし、逆にここ・下立松原神社のように根拠が揃えば揃うほど、それを採りたくなってしまうこともあって。結局のところ自身が訪ねて感じたものを、何よりも重要視しているわけで、ならば最初から史料など漁らずとも、自身の感覚だけを頼りに出来るか、ということとそれもまた叶わない。…随分と身勝手といえますか、ご都合主義だな、と率直に思います。

ですが、それでもやっぱりそう感じたから。これが最後に残るものでもありますし、そもそも多くの学者さんや研究者さんが、議論しても出ていない答えであるならば、こう思うことこそが上代文学や、それに纏わる故地を訪ねる醍醐味。…そうしてしまってもいいんじゃないでしょうか。

そうそう、件の和名抄の謎については、そもそも和名抄自体の成立までに掛かったタイムラグが関与しているかもしれない、という説も複数目にあること、書き添えておきます。

それと、前記孫引きさせて頂いている洲宮神社縁起。再度、書かせて下さい。もしかすると、これこそが失われた安房国風土記の一部、そのものかもしれない、ということ。

思ふことを思ふと言はむひとの世のうつろひやすく言痛くあれば 遼川るか

(於…牧田の下立松原神社境内)



牧田の下立松原神社からは、さほど離れていない場所に、やはり夏には訪ね漏らしてしまったもう一つの式内社があります。その祭神は磐鹿六雁命。はい、膳部の祖にして、浮島伝説では鰹や蛤を料理したあの、磐鹿六雁。だからか、国内唯一の料理関係者にご利益があるお社です。延喜式での社格は小。高家神社、と書いてたかべじんじや、と読みます。

わたし自身も、その世界の末席を汚す身ですから、流石に前回、ここを落としてしまったことに気づいた際は、ちよつと頭を抱えなくなってしまったこと、今だから明かせるお話です。

道路を挟んで参道向かいの駐車場で、先ずは身支度。本当は包丁を持参・お祓いしてもらいたかったんですけど、古歌紀行の目的からは逸れてしまうため、今回は断念。…いや、本当にそうしたくなったら、今度はちゃんとその為だけに来たいな、と。

ですが、それでもやはり各地を周っている時よりは、ほんの少しだけ背筋も伸びますし、この期に及んで身だしなみくらいは何か。帽子は当然、脱いで車の中に残し、シートベルトでくしゃくしゃになっていた襟も、きちんと合わせて一番上のボタンまで、しっかり掛け直しました。

式内社・高家神社。先ずはそのあまりに整然とした参道や境内に、ちよつと驚いてしまいました。

境内には、二百年を経たお社を再建するべく、奉賛を乞う案内も掲示されているのですが、どうでしょう。…各地でもっと寂れてしまっている無人社などを多く見ているから、ですかね。むしろわたしには、予想に反する威勢堂々たる佇まいに思えてしまったのですが。

境内もかなり広く、しかも途中の玉砂利一つ、石段一つ、そして白木を多く使用しているであろう拝殿一つとっても

「流石は醤油処・千葉にある、国内唯一の料理の神様をお祀りする神社だ…。醤油業者さんの信奉

も、きつと厚いのだろうな…」

とかなり下世話なことを考えていたのに気づき、思わず自身を咎めたりしましたが。

祭神・磐鹿六雁命。浮島での活躍の後の彼については、やはり高橋氏文に詳しいです。

六雁命、七十二年の秋八月に病を受けて、同じ月に薨せぬ。時に、天皇聞こしめして大きに悲しび給ふ。親王の式に准へて葬りを賜ひき。宣命の使として、藤河別命と武男心命と等を遣はす。宣命に云はく、

「天皇が大御言らまと宣りたまはく、王子の六雁命の思ほさざる外に卒せ上りたりと聞こしめし、夜昼に悲愁ひ給ひて大坐します。天皇の御世の間は平らかにして、相見そこなはさむと思ほす間に別れゆけり。然あれば今思ほし食す所は、十一月の新嘗の会も膳職の御膳の事も、六雁命の労はしく始め成せる所なり。是を以ちて、六雁命の御魂をば膳職にいはひ奉りて、春秋の永き世の神財と仕へ奉らしめむ。子孫等をば、長き世の遠き世の、膳職の長とも、上総国の長とも、淡路国の長とも定めて、余氏は任けたまはでをさめたまはむ。若し、膳臣等の継がず在らば、朕が王子等をして、他氏の人等を相交へては乱らしめじ。

和加佐の国は六雁命に永く子孫等が遠き世の国家と為よと定めて授け賜ひてき。此の事は世々にし過り違へじ。此の志を知りたびて吉く膳職の内も外も護り守りたて、災患の事等も無く在らしめ給ひたべとなむ思ほし食すと申すと宣りたまふ天皇の大御命らまを虚つ御魂も聞きたべと申す」

と宣りたまふ。

…中々、すごい内容です。つまり、磐鹿六雁命が病死して、景行は彼を親王として葬った、と。親王といたら、皇子のことですから破格の…、もとい。とんでもない厚遇をして葬儀を出した、ということですよ。

実は、すでにご紹介した本朝月令に引用されている高橋氏文の中にも、こんな記述があつて、引つかつてはいたんですけど、これで疑問は解消です。

朕が王子磐鹿六◆命

『本朝月令』所引 高橋氏文逸文」再引用

※◆は獣偏に葛という旁の表記です。

元々「なみよみのかひゆ」でも少し触れていますが古代、火を扱い、それに纏わる職というのは、それなりに地位ある者が務めていました。磐鹿六雁命の出自も、大元を辿れば皇族です。第八代孝元天皇の曾孫に当たる、とされています。…欠史八代なので、真偽のほどについては、何も申せませんけどね。

そして、この磐鹿六雁命を祖とした膳部なる氏のもう一つの名が高橋氏。高橋氏は律令下でも宮内省内膳司に仕えていたわけですが、忌部に対する中臣同様、同じ宮内省内膳司にて務める安曇氏とはそれなりに勢力争いを繰り広げまして。古来ある家伝をまとめて上奏したもの。それが、高橋氏文となります。日本後紀にも両氏の争った記述がありますね。

壬申、流内膳奉膳正六位上安曇宿祢継成於佐渡国。初安曇高橋二氏、争供奉神事。是以去年十一月新嘗之日、有勅以高橋氏為前、而継成不遵詔旨、背職出去。憲司請誅之、特恩旨以減死

『類聚国史』所引 日本後紀 卷一 桓武天皇 延暦十一年（七九二年） 三月十八日』



高家神社拝殿前。

簡単に意識しますと、

「神事に奉仕するときの順序について、かねてから争っていた高橋氏と安曇氏に前年、高橋氏を先とする詔をだしたところ、安曇継成がこれを不服として職務放棄。出奔してしまったので、佐渡へ配流した。官司は死刑を求めてきたが、天皇の恩旨で死罪を免じ、流刑に処した」

という感じでしょうか。高橋氏文の上奏は、この三年前の延暦八年（七八九年）とされていますから、この前年の詔に、もしかしたら高橋氏にとってはよい結果を招いた一因となったのかもしれないですね。

ともあれ、この高橋氏文。現在では、失われてしまつて本朝月令などに引用された、逸文のみが伝えられています。：しかし何と言いますか安房国、この手が多いですね。偶然なんでしょうけれど、ちよつと古代氏族の厚い、熱い、思いがそここに感じられてしまひそうです。

古語拾遺同様、高橋氏文をどう読むのか、という点については歴史的に、色々あることだと思います。すでに少し書いていますが、これら氏族の家伝は、それぞれに

一定の評価はされているものの、歴史的に見れば公平性、客観性にかけている、とぼっそり言い切ってしまうっている論も、決して少なくはありません。あくまでも記紀こそが、この国の正史である、とする立場で見れば、と。

夏に安房を訪ね、その後ずっと、わたしの中でこの問いに対する自身の回答は、得られているのか、いないのか。…言ってしまうえば、現代に生きるわたしたちですらも、これに似たことは日々、遭遇していますよね。個々の価値観、個々に信じるもの、個々の優先順位、そして個々の立場でしか解り得ない、多く語られることのない種々の事象と、思いと。

国という一つの政治体制が、そこに筋道をつけること自体は仕方ありませんし、必要なことでもあるでしょう。同時に、ただ事実だけを至上とする学問の世界にも、それは必要不可欠。けれども何度か書いていますが、わたしはあくまでも史料としてではなく、文学としてこれら文献と向き合いたいと思っています。いや、そうしないと、とんでもないことにもなってしまうわけで、もはや収拾など不可能になってしまいうんですよ。

では、文学とは一体、何なのでしょう。例えば、万葉に多く収められている恋歌一つをとっても、恋に飲むもの、恋に嘆くもの、とそこに寄せられた思いも、立場も、信じるものも様々。時にわたしは、そのドラマの一方に肩入れし、時にドラマよりも歴史によって証明されている事実注射し、そして時にはその歴史すらも疑ってきますから。ここにあるのは、それこそ下立松原神社ではありませんが、ただそう感じたから。…こうとしか答えられるはずもなく、同時にかつて他の古歌紀行文で書いてきたことさえも、自身で否定することもあって。

…解りません。本当に、解らないのです。ですが、こうとも言えるのではないのでしょうか。「解らないからこそ、やっている。解らないからこそ、やり続けている」

と。この先、一体どれだけの土地を訪ね、どれだけの史料も、文学としての文献も読み、どれだ

けの紀行文を書けば、あるいはいつかこの答えがでるのでしょうか。

いや、もしかしたら。もうとつくに答えは出ているのかもしれませんがね。今よりも、ずっとずっと以前。それこそ小倉百人一首の絵札を最初に手にした四歳のあの日、あの瞬間にもう、答えは出てしまっているのかもしれない。

ゆき謡ひすべのたどきの知らざれば歌思ふ心慰もるまで

遼川るか

（於：高家神社境内）

高家神社の境内には、かなり大きなアカハラがやって来ていました。飛び交う度に、大きく撓る枝を眺めて、ふと思ってしまいました。枝はわたし。アカハラは旅。あるいは旅によって出会う、様々な訪問地と、数多の史料や文献、そして歌。

また一つ、大きく撓り、そして戻る枝を耳の後ろで感じていました。

しながとりあはゆ・後拾遺

この国に、そのために最初に来たのは四年前の七月。様々変わる生活の中で、紀行文を書くことも、謡うことも、旅することすらも、叶わなくなっている自身に對しもう一度。もう一度、謡いたい。もう一度書きたい、というあの懐かしい感触が、水底に生まれた泡のように、ちいさくちいさく揺れながら湧いて来たのは多分、一カ月くらい前だったと思います。

ほんの三〇枚ほど、書いただけで止まっている紀行文。何だか、自分がとても大切なものを置き去りにしてしまっているような、思い出したいのに思い出せない曲の歌詞のような、そんなもどかしさに、ふと車にエンジン掛けてしまっていました。とにかく先ずは、もう一度、安房へゆかなくては。…今朝のことです。

正直、もう一度書くために、安房という国の感触をこの身体に降ろしたかっただけでした。安房の風を肌感じて、安房の海の色を確かめて、空の匂いを嗅ぎたかった。それだけだったはずなのに、まさか出会えてしまうなんて…。

慌てて車を停めたスーパ―の駐車場で、思わずにはいられませんでした。

「ありがとう。ありがとう、しながとり安房。待っていてくれて、本当にありがとう…」

きっかけは、道を間違えたことです。目指していたのは宮下と沓見の莫越山神社。アクアラインで千葉に上陸し、そのまま房総半島を西から東南へ、と突っ切るつもりで走っていたのですが、国道四一〇号ではなく、少し行き過ぎて国道四六五号に入ってしまったんですね。

ですが、

「今日は、目的が目的なもの。そんなにギリギリしなくてもいいじゃない。のんびり行けたら、それで…」

と地図だけ確認し、一旦海岸近くまで走ってから、国道四一〇号に向かうべく、長狭街道を進ん

でいると、ある交差点名が目飛び込んできました。

主基〇〇〇公園。：すぐに車を停めたくとも、後続車がいるのでそれも叶わず、そのまま進むと今度は主基交差点、との標識です。さらに少し進み、道傍のスーパーの駐車場へとハンドルを切ります。かつて自身が書いた「さゝなみのしがゆ・式」の記述を、急いで携帯電話から確認しました。：間違いありません。自身で書いています。曰く、安房は明治の主基斎田に卜定された国だ、と。ならば、さきほど通り過ぎた交差点の近くにきつと、きつと、あるはずです。そう、主基斎田址が、です。

車を駐車場から出し、来た道を可能な限りゆっくりと戻ります。主基交差点を越え、さらに少し行つた道路脇にあったのは、主基斎田址公園、と書かれた案内看板でした。それに習つて左折すると広がっていたのは、のどかな田園風景。すでに刈り入れを済ませた一面の田圃です。

そして、そんな拓けた景色の中にぼつん、と木々に囲まれた一画が。恐らくはあれが、そうなのでしよう。

車を降りると、最初に襲つてきたのは音のない空。長狭街道から、そう離れてはいないので、車が行き交う音は、確かに聞こえています。ですが、まるでそれらの音をすでに雑草ばかりが生える田圃たちがすべて受け止め、吸い込んでしまっているかのような、穏やかな静けさ。聞こえるのは自身の靴音、衣擦れ、そして息。

見渡す限り、人間はわたししかいないという空間に最後に身をおいたのは何時以来になるでしょうか。晩秋から初冬へ、と世界全体がゆっくり進む真昼、かつて何度も覚えていたあの「理由の解らない懐かしさ」が込み上げてきて、それすらも懐かしく。



安房国主基斎田址を囲むようにして設えられた主基斎田址公園。周囲の田圃がそれか。

「ああ、戻ってきたんだ。帰って来られたんだ……」
 そう、漏れてしまった声までも、田圃たちに包
 まれ、吸い込まれてゆきます。
 主基斎田。自作より引きます。

斎田。言葉としての意味は、大嘗祭（天皇
 の即位後、最初の新嘗祭）に使用される新穀
 を献上することを卜定された田、となりま
 すか。悠紀と主基の二つあって、京都以東以
 南を悠紀の地方、京都以西以北を主基の地方、
 としていたと思います。

明治では悠紀に甲斐国、主基に安房国が卜
 定され、大正のときは悠紀の地方に愛知県、
 主基の地方が香川県。昭和の悠紀がここ、滋
 賀県は御上神社正面。主基は福岡だったと記

憶しています。…平成は悠紀が秋田、主基が大分。

遼川るか「さゝなみのしがゆ・弐」

続けるならば、明治以前は宇多天皇の大嘗祭よりずっと、悠紀が近江国、主基が丹波国と備中国
 の交互で固定（例外は冷泉天皇の播磨国）されていて、卜定していたのはそれぞれの国の、どの都

か、という点のみでした。それが明治期以降、現在の様式に変更。

よって事実上、首都圏からほど近い斎田址は、甲斐か安房にしかない、と言ってしまっていると思います。因みに甲斐の悠紀斎田は、現在の甲府市内です。

：平安中期以前でいえば、元明期と元正期の悠紀が遠江国。ですが、流石に現代の自治体区分だと静岡県とは言え、実質的には静岡の西側、愛知寄りです。往時は、東から伊豆国、駿河国、そして遠江国、と三つの国に分かれていたくらいで、遠江国は、浜名湖を中心とする国でしたから、首都圏とは言いがたいのではないかと。

また、調べた範囲では、肝心の斎田が遠江国の何処だったかも、全く解っていませんね、残念ながら。

田圃の中に設えられた一画。案内板には、主基斎田址公園の文字。ぐるり、と取り囲む木々の真ん中には、記念碑が高く聳えます。そして相変わらず音が、いない…。

天地に

おほみたからのわざあれば

いざ謡はむや斎ひ言

唱ふ唱へよ

穂に田にも

斎つ陸田種子斎つ稲に

祈ひ禱ひ祀り祓ひては

いついつなほし幸はふを

斎つ田由機須機

高照らす日に地めづられ

めづられば芽萌え出づる

久方の雨いや降れば芽のゑむ

いよいよよか

いやましに

いやさかはえに

いやましにませ

弥日異にまされ斎つ稲あきづしまやまとの国になほましにませ

遼川るか

(於：安房国主基齊田址)

「さゝなみのしがゆ・弐」でも書きましたが、上代文学を嗜好してはいても、基本的にわたしは決して皇国史観に傾倒している人間ではありません。なので、天皇即位に際しての大嘗祭云々について、だがらどうだ、という感慨があるわけではないのですが、それでも、人が生きていく以上、食べるという行為は不可欠。

突き詰めてしまうなら、政治というものは、ただ飢えることなく食べられることを願い、求める、一つの形に過ぎない、と思っっていますし、その為に人々が腐心し、悩み、挑み、続けた様は、それこそが人間本来の姿。

その現れの一つとしてある、悠紀と主基の斎田には、込み上げてきてしまうものがあります。稲や稲穂を見るだけで、理由も判らない涙が溢れてしまうことも。来たことなどない場所なのに、どうしても拭い去れない懐かしさに突き動かされ、叫びたくなってしまうことも。

すべては血が負う記憶なのだ、と。土と空が湛える、時間の堆積なのだ、と。そう思うしかない、

ということはそれでも確実にあるのだ、と。それだけを思い、満たされて、一面の田圃に一礼をします。



主基斎田もそうなのですが、安房国が授けてくれた、思っても見なかった出会いがもう一つ。安房国分寺跡です。

すでにご紹介していますが、改めてこの安房国が辿った経緯をお話しましょう。そもそも上古に於いて、現在の千葉県内に相当する土地には、上総国と下総国が置かれていました。安房・長狭・朝夷・平群などの郡はそれまで、すべて上総国に含まれていたんですね。そこに下りたのが、この詔です。

乙未、越前国の羽咋・能登・鳳至・珠洲の四郡を割きて始めて能登国を置く。上総国の平群・安房・朝夷・長狭の四郡を割きて安房国を置く。陸奥国の石城・標葉・行方・宇太曰理と常陸国の菊多との六郡を割きて石城国を置く。白河・石背・会津・安積・信夫の五郡を割きて石背国を置く。常陸国の多珂郡の郷二百一十烟を割きて名けて菊多郡と曰ひて石城国に属く。

「続日本紀 卷八 元正天皇 養老二年（七一八年）五月二日」再引用

上総国から平群・安房・朝夷・長狭ら、四郡を分割して安房という国を置け、と。けれども、そ

の二十数年後、詔は覆されます。聖武が大きな国策を次々発布していた時期で、ここ・安房から遠い大和では、少しずつ天平の迷走が始まっていました。

十二月丙戌、外従五位下秦前大魚を参河守とす。外従五位下馬史比奈麻呂を甲斐守。外従五位下紀朝臣廣名を上総守。外従五位下守部連牛養を下総守。従五位下阿倍朝臣子嶋を肥後守。安房国を上総国に并せ、能登国を越中国に并す。

「続日本紀 卷十四 聖武天皇 天平十三年（七四一年）十二月十日」再引用

再び安房が、国として復帰したのは、その十五年後。これ以後は、特に大きな変化もなく、時代は平安・そして鎌倉へと進みます。

乙卯、勅して曰はく、

「頃者、上下れる諸使、惣て駅家に附ること、理に於て穩にあらず。亦、駅子を苦しめむ。今より以後、為ら令に依るべし。その能登・安房・和泉等の国は旧に依りて分ち立てよ」とのたまふ。

「続日本紀 卷二十 孝謙天皇 天平宝字元年（七五七年）五月八日」再引用

ですが、前述しているように天平期、聖武の迷走は続きました。相次ぐ飢饉や疫病の流行、暴動・反乱などへの国策としての対応だったわけですが、恭仁や難波、紫香樂などの宮の造営とそれに付随する、橋や道路の整備。世に言う盧舍那仏、つまりは奈良の大仏造営。それらに先駆けて行われた大規模な行幸たち、などなど。

中でも、地方各国にも大きな影響を及ぼしたのが、有名なこちら。

乙巳、詔して曰はく、

「朕、薄徳を以て忝くも重き任を承けたまはる。政化弘まらず、寤寐に多く慚づ。古の明主は、皆光業を能くしき。国泰く人樂しび、災除り福至りき。何なる政化を修めてか、能くこのこの道に臻らむ。頃者、年穀豊かならず、疫癘頻りに至る。慙懼交集りて、唯勞きて己を罪へり。是を以て、広く蒼生の為に遍く景福を求めむ。故に、前年に使を馳せて、天下の神宮を増し飾りき。去歳は普く天下をして釈迦牟尼仏尊像の高さ一丈六尺なる各一鋪を造らしめ、并せて大般若經各一部を写さしめたり。今春より已來、秋稼に至るまで、風雨順序ひ、五穀豊かに穰らむ。此れ乃ち、誠を徴して願を啓くこと、靈◆荅ふるが如し、載ち惶り載ち懼ちて、自ら寧きこと無し。經を案ふるに云はく、

『若し有らむ国土に、この經王を講宣し読誦し、恭敬供養し、流通せむときには、我ら四王、常に來りて擁護せむ。一切の災障も皆消殄せしめむ。憂愁・疾疫をも亦除差せしめむ。所願心に遂げて、恒に生歡喜を生ぜしめむ』

といへり。天下の諸国をして各七重塔一区を敬ひ造らしめ、并せて金光明最勝王經・妙法蓮華經各一部を写さしめむべし。朕また別に擬りて、金字の金光明最勝王經を写し、塔毎に各一部を置かしめむ。冀はくは、聖法の盛、天地とと与に永く流り、擁護の恩、幽明を被りて恒に満たむことを。その造塔の寺は、兼ねて國華とせむ。必ず好き處を択ひて、実に久かるべし。人に近くは、薰臭の及ぶ所を欲せず。人に遠くは、衆を勞はして歸集することを欲はず。国司等、各務めて嚴飾を存ち、兼ねて潔清を尽すべし。近く諸天に感け、臨護を庶幾ふ。遐邇に布れ告げて、朕が意を知らしめよ。また、毎国の僧寺に封五十戸、水田一十町施せ。尼寺には水田十町。僧寺は、必が廿僧有らしめよ。その寺の名は金光明四天王護国の寺とせよ。尼寺は一十尼。その名は法華滅罪の寺とせよ。両寺は相去りて、教戒を受くべし。若し闕くること有らば、即ち補ひ満つべし。その僧尼、毎月の八日に必

ず最勝王経を転読すべし。月の半に至る毎に戒羯磨を誦せよ。毎月の六齋日には、公私ともに漁獵殺生すること得ざれ。国司等、恒に檢校を加ふべし」

とのたまふ。

「続日本紀 卷十四 聖武天皇 天平十三年（七四一年）三月二四日」

※◆は貝偏に兄の旁の表記です。

はい、国分寺と国分尼寺建立の詔です。そしてこれ以後、諸国は約二〇年をかけて国分寺・国分尼寺を造営していったわけですが、注目すべきは、安房国が上総に併合されたり、また分離独立した流れとの時系列でしょう。

七一八年（養老二年）五月二日

安房国成立

七四一年（天平十三年）三月二四日

国分寺・国分尼寺建立の詔

七四一年（天平十三年）十二月十日

安房、上総国に併合

七五七年（天平宝字元年）五月八日

安房国再成立

七六〇年前後（天平宝字年間）

各地で国分寺・国分尼寺完成

つまり、国分寺・国分尼寺建立の詔の約十ヶ月に、安房はそもそも国ではなくなり、それから時は流れて十五年後。再び国として成立した頃には各地で、恐らくは早い国ではすでに、国分寺・国



復元された上総国分尼寺。

分尼寺が完成していた、ということなんです。そんなわけで、わたし自身は安房に国分寺はない、と最初から思い込んでしまっていました。調べようとも、探そうともしていませんでした。

いや実際、復元されている上総国分尼寺などを思うと、詔発布一年弱で国ではなくなる。造営の義務を負う必要がなくなってもなお、そのまま造営し続けたとは、とてもとても。かかる資金・人手・資材などだつて莫

大だったことでしょうし、何よりそれを監督し、何よりそれを監督だつて、変わってしまったはずですから。万葉集に採られている、仏教の影響が見られるやり取りを引きます。

題詞：戯れに僧を嗤ふ歌一首

法師らが鬚の剃り杭馬繫いたくな引きそ法師は泣かむ

作者未詳 「万葉集 卷十六―三八四六」

題詞：法師の報ふる歌一首

壇越やしかな言ひそ里長が課役徴らば汝も泣かむ

作者未詳 「万葉集 卷十六―三八四六」

「坊さんたちの（剃髪した顔に残る）杭のように伸びた髭に馬を繋いでやったよ。そんなに引つ張ってやんなさんなよ、坊さんが我慢しているからさ」

「檀家さんや、そんなこと言うんじゃないよ。あんたたちだって、里長が課役を強制したら、我慢しなくちゃならないんだから」

かなりの意識になりますけれど、こんなような戯れ歌の応酬です。…すみません、これじゃあ仏教の影響というよりは、当時の租税に対する風刺になってしまっていますか。ただ、底流しているのは、神職とは違い当時の僧侶というものがかなり市井の人々にとっては親しみやすい、と言いますか、ひれ伏すような存在ではなかったこと、手繰れると思います。もちろん、これは少なく見積もっても畿内のものなのでしょうけれども。

続いて、こんな歌もご紹介します。

題詞：池田朝臣の大神朝臣奥守を嗤ふ歌一首〔池田朝臣の名は忘失せり〕

寺々の女餓鬼申さく大神の男餓鬼賜りてその子産まはむ

池田朝臣 「万葉集 卷一六―三八四〇」

題詞：大神朝臣奥守の報へて嗤ふ歌一首

仏造るま朱足らずは水溜まる池田の朝臣が鼻の上を掘れ

大神朝臣奥守 「万葉集 卷一六―三八四一」

「寺々にいる女餓鬼たちが言うことには、大神の男餓鬼を夫にして子どもを産みたいそうだよ」

「大仏を造る水銀が足りないというのなら、水が溜まりそうなくらい低い池田朝臣の鼻の上を掘ればいいよ」

やり取りそのものは、互いの容貌に対する皮肉をたっぷり込めたじやれ合いなのでしょう。餓鬼は、仁王像や四天王像の足元に踏みつけられて、苦悶の表情を浮かべている、あの餓鬼のこと。きつと、大神朝臣は餓鬼のように、痩せ細っていたのでしょうか。だから、そんなじや女餓鬼に狙われちゃうじゃないの、とからかったのでしょうか。それに対し大神朝臣は、池田朝臣の低い鼻をからかい返しました。

ですが、それでも微かに滲んでしまうのは、天平の歪。大仏の造営に水銀は不可欠だったわけで、それが足りないならば、と戯れ歌に即座に詠み込めてしまうほど、少なくとも官人たちの間には、水銀の発掘・確保に四苦八苦している朝廷の内情が、知れ渡っていたからでしょう。：しかも、大仏云々を謡っているのは、よりによって大神氏です。大神、すなわち三輪山を祀る大神神社系の氏族ですからね。それはそれは、含みもきつとあったことではないか、と。

いずれにしても、人々が安らかに暮らせることだけを望み、願った聖武の政策は、けれどもそれによって多くの人々に労苦と我慢を強いることになってしまっていた時代、それが天平です。

宮下と杳見の莫越山神社を参拝した後、国道一二八号で一気に内房側へ出ようとしていました。館山まで出て、そこから洲崎神社の参拝へ、と。

お天気の良い日。つつい眠くなつてしまいがちな午後です。思えば、これまでの安房訪問時は、基本的にほぼ常に海岸線近くを周っていたので、主基斎田址の長狭街道もそうですが、この国道一二八号のように、外房と内房を繋ぐ内陸部の道は、そもそもそういう目で走ったことがなかった事実を、自覚していませんでした。

日曜日の国道は交通量も多く、あまりスピードが出せません。といって、海岸部のように目を奪われる景色も少なく、ただぼんやりとハンドルを握っていたのですけれど、自身の左側を流れていた看板に、再び車を停めたくなったのは、もう館山駅まで1kmを切った地点。安房国分寺の案内

板です。

…一瞬、理解が出来ませんでした。主基斎田址のように、ただノーマークのポイントに偶然、辿り着いてしまった、というだけではありません。

「安房にあるの、国分寺が…？」



たまたま道路が二股に分かれていたので、とりあえず国道から逸れて脇道へ逃れます。けれども、もう頭の中は軽いパニックを起こしていて、何が何だかよく解りません。脳裏に浮かんで流れ、消えてゆく続日本紀の記述の断片と、年号という数字の羅列たち。

いや、それだけは済みません。天平、それはこの国の歴史に於いて有数の、世界への窓が大きく開け放たれていた時代。国際都市として栄え、誇り、その一方で足元には暗い、暗すぎる影が不気味に広がってもいた平城京。深く、濃く、刻まれた光と闇。さんざめく人々の声と歌と花。朱雀門の朱色、哀しみ、狂気、欲、策謀、救世への願い、祈り、祈り、祈り…。

「どうして？ どうして…」

心のどこかで、安房とは切り離してしまっていた、天平のイメージが次々と流れ込んできます。それは、ここまでに訪ねて周ったからこそ形になっていた、安房国の印象とは、あまりにも遠いものたちで、その重みが自身の身体にずしりと降りてしまっていました。

脇道を少し戻り、幾つかの路地を通り過ぎます。そして気づけば現代の安房国分寺、正式名・真言宗日色山国分寺の山門前に出ていました。

さらに驚いたのは、真言宗日色山国分寺と彫られた石塔の前に千葉県指定史跡 安房国分寺跡、と。
「あるんだ、あったんだ……」

何がそこまで受け入れ難いのでしょうか。これまでに作り上げてきた素朴で、それでも土に、海に生きてゆくことを選んだ人々の躍動。祖神を祀り、播くことと殖やすこと。育てることと獲ることと、そして何より作ること。そういった生命が本来、宿すべくして宿しているぬくもり、大らかさ、朗らかさ、などと一線を画すどろり、とした影に浸食されてゆくような、この感触なのか。
あるいは、そんな一面だけしか見ていなかった、見ようともしていなかった、以前のわたし自身なのか。よく、解りません。

真言宗日色山国分寺横に広がる空間を歩いてみます。案内には古瓦が多数、出土している旨、書かれていましたが、広さ自体は各地の国分寺跡と比較すると、意外などの狭さです。内容も金堂の基壇こそ、確かに発掘されていますが、いわゆる伽藍の跡はありません。礎石らしきものも見つかっていないようで、つききまでの困惑が、呆気ないほどあっさりと引いてしまいました。

帰宅後に確認できたのですが、他には釈迦堂の跡も見つかっているようですね。ですが、やはり伽藍は未確認。これを、まだ発掘されていないからと捉えるのか。あるいは、そもそも存在していなかったと捉えるのか。これによって往時の安房国分寺の輪郭は、随分と変わってしまいそうです。

幾つかの見解も調べましたし、加えてわたし自身が現地で直感してしまったものも、ほぼ同じ。やはり、安房国分寺は……。少なくとも各地で見た、聖武の執念と狂気と切望を湛える存在としてあ



真言宗日色山国分寺。この敷地内に安房国分寺跡はある。

った、天平の国分寺は…、安房国にはなかったのでしょう。もつと言ってしまったえば建立できなかったのではないかと。
 各国がそれぞれに国分寺造営に取り組んでいた時期、この世には存在しなかった安房国。それだけを根拠とするには弱いかもしれませんが、恐らくはこの場所に元々存在していた寺を改修するような規模で、国分寺を成立させようとしたのではないのでしょうか。そう考えるのが、少なくともわたしには一番納得できます。

鳥が鳴くあづま知らるかあをによし奈良つおほてら
 おほみことはも おほせごとはも

遼川るか

（於：安房国分寺跡）

とはいっても、基壇跡や出土している古瓦などが一三〇〇年の昔、確かにここにあった古刹の存在を、静かに訴えています。これが、天平の安房国だ、と。忌部たちや、倭建がやってきた頃とは違い、すでに古東海道（うみつみち）、の果ての地ではなくなっていた、日本という国の版図の一つとしてあった、天平の安房なのだ、と。

国分寺がここである以上、きっとこの界限には、国府や国分尼寺の跡も、きつと眠っているのでしょうね。いまだ見つからないようですが、必ずあるのでしょうか。同時に、ここが天平期の安房国の中心地であった、とも言えてしまいます。

安房神社などが点在する、忌部が辿り着き、上陸した、ときれ

る海岸線からはおよそ十km。代わって館山湾、つまりは内房からの距離は約三km。この立地が物語っています。畿内から安房や上総、下総へ続くルートが、変わってしまったていることを。

古東海道はもう完全に伊勢から一気に安房までやってくる海路ではなく、陸路で走水の海まで来てから、木更津界隈に渡海するそれに切り替わってしまったからこそ、でしょう。往々にして官道に近い、あるいは沿う形で国府などは置かれます。そうしないと不便ですから。倭建の東征時は、それでもまだ二つのルートが語られていたのですけれどもね。天平の頃までには、駅馬や駅鈴などの制度も、行き渡っていましたから、当然なんですから。そして、それこそが安房が上総の一部となったり、そうではなくなったりした要因の一つでもあるでしょう。

古代官道から逸れ、人の行き来が少なくなれば、その土地に流れる時間の速度は、次第に遅くなってゆきます。新しい人、物、技術、情報。それらから少しずつ、少しずつ取り残されていったゆえに、国としての威勢もなかなか振るわず、上総の属州ともなってしまったのかも知れません。

ですが、仮にそうだとしても、それだからこそ今、こうして訪ねられてもいる、ということ。忌部たちの足跡が、それほど変わることなく残っている、ということ。

海岸部と山ばかりで、農地としてはあまり期待できなかったであろうことは、訪ねて周った今ならば、何となく理解できます。大きな風車が回る莫越山神社界隈の水持ちの悪さも、あちこちに残る溜池も。

延喜式主計寮に残る租税内容にしても、上総に課せられていたものとの差はあまりにも大きい。

安房国【行程上卅四日、下十七日】

調、緋細布十二端、細貲布十八端、薄貲布九端、縹細布二百五十端、鳥子鰯、都都伎鰯各

廿斤、放耳鰻六十六斤四兩、著耳鰻八十斤、長鰻七十二斤。自餘輸細布、調布、凡鰻庸、輸海松四百斤。自餘輸布。

中男作物、紙、熟麻、藁、紅花、堅魚、鰻。

上総国【行程上卅日、下十五日】

調、◆二百疋、緋細布廿端、薄貲布百十四端、細貲布六十三端、小堅貲布五十一端、紺望陀布五十端、縹望陀布七十三端、縹細布三百八十端、望陀貲布百端【長八丈、廣一尺九寸】、貲布一百八端、自余輸望陀布、細布、調布、鰻。

庸、輸布。

中男作物、麻二百斤、紙、熟麻、白暴熟麻、藁、紅花、漆、芥子、雜醋、鰻、凝海藻。

「延喜式 卷二十四 主計寮上」一部再引用

※◆糸偏に施の旁の表記です。

皮肉なことに、この地に麻を賣した忌部の功績は、上陸地の安房よりも上総に大きな恵みを授けました。…いや、むしろ、それこそが忌部の底力があつてこそ、なのでしょう。奥地へ、より奥地へ、と開拓を進めた結果であり、その開拓の助けとなったものは、他でもない技術者集団・忌部氏の業。

きつと彼らには、安房だ、上総だ、などという小さな考えなどなく、あつたのは大八島国、あきづしまやまと。日本という国のすべてに、寄与することを。それこそが彼らの誇りであり、そして開拓を支えた原動力ともなったことでしょう。…ならばもう、ずつとずつと後世を生きる者があれこれ考えてしまうことなど、無粋にして邪推ではありませんか。するべきは、ただこの安房国に今

なお息づく、かつての断片たちへ感謝を込めて、謡って書くだけです。…それだけを胸にまた、わたしは帰りましょう。

最後になってしまいましたが、安房に限定しない、すべての忌部氏の中には、万葉歌人もいます。忌部首黒麻呂。四首、採られていますね。残念ながらわたしが手繰れる範囲の忌部氏の系譜の中には、彼の名前を見つけることは出来ませんでした。

題詞：忌部首黒麻呂の遅く来るを恨る歌一首

山の端にいさよふ月の出でむかと我が待つ君が夜はくたちつつ

忌部首黒麻呂「万葉集 卷六―一〇〇八」

秋田刈る仮廬もいまだ壊たねば雁が音寒し霜も置きぬがに

忌部首黒麻呂「万葉集 卷八―一五五六」

梅の花枝にか散ると見るまでに風に乱れて雪ぞ降り来る

忌部首黒麻呂「万葉集 卷八―一六四七」

題詞：夢の裏に作る歌一首

あらし田の鹿猪田の稲を倉に上げてあなひねひねし我が恋ふらくは

右の歌一首は、忌部首黒麻呂が夢の裏に此の恋の歌を作りて友に贈り、覚きて誦習せしむる前の如し

忌部首黒麻呂「万葉集 卷十六―三八四八」

長くなるので引用は割愛しますが、続日本紀にも彼が天平宝字二年（七五八年）八月に正六位上より従五位下になったこと。翌天平宝字三年（七五九年）十二月には首から連に改姓したこと。天平宝字六年（七六二年）一月には、図書寮の内史局助になったこと、などが認められます。

同時代の忌部氏で、系譜として辿れるのは広成老の大叔父に当たる忌部鳥麻呂（広成老の祖父・忌部虫名の弟。日本書紀の編纂者の一人・忌部子首の孫）ですか。いずれにしても、忌部首の祖は子首の曾祖父である忌部豊止美。そして、忌部子首は忌部宿禰の祖となりますから、恐らくは子首の父・佐賀斯の弟たちの曾孫あたりではないか、と推測しますがいかがでしょうか。

また、忌部首ではあれど、個人が誰かは特定できていないものも一首。こちらも黒麻呂のもではないか、という説は複数見えています。

題詞：忌部首、数種の物を詠む歌一首「名は忘失せし」

からたちと茨刈り除け倉建てむ屎遠くまれ櫛造る刀自

忌部首「万葉集 卷十六ー三八三二」

ともあれ、黒麻呂のものと特定できる四首です。…いやいや、いまだ奈良に都があつた頃に詠まれたであろう歌としてはかなり技巧的ですし、何と言いますか。もう平安初期のもののようにですね。それこそ、小倉百人一首の歌番号二十番までに収められていてもおかしくないような風情です。率直に意外。広成老のあの愚直な印象とは随分、遠いですね…。

同時期を代表する万葉歌人と言えば、もちろん大伴家持なのですが、個人的には家持の方がずっと万葉調に感じられてしまうのですけれども。恐らく、神職でもなく、政治家でもなく、氏族の嫡流でもまたなかった、中級官僚ゆえの歌境なのかもしれません。

そして都は長岡京へ、さらには平安京へ。天平すらも遠く、古く、去っていったのでしよう。



日が沈む直前の浮島周辺の海。

都路を遠みか安房のおほそらに見ゆるいにしへつちにほふ国

遼川るか

（於…安房国国分寺跡）

名残惜しさはいまだ尽きず、それならば最後にまた、浮島を眺めてゆこうと思います。

後記

過去、故地を訪問してから脱稿までに最も時間がかかってしまったのは「あきづしまやまとゆ・式」です。確かあの時は、パソコンのハードディスク・クラッシュで、書き溜めていた後半が、完全に失われるというアクシデントと、そこから再度、書き始めるまでに要した時間の結果だった、と。…その間に、足柄・竹生島・甲斐などを書き上げてしまっていますからね。期間にして、三年半でした。

ですが、それよりもずっと長く掛かってしまったのが本作「しながとりあはゆ」です。最初の安房訪問が二〇〇九年の七月、そしてこの後記を書いているのは、二〇一四年も暮れようとしている今日です。実に五年も眠らせてしまい、本当に安房国には申し訳ないことをしてしまった、と思っています。

「あきづしまやまとゆ・式」はそれでも、他のものを書いていたのに対し、本作は眠らせてしまっていた理由が全く異なります。掌編としての「ももきねみのゆ」こそは書きあげましたが、それとてもう四年も前のこと。ならばこの間は何をしていたのか、と言えば

「何もしていなかった」

としか答えられません。本当に、古歌紀行文どころか、日々の雑詠すらも滞ってしまい、歌から、旅から、上代文学から、自身が遠ざかってゆくことへのかすかな恐怖と、たくさんのもどかしさが募っていた五年間でした。

それだけに、本作を脱稿できた今、嬉しさよりも安堵の気持ちだが、ただただ自身の中に溢れています。拙宅のある神奈川に近いからでしょうか。実は二〇〇九年七月よりもさらに前。作中でも少し触れていますが、杳見の莫越山神社だけは、訪ねています。それが、確かめるに二〇〇六年の九月のことですか。…今となつてはもはや、自身の日記と個々の画像の撮影年月日だけが頼り、という状態なのですけれども。

「なつそひくうなかがたゆ」を脱稿した勢いで、次は安房国を。そんな、シンブルな動機から始めて、足掛け八年にも渡って、訪ねては去り、去っては訪ねた、しながとりあは。けれども訪ねるたびに、それまでは見えなかった、新しい表情を見せ続けてくれたこの国の懐の深さを、本作を書きながら何度も噛み締めていました。

作中では扱いませんでしたが、故地としてではなく、純粹に観光と言いますか、歌材を求めるという意味での寄り道も、また多かったですね。野島崎灯台と、房総半島最南端の碑、それから千葉県指定の天然記念物・屏風岩などなど。

屏風岩周辺では、プラスチックのボウルを片手に海苔、でしょうか。海藻類を採っていた地元の方の姿がとても印象的でした。…可笑しいのがその屏風岩周辺の画像でして、何故かそれらを写したもののばかり。肝心の屏風岩そのものが写っていません。

不思議なことに、自身にとって思い入れが一番ある訪問地は、浮島と洲崎神社のはずなのに、訪問回数では杳見の莫越山神社が、四度の安房訪問で四回。つまり毎回訪ねていまして、続いて洲崎神社と浮島が三回ずつ。二回訪ねたのは、安房神社と宮下の莫越山神社だったはずです。

…いや、現実的なことを言いますと、書きながら足りない画像に次々気づいてしまう、という台所事情でして。都合四度目の杳見の莫越山神社訪問時に關しては、その周辺の風車を撮りたかった、というのが実際のお話。最後の安房訪問は、後拾遺にも書きましたけれど安房国の空気をもう一度感じることに、写真を撮ることだけが目的だったものですか。

なので、そこでまさか主基斎田址と国分寺跡に辿り着けるとは…。あの時、どれだけ思ったことでしょうか。

「ありがとう。ありがとう、しながとり安房。待っていてくれて、本当にありがとう…」と。

これだけの時間が経過してしまうと、訪問時とは変わってしまったているものもあります。奥州白河藩主老中・松平定信による洲崎神社の扁額は、架け替えられたようで、現在は藤平某という方の作になっていました。安房神社で、布良崎神社の場所を教えていただいたコミニティ・センターのような施設は現在、お茶も飲める休憩所です。あるいは、わたしが知らないだけで、それぞれへの最後の訪問時とは、他にも変わったものが、きつともつとあることでしょう。

それも含めて、作中の時制はあくまでも訪問時のもの、として統一していますこと、ここにお断りいたします。

これだけの時間が流れて、安房同様に産まれることを待っていてくれる土地が、旅が、もう一つ、…いや。厳密には二つなのですが、わたしの中にあります。暮れてゆく二〇一四年。叶うのならば、来るべき二〇一五年には、そちらの旅も書き上げられますように。

そして、すべての皆様にとって二〇一五年が幸多きものとなりますことを、心から願いつつ筆を擱かせていただきます。

本当にありがとうございました。

二〇一四年十二月二十四日

遼川るか
拝

本稿を書くにあたり、参考にさせて戴いた文献・WEBサイトを以下に記します。

●万葉集関連

- 「万葉集検索データベース・ソフト」 (山口大学)
- 「萬葉集」(一)～(四) 高木市之助ほか 校注 (岩波日本古典文学大系)
- 「新編国歌大観準拠 万葉集」上・下 伊藤博 校注 (角川文庫)
- 「新訓 万葉集」上・下 佐々木信綱 編 (岩波書店)
- 「万葉集」上・中・下 桜井満 訳注 (旺文社文庫)
- 「万葉集ハンドブック」 多田一臣 編 (三省堂)
- 「万葉ことば辞典」 青木生子 橋本達雄 監修 (大和書房)
- 「万葉集地名歌総覧」 樋口和也 (近代文芸社)
- 「万葉集辞典」 中西進 著 (講談社)
- 「初期万葉歌の史的背景」 菅野雅雄 著 (和泉書院)
- 「古代和歌と祝祭」 森朝男 著 (有精堂出版)
- 「万葉集の民俗学」 桜井満 監修 (桜楓社)
- 「万葉集のある暮らし」 澤柳友子 (明石書店)
- 「万葉の植物 カラーブックス」 松田修 (保育社)
- 「万葉集大成」(一)～(二〇) (平凡社)

●古事記

- 「古事記」上代歌謡 (小学館日本古典文学全集)
- 「新訂 古事記」 武田祐吉 訳注 (角川文庫)
- 「古事記」 倉野憲司 校注 (岩波文庫)

● 日本書紀

「日本書紀」上・下 坂本太郎ほか 校注（岩波日本古典文学大系）

「日本書紀」上・下 宇治谷孟 校註（講談社学術文庫）

「日本書紀」（二）～（五） 坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋 校注（岩波文庫）

● 続日本紀

「続日本紀 蓬左文庫本」（二）～（五）（八木書店）

「続日本紀」青木和夫ほか 校注（岩波新日本古典文学体系）

「続日本紀」上・中・下 宇治谷孟 校註（講談社学術文庫）

「続日本紀」（二）～（四） 直木孝次郎 他 訳注 平凡社（東洋文庫）

● 日本後紀

「国史大系 日本後紀 新訂増補 普及版」 黒板勝美 国史大系編修会（吉川弘文館）

「日本後紀」上・中・下 森田悌 訳注（講談社学術文庫）

● 続日本後紀

「国史大系 続日本後紀 新訂増補 普及版」 前・後 黒板勝美 国史大系編修会（吉川弘文館）

「日本後紀」上・下 森田悌 訳注（講談社学術文庫）

● 日本文徳天皇実録

「国史大系 日本文徳天皇実録 新訂増補 普及版」 黒板勝美 国史大系編修会（吉川弘文館）

● 日本三代実録

「国史大系 日本三代実録 新訂増補 普及版」 前・後 黒板勝美 国史大系編修会（吉川弘文館）

● 常陸国風土記

「風土記」 秋本吉郎 校注（岩波日本古典文学大系）

「風土記を読む」 中村啓信 谷口雅博 飯泉健司 編（おうふう）

- 「風土記」 吉野裕 訳（東洋文庫）
- 「常陸国風土記」 全約注 秋元吉徳（講談社学術文庫）
- 伊勢国風土記逸文
 - 「風土記」 秋本吉郎 校注（岩波日本古典文学大系）
 - 「風土記を読む」 中村啓信 谷口雅博 飯泉健司 編（おうふう）
 - 「風土記」 吉野裕 訳（東洋文庫）
- 先代旧事本紀
 - 「先代旧事本紀 訓註」 大野七三 編著（批評社）
 - 「先代旧事本紀の研究 校本の部」 鎌田 純一（吉川弘文館）
- 古語拾遺
 - 「古語拾遺」 西宮一民 校注（岩波文庫）
 - 「『古語拾遺』を読む」 青木紀元 監修（右分書院）
- 高橋氏文
 - 「高橋氏文注釈」 上代文献を読む会 編（翰林書房）
- 新撰姓氏録
 - 「新撰姓氏録の研究」 佐伯有清（吉川弘文館）
- 和名類聚抄
 - 「和名類聚抄の文献学的研究」 林忠鵬（勉誠出版）
- 系図関連
 - 「古代豪族系図集覧」 近藤敏喬 編（東京堂出版）
- 延喜式
 - 「延喜式」 国史大系編修会（吉川弘文館／国史大系十九～二十一）

「日本古典全集 延喜式」(一)～(四) 與謝野寛・正宗敦夫・與謝野晶子編纂 (現代思想社)

「延喜式」虎尾俊哉 著 (吉川弘文館)

「延喜式祝詞教本」(神社新報社)

●養老令など律令関連

「註解養老令」 会田範治 著 (有信堂)

「律令制と古代社会」 竹内理三先生喜寿記念論文集刊行会 (東京堂出版)

●神社全般

「平成『祭』データ」全国神社祭祀総合調査 CD-ROM 神社本庁 (神社本庁)

●古代歌謡

「記紀歌謡集」 武田祐吉 校註 (岩波文庫)

「古代歌謡」 土橋寛・小西甚一 校註 (岩波日本文学大系)

「上代歌謡」 高木市之助 校註 (朝日新聞日本古典選)

「日本の歌謡」 真鍋昌弘・宮岡薫・永池健二・小野恭靖 編 (双文社出版)

「古代和歌史研究」 伊藤博 (塙書房)

「古代和歌の発生―歌の呪性と様式―」 古橋信孝 (東京大学出版会)

「歌経標式―注釈と研究―」 冲森卓也 佐藤信 平沢竜介 矢島泉 (桜楓社)

●上代語

「古代の声 うた・踊り・ことば・神話」 西郷信綱 (朝日選書)

●和歌全般

「新編国歌大観 CD-ROM」 監修 新編国歌大観編集委員会 (角川学芸出版)

「時代統合情報システム」 <http://tois.nichibun.ac.jp/>

●安房国全般

「房総の万葉」 池田重 編著 (新典社)

「房総の古社」 菱沼勇・梅田義彦 著 (有峰書店)

「古代房総文化の謎」 石井則孝 著 (新人物往来社)

「千葉県の歴史」 小笠原長和・川村優 著 (山川出版社)

●安房神社

「安房神社HP」 <http://www.1.ocn.ne.jp/~awajinja/index.htm>

●洲崎神社

「洲崎神社HP」 <http://www.sunosaki.info/page/1.php>

●忌部氏全般

「神紋と社家の姓氏」 http://www.harimaya.com/o_kamon/1/syake/sh_south.html

「おとくに」 <http://www.17.ocn.ne.jp/~kanada/index.html>

●丸子連

「古樹紀之房間」 <http://www.11.ucom.ne.jp/hetoye/15/index.html>

●洲宮神社縁起関連

「南房総データベース」 <http://furusato.mbit.or.jp/>

「房総の古社」 菱沼勇・梅田義彦 著 (有峰書店)

●古東海道全般

「神奈川の東海道」 上・下 神奈川東海道ルネッサンス推進協議会 (神奈川新聞社)

●月の沙漠関連

「日本の唱歌」 金田一春彦 安西愛子 (講談社)

● ヒルムシロ／スベリヒユ

「ポケット図鑑 日本の野草・雑草」 日野東 平野隆久（成美堂出版）

● カイツブリ

「原色日本野鳥生態図鑑―水鳥編」 中村登流 中村雅彦 著（保育社）

「SUNTORY HP」 [ttp://www.suntory.co.jp/?ke=hd](http://www.suntory.co.jp/?ke=hd)

「NATURE PHOTO GALLERY」 [ttp://www.111.famille.ne.jp/~ochi/index.html](http://www.111.famille.ne.jp/~ochi/index.html)

● 枕詞全般

「枕詞と古代地名」 勝村公 著（批評社）

● 辞書類

「時代別国語大辞典 上代編」 上代語辞典編修委員会編（三省堂）

「古語大事典」 中田祝夫 和田利政 北原保雄 編（小学館）

● 地図

「YAHOO JAPAN 地図」 [ttp://map.yahoo.co.jp/](http://map.yahoo.co.jp/)

※参考サイトのURLは冒頭のhを省略していますよし、アクセスの際はその修正を各位、お願い申し上げます。

二〇〇六年九月十三日	安房国杵見の莫越山神社・上総国玉前神社参拝
二〇〇九年七月十九日	安房国訪問
二〇一〇年一月十六日	安房国再訪
二〇一〇年一月二十三、二十九日	執筆開始のち中断
二〇一三年十一月十六日	安房国再々訪
二〇一三年十一月十七、十二月六日	執筆再開のち中断
二〇一四年八月十三、十二月十五、二十、二十三日	執筆再々開
二〇一四年十二月二十四日	遼川るか公式サイト瓊音にて掲載開始